貴家族

緒綬褒章受賞者

故 谷岡スエ刀自

明治三年二月二十五日生
大阪市浪速区恵美町二丁目十一番地

略歴

市井の砂たる一婦人の身を以て、夫に仕へては温良貞淑の誉高く、能く家を治めて内助の功を挙げ、夫君の歿後は、雄雄しくも子女の教養に勝むると共に、家産を振りて而も屢〻公共事業に巨額の資を献じ、一堂開宗奉公の志を忘れざる谷岡スエ刀自の如きは、洵に常代挙に絶る巾幗界の亀鑑と称すべし。

刀自は大阪府西成郡九条村大字九条、大阪谷常七氏の二女として、明治三年二月二十五日を以て呱々の声を揚ぐ。幼性温柔にして学を好み、且に同村の池屋塾に学び、学を修むること六年、同二十四年二月二十二歳の時、当時大阪市西区南堀江二番町に於て、未亡谷岡岩次郎氏に嫁し、副来内助の功顕るる多く、同三十五年十二月、同市西区九条通二丁目に移り、家運頓〻栄ゆ。大正五年四月夫岩次郎氏病を以て歿するや、副来寡ら一女の養育に努むる傍ら、鋭手腕く波業の経営に当り、其の間貸家を買収、増造して家産の増殖を図る等、有髪男子を厭若たらしむるの業績を挙ぐ。後家業を廃して、浅香町西二丁目十一番地なる現住の地に奈良市杉岡町西田市太郎氏の四男孫二郎氏を迎へて一女千代栄氏の婿養子となし貸家業を譲み以て今日に至る。

具に公共の念に厚く、大正十二年九月関東大震災救援費をして金五百圓、昭和三年十一月大阪市大典記念事業資金として、養子孫二郎氏名義を以て、金一千五百圓を寄附し、又昭和四年三月、日本赤十字社大阪支部消防改善費として、金一萬圓を寄附したる嚢に依り、同年五月九日勅定の緒綬褒章を下賜せらるゝの光栄に浴したるを始め、同十年十月恩賜財団済生会大阪支部救療費として金一萬圓を寄附し、重ねて同褒章を賜り、更に昭和十二年二月、大阪府立市岡高等女学校基本財産として金萬圓、同年三月、大阪市市岡第三尋常高等小学校基本財産として金一萬圓、同十三年三月、済生会大阪支部褒金として金一萬圓を夫々寄附し、各緒綬褒章に附すべき飾版を下賜せられ、家門の栄誉を輝かせり。其の他各種の社会事業を篤賛して、之に私財を致したること挙げて数ふべからず。刀自が隣人の敬愛を享けつゝある洵に所以ありと言ふべし。

緒綬褒章受賞者

故 山田幸吉氏

明治十年十一月十二日生
前同市曾根町三二三

略歴

氏は東京市日本橋区下槇町に生る。具に志を立てて北海道に出で貿業に従事し、日夜粉骨砕身の精励を続け、五十歳にして愈〻盛運の緒言を見たるが、これより先、大正十二年九月関東大震災の際、同年十一月十一日下し賜へる大額に

で、養子孫二郎氏名義を以て、金一千五百圓を寄附し、又昭和四年三月、日本赤十字社大阪支部病院改築費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、同年五月九日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴したるを始め、同十年十月恩賜財團濟生會大阪支部救療費として金一萬圓を寄附し、重ねて同褒章を賜り、更に昭和十二年二月、大阪府立市岡高等女學校基本財産として金萬圓、同年三月、大阪市市岡第三尋常高等小學校基本財産として金一萬圓、同十三年三月、濟生會大阪支部資金として金一萬圓を夫々寄附し、各紺綬褒章に附すべき飾版を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。其の他各種の社會事業を翼贊して、之に私財を致したること擧げて數ふべからず。刀自が隣人の敬愛を享けつゝある洵に所以ありと言ふべし。

山田幸吉

國民振興新聞社長、國民振興會々長、室蘭司法保護會理事長、室蘭司法保護委員、司法省囑託保護司

紺綬褒章受賞者

勳八等　山田幸吉氏

明治十年十一月十二日生
室蘭市常盤町三二三

略歴

氏は東京市日本橋區下槇町に生る。夙に志を立てて北海道に出で實業に從事し、日夜粉骨碎身の精勤を續け、五十歳にして愈々業礎の搖ぎなをを得たるが、これより先、大正十二年關東大震火災の直後、同年十一月十一日下し賜へる大詔に感激し、大詔の大精神を奉戴して終生一意專心社會事業並に教化事業に邁進せんことを決意し、一切の營利的事業を放擲して精神運動に滅私の至誠を投ずることとはなれり。

斯くて氏は先づ國民振興會を結成して自ら社長となり、國民精神の昂揚に勉め、更に國民振興新聞を發刊して、啓蒙指導に邁進、刻苦淬礪の奮鬪を持續して倦むところを知らず、遂に北海道に於ける社會事業家、教化事業家の代表的人物として景仰せらるるに至り長くも皇太子殿下御降誕記念事業として昭和九年全國教化事業家大會開催せらるゝや北海道代表として出席し時の總理大臣齋藤實子より選奬され翌十年十月には北海道代表社會事業家として岡田總理大臣の招待を受けたるのみならず同十一年十月六日北海道行幸に際しては各種褒章拜受者として長くも龍顏に咫尺し奉るの光榮に浴せり。

氏の斯業に對する功績は、これらの光榮によりて證するに餘りあれど、氏が大正十五年早くも國民歌を作詞し廣くこれを頒布宣傳して國民士氣の振作を圖りたる一事は、最近に於ける國民精神昂揚運動の勃興に鑑み、其の功勞偉大なるものありと謂ふべきなり。

氏は國民歌の作詞作曲なるや、遙々東上して明治神宮に參拜し、神宮大前に於て其の第一聲を奉唱したるが、斯くの如き熱意と眞摯の赤誠ありてこそ、初めて社會事業家、教化事業家たるの使命を克く達成し得るものにして、氏の如きは誠に斯界に於ける龜鑑たり。

今や司法省囑託保護司をも兼ね、國民指導の重責を遂行しつつも、刑餘の同胞に慈愛の情を垂れつつ再生の途を拓かしむるに渾身の努力を捧じつつあり。

昭和三年四月日本赤十字社北海道支部へ金壹萬圓寄附の廉に依り、同年十月二十四日、勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮を加ふ。

滿洲重工業株式會社監事、日本水産株式會社相談役、株式會社三星取締役

紺綬褒章受賞者

山田啓之助氏

明治三十年三月一日生

京都市上京區河原町通今出川下ル梶井町四四七番地

略歴

帝國最高學府に學びて、近代の高き教養を受け、若くして父業を繼承し、今や興隆の如き各會社に於ける樞要の地位に就き、壯年有爲の實業家として、各方面より將來の進展飛躍を囑望せられつゝある我が山田啓之助氏の如き、誠に大いに俤へざるべからざる人材なりとす。

先代啓助氏は、滋賀縣蒲生郡馬淵村の出身にして、平太夫の五男に生る。幼にして京都の一茶舗に傭はれ、刻苦精勵、零細なる資金を蓄積して、凍氷の販賣を開始し、玆に獨立の機到るや、龍紋氷室と稱して、拮据經營に任じ、製氷場を設けて、全國に三十有餘箇所の支店を置き、爾來業績隆々として巨萬の富を積む。氏は其の長男として、明治三十年三月一日を以て、京都寺町二條の邸に呱々の聲を揚ぐ。學序を經て京都帝國大學法科經濟科に學び、大正十年優秀なる成績を以て之を卒業す。之より先、明治四十五年父君の歿後を承けて家督を相續し、同時に業務の一切を繼承す。大正八年一家中心の株式組織に變更して社長に就任し、昭和三年五月四日、日東製氷株式會社と合併、次で同年九月、大日本製氷株式會社と改稱し、同時に副社長に就任す。現時滿洲重工業株式會社監事たる外、日本水産株式會社相談役、株式會社三星取締役として、業界に重きを爲しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和三年七月、京都市大禮奉祝事業費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を錄せられ、同四年八月十六日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。更に昭和七年、京都市御池尋常小學校改築費として、金一萬圓を寄附し、同年二月八日、重ねて勅定の紺綬褒章を下賜せらる。其の他昭和十三年には、軍人援護費として、金一萬圓を寄附せる外、各種の社會公益事業に賛襄して、之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進したること、枚擧に遑あらず。

氏の如き、洵に克く財を散ずるの途を知るものにして、其の篤行は衆人の模範と爲すに足るものありと言ふべし。

元北海製材株式會社々長、元北海道拓殖銀行監事

紺綬褒章受賞者

故 山口由太郎氏

文久二年八月五日生

北海道空知郡岩見澤町二條東一丁目一

略歴

氏は石川縣江沼郡瀬越村の小泉宗小島庄領計氏の次男に生る。長じて山口宗次郎氏の養子となり、同氏長女ゆき興氏と婚姻す。養家に入りたる氏は質勤たる雄志を抱きながらも家業たる農に從事せしも、後分家して一家を創立し、他郷に名

（元北海製材株式會社々長、元北海道殖產銀行頭取）

褒賞者

故 山口由太郎氏

文久二年八月廿日生
北海道空知郡岩見澤町二條東一丁目一

略歷

氏は石川縣江沼郡潮津村の小島家小島庄槇計氏の次男に生る。長じて山口宗次郎氏の養子となり、同氏長女勝井與氏と婚姻す。養家に入りたる氏は勤勉たる性格を揮きながらも家業たる農に從事せしも、後分家して一家を創立し、他郷に名を成すの決意を固む。時に明治二十九年、氏三十五歲の時なりき。

當時日本海沿岸の諸縣民にして北海道開拓の雄圖に從ひて名を成す者多かりしが、氏も亦北海に勇躍渡航して身を立つるに加かずとなし、岩見澤町にささやかなる店舖を構へて漁業を創業す。同地にいまだ定住者なかりしため、漁場整ひにしてあり、自家漁獲のみを以て供給に應じ得ざる盛況を呈せり。

氏は農耕の良好なるに安んぜず、自ら漁場に入りて研鑽を積み、漁具品の改造に專念、製造方法また入心に投合したるため、經營にして芳醇なる清酒は各々歡迎され、北海道中部地方一帶に聲價を高めるに至り、年年販路を增すの盛況を極めたり。

業績愈々堂に入るや、氏は家業に精勵する傍ら、地方殖產の興隆に意を用ひ、北海道銀行株式會社を設立して社長たり。更に金融機關の整備擴充を期して北海道殖產銀行を創立し頭取の重責に就く等、岩見澤町今日の發展は、氏の渾身的努力に負ふところ極めて多し。

氏はまた岩見澤町會議員、同商工會々頭、消防組會頭防組頭、岩見澤土功組合議員、同信用組合監事等を歷任し、公人としての功績卓からず、また社會公共に率ふるの念厚く、夙に貧困局織機、北海道長官、北海土功組合長、長沼村長等より表彰せられ、受賞また枚擧に遑あらず。

一小農より身を起し刻苦勉勵克く初志を貫徹して大を成すに至りたる氏の如きは、洵に立志傳中の偉材にして業の範となすに足れり。

大正十一年十一月岩見澤中學校々舍新築費として金貳萬圓を寄附せし廉に依り、同十二年九月二十四日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。同十三年九月歿す。享年六十三。

長男宗太郎氏家督を相續、家業を繼ぎ清酒、味噌、醬油類の釀造に精勵しつつあり。

社會事たる外、日本水產株式會社相談役、株式會社三星取締役として、業界に重きを爲しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和三年七月、京都市大禮奉祝事業費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其の功を錄せられ、同四年八月十六日、勅定の緒綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を歸かせり。更に昭和七年、京都市柳池尋常小學校改築費として、金一萬圓を寄附し、同年二月八日、重ねて勅定の緒綬褒章を下賜せらる。其の他昭和十三年には、軍人援護費として、金一萬圓を寄附せる外、各種の社會公益事業に寄贊して、之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進したること、枚擧に遑あらず。

氏の如き、洵に克く財を散ずるの途を知るものにして、其の施行は恰人の機能と爲すに足るものありと言ふべし。

山田藤一

山田セルロイド製品株式會社、山田セルロイド加工株式會社各代表取締役、鈴鹿商店代表社員、セルロイド素地及び製品販賣業

紺綬褒章受賞者

山田藤一氏

明治二十八年三月六日生

住所　大阪府布施市東高井田四五ノ九

營業所　大阪市東成區猪飼野大通三ノ五二

略歴

氏は兵庫縣人山田惣兵衛氏の長男、兵庫縣揖保郡龍野町育内に生る。山田家は播州銅干鉄吹八軒仲間中屈指の家柄なりしが、氏初等教育の課程を卒るや、上級學校への進學を斷念して、大日本セルロイド株式會社網干工場に勤務することとなれり。

聰明明晰にして、頭腦明晰なりし氏は、克く事務に精勵して勤勉なりしかば、忽ち重役の認むるところとなり、其の支援によりて神戸市神港商業學校に學ぶの途を拓くを得たり。

商學の志能ゆるがざりし氏も、家計不如意のためやむなく工場に勤務しゐたることとて、重役の仁愛に感激く餘はざるものあり、晝夜を惜むるに勉めて成劍なるものあり、爲つて成績常に勝を被き、その將來を嘱目さる。

優秀なる成績を以て神港商業を卒業するや、先づ學校當局の推薦によりて、當時銀行神戸支店に勤務せしが、同支店に在ること約二ケ年にして、日本セルロイド株式會社代理店たりし鈴鹿商店に轉じ、關係に懇劃ある重役に報ひんことを期せり。

鈴鹿商店に入るや、忠實の至誠を以て店務の遂行に努力を役じ、大いに手腕を認められしが、不幸同店の業績香しからず、遂に破綻の危機に瀕するや、氏は敢然これが建直を受け業務の一切を擔承して自ら代表社員たり。業態不振の鞏根を除くと共に、積極的方針を以て業容の改革刷新を斷行し、氏が主宰することと爲何もなくして、愛々鈴鹿商店を再興せしめ業績良好を加へ業界の信頼を博するに至れり。

業績全く確立し餘力を生ずるや、セルロイド製品の製造を目的とする山田セルロイド製品株式會社、山田セルロイド加工株式會社の二社を起して代表取締役たるほか、今や氏は播磨造業、合資會社片岡セルロイド工業所、駒子製造業合資會社龍登製鋼店、紡績機械附屬品製造業旭工業所の、經營に參畫して、斯業の伸展に邁進して專日なし。

昭和十四年五月日本赤十字社兵庫支部篤業賞として金壹萬圓を寄附せし歴に依り、同年八月一日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

山口安兵衛氏

明治十五年十二月二十八日生

東京府南多摩郡淺川町上柏田一五二八

略歴

山口家の祖は武家にして、四國阿家を奉敬すること久しきにわたる。安兵衛氏一家連名のうちに、東京府南多摩郡由木村字堀之内に生る。

淺川郵便局長、同町會議員、信濃味噌醸造業

淺川郵便局長、同町會議員、醤油味噌醸造販賣業

紺綬褒章受賞者

山口安兵衛氏

明治十五年十二月二十八日生
東京府南多摩郡淺川町上柏田一五二八

略歴

山口家の祖は武家にして、四隣同家を尊敬すること久しきにわたる。安兵衛氏一家盛名のうちに、東京府南多摩郡由木村字堀之内に生る。

幼にして英俊、專ら學業に勵み衆に範たり。家業たる醤油味噌の醸造販賣を扶くる傍ら、常に時代の進運に即應して身を處するの途を謬たず、社會公共に奉ぜんことを期して、必要知識の吸收と人格の陶冶に怠ることなかりき。

淺川町の地大東京に接し帝都の近郊として日進月歩發展を遂げ、また交通上の要衝として文化の發達頓みに急激なるものあり、特に大正天皇の御陵地として聖域を拜するに至りて更にまた大なる使命を擔ふに至れり。

氏は鄕黨として重要地位にあると、土地の由緒と將來性に鑑み、先づ淺川郵便局を開設するの要あるを痛感し、當局に申請してこれが許可を得るや、自ら局長となりて通信事務の高全を期し文化發展に資するところ尠からざりしのみならず同町信用組合長の重職に就くや、町民の經濟的生活の更新を圖り、商家發展の基礎を促進し、個人的生活の向上を招來せしむると共に産業振興の基調を確立せり。氏はまた久しきにわたりて、淺川町々會議員、同學務委員たり。自治の發展教育の伸長に寄與せし功績沒すべからざるものあり。淺川町が整然たる近代都市美を發揮し、教育施設整備して東京近郊に於ける範たるを得たるは、氏の努力に負ふところ極めて多し。氏が南多摩郡教育會長に推されたるは決して偶然にあらず、氏の過古の功績に酬ひ、更に將來を期待する衆望の然らしめたるものと謂ふべし。

今や時局下にありて、同郡經濟更生會委員、護國貯金地方委員、淺川町防空委員の要職にありて、國家的事業に寫實協力の至誠を披瀝して、所謂臣道實踐に垂範の精神を持續しつつあり。

昭和三年十月東京府南多摩郡淺川尋常高等小學校敷地として、土地一町一段四畝九歩を寄附せし廉に依り同年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

鈴鹿商店に入るや、忠實の至誠を以て店務の遂行に努力を投じ、大いに手腕を認められしが、不幸同店の業績香しからず、遂に破綻の危機に瀕するや、氏は敢然これが讓渡を受け業務の一切を繼承して自ら代表社員たり。業績不振の禍根を除くと共に、積極的方針を以て業容の改革刷新を斷行し、氏が主宰すること幾何もなくして、愛々鈴鹿商店を再興せしめ業績良好を加へ業界の信認を博するに至れり。

業礎全く確立し餘力を生ずるや、セルロイド製品の製造を目的とする山田セルロイド製品株式會社、山田セルロイド加工株式會社の二社を起して代表取締役たるほか、今や氏は櫛製造業、合資會社片岡セルロイド工業所、刷子製造業合資會社能登屋商店、紡績機械附屬品製造業旭工業所の、樞機に參畫して、斯業の伸展に邁進して寧日なし。

昭和十四年五月日本赤十字社兵庫支部事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年八月一日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

株式會社本山商店社長、本山合名會社々長、

紺綬褒章受賞者

本山政一氏

明治十年四月八日生
埼玉縣北埼玉郡忍町

略歴

氏は長野縣人本山和喜十氏の男にして長野縣松本在に生る後本山龜吉氏の養子となる。由來長野縣はわが國における有數なる教育發達の縣として知らる。もちろん本山政一氏が誕生の產聲をあげたる明治十年頃にありては、明治維新の直後にして、世情なほ騷然たるものあり。諸政漸くその緒につきたりと雖も、議論百出して朝令暮改頻り。政府の根本方針定まるも、その實施區々にして地方人心の動搖常ならず、豈んや長野縣の如き僻地にありては、なほ舊幕時代の舊慣に染みて維新大政の何物たるやを解するもの極めて尠き狀態にありしが、先賢先哲漸次續出し、鄕黨を啓蒙指導して、所謂文化の向上を促進せしむると共に世界の大勢を說きてわが國の歸嚮するところを明示すること、他の地方に勝るに至りしかば時代的黎明の警鐘に反省的自奮を促されたる長野縣民は、政一氏が何らの障碍を受くることなく、堂々の進路を辿りて成長するの快調と、その步調を合せて前進し爾來時代の變遷に伴ひてなほ其の卽應を誤らず常に指導推進に其の人よろしきを得たるため、遂に文化の程度に於て首位を占むるの榮光を贏ち得たり。長野縣が文化縣として全國に誇り得るに至りたる足跡は、明治十年時代にその生を長野縣にうけ、順調なる成育をとげたる一個の人間の足跡とその軌を等しくするものにして、本山政一氏の足跡はまた長野縣發達史を譜するに足るものと謂ふも敢て過言にあらざるなり。

全國に誇るに足る文化縣長野縣に生れ、しかも時代的風潮に惠まれ成育の步調を縣の發展と等しくするを得たる氏の如きはまことに時代の幸運兒と謂ふべきなり。のち本山龜吉氏の養子となるや、養父傳來の家業を守るに忠實にして家運の興隆に資するところあり、家名を辱しめざるのみならず、養父の名をしてます〳〵旺んならしめ、今や餘生を國家に捧ぐるの心境に在りて職域の奉公に邁進す。洵に氏の如きは時代の幸運兒たるのみならず時局の幸運兒たり。

昭和十二年三月埼玉縣北埼玉郡忍町基本金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年八月三日勅定の紺綬褒章を紺ふの光榮に浴す。

元衆議院議員、元東京商工會議所議員

紺綬褒章受賞者

故 吉村鐵之助氏

安政五年八月一日生
東京市品川區大井鹿島町三一三二

略歴

○恩賜財團濟生會へ金壹萬貳千圓寄附せし外大津市慈惠救濟資金として金壹萬圓寄附せし廉に依り、大正九年十一月二十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○昭和五年十二月滋賀縣立大津商業學校敷地購入費として

成育をとげたる一個の人間の足跡とその軌を等しくするものにして、本山政一氏の足跡はまた長野縣發達史を證するに足るものと謂ふも敢て過言にあらざるなり。

全國に誇るに足る文化縣長野縣に生れ、しかも時代的風潮に惠まれ成育の歩調を縣の發展と等しくするを得たる氏の如きはまことに時代の幸運兒と謂ふべきなり。のち本山龜吉氏の養子となるや、養父傳來の家業を守るに忠實にして家運の興隆に資するところあり、家名を辱しめざるのみならず、養父の名をしてます〳〵旺んならしめ、今や餘生を國家に捧ぐるの心境に在りて職域の奉公に邁進す。洵に氏の如きは時代の幸運兒たるのみならず時局の幸運兒たり。

昭和十二年三月埼玉縣北埼玉郡忍町基本金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年八月三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元衆議院議員、元東京商工會議所議員

紺綬褒章受賞者

故 吉村鐵之助氏

安政五年八月一日生

東京市品川區大井鹿島町三一三二

略歷

○恩賜財團濟生會へ金壹萬貳千圓寄附せし外大津市慈惠救濟資金として金壹萬圓寄附せし廉に依り、大正九年十一月二十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○昭和五年十二月滋賀縣立大津商業學校敷地購入費として金壹萬圓寄附せし廉に依り、同六年勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

吉村鐵之助氏は滋賀縣の出身、安政五年八月一日滋賀縣大津市に生る。氏もまた、近江商人として、立志傳中の偉材たるを失はず、年少にして大阪に出で、また京都に於て商道を習得し、明治十九年上京早くも東都實業界雄飛の基礎を築けり。即ち同二十四年吉村商會を設立して、電氣機械の製造販賣を創業せしが、當時逸早く産業文化發達の推進力たる電氣機械の製造に着目したる氏の鑑眼は、氏が凡庸の材にあらざるを物語るに足るものと謂ふべし。

業礎彌々鞏固にして業績良好を加ふるや、更に業域を擴大し、明治三十九年同志と相携へて滿洲製粉株式會社を創立、日露戰爭直後に於ける滿洲飛躍の先鞭をなし、企業界並に投資界を刺戟せり。

爾來東洋無線電信電話、明昭電氣、帝國電燈、江若鐵道、大日本電球、北海道製糖、帝國製糖、相模紡績其の他諸會社の樞機に參與しわが國殖産興業に盡したるところ尠からざるのみならず、明治三十六年より大正三年に至るの長期にわたりて東京商業會議所議員たり、帝都商工業界に寄與せしところ多し。

更にまた大正六年、並に同九年衆議院議員に選ばるること二回に及び、國政に參畫して國家産業の興隆に貢献したる功績顯著なり。

氏が明治二十九年日清戰役に際し、報國の義を重んじ、複雜困難なる電氣諸機械類を製造して急需に應じたる奇特なる行爲は、頭書の輝く善行に更に一段の光輝を添ふるものたり

昭和十二年八月逝く。令孫鐵郎氏家督を相續、吉村家の當主たり。氏は慶應義塾に學び昭和六年卒業、横濱護謨製造株式會社に勤務。祖父の血を繼ぐ進取果敢の少壯實業家として將來を屬目さる。

大阪府泉南郡熊取村々長

紺綬褒章受賞者

義本　一氏

明治十年九月廿三日生
大阪府泉南郡熊取村

略歴

家業たる酒造業を營みて、地方業界に其雄を稱し、一面居村の村長としては、納税感念を普及して、村内より租税滯納者を一掃する等、地方に於ける德望家として、衆人の景仰を享けつゝあるもの、之を義本一氏と爲す。

當家の祖は茂兵衛と稱し、舊幕時代領主より苗字帶刀を許され、年寄役を勤めたる同地方隨一の舊家たり、代々茂兵衛を傳へ、曾祖父茂兵衛は京都中山大納言家に出入して、大工頭を勤めしこともありしといふ。先代茂一郎氏の代に至り明治二十七年以來酒造業を營み、最初は小規模の醸造に過ぎざりしが、年々田舍に稀なる良酒を生産するに及んで漸次著名となり、醸造高も數年を經ずして千石内外を算するに至る。時恰も日清戰役後こして、我國が一大飛躍をなしつゝあるに因み、其製酒に一等國の名を冠し、主として泉南、泉北兩郡を始め、大阪方面を確實なる地盤とし、販路更に伊勢路方面にも及べり。氏は茂一郎の長男として明治十年九月二十三日を以て生れ、長じて京都中學校に學び、卒業後は父君を援けて家業に從事す。明治三十三年僅に二十四歳の時、推されて熊取村長の職に就き、その後大正十三年再び村長に推され、爾來十年間村治に盡瘁せり。試に其一二を摘記すれば、郡内道路改修を十箇年計畫の下に實行に移して、自動車、バス等運輸の便を拓き、其他學校を始め病院、衛生、消防等の各種重要施設を完成する等實績頗る顯著なり。又熊取村戸數千四百戸内外を算し住民は多く農業を主とし、綿製品織維工業發達せる村落なるも、納税成績頗る惡しく、氏が村長に就任するや、極力此惡風の矯正を圖りたる結果、今や村内一人の滯納者を見ざに至り、思想淳朴、質實剛健なる平和鄕を現出せり。其他府會議員に二期當選せるを始め、郡内町村長會議長所得税調査委員等に擧げられ貢献する所大なり。曩に昭和七年特別大演習の砌、御用酒を仰付られ、又各博覽會、共進會等より褒狀賞狀等を授與せられたること枚擧に遑あらず。

資性溫厚にして長者の風格あり。公共公同の念に厚く、泉南郡熊取村々費として、金一萬圓寄附したる廉に依り、昭和十五年十一月十五日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せらる。

[illegible]

紺綬褒章賞賞者

山本吉五郎氏

文久元年七月生
廣島市紙本町十五番地

略歴

幼にして父を喪ひ、薄倖の家に成長し、母の慈愛深き教養の下に人と成り、長ずるに及んで奮勵努力、遂に一代にして産を積み、家名を擧げたる山本吉五郎氏の半生は、洵に立志傳の一頁を飾るに餘りあり、其德行は以て衆人の範となすに

爾來十年間村治に盡瘁せり。試に其一二を摘記すれば、郡内道路改修を十箇年計畫の下に實行に移して、自動車、バス等運輸の便を拓き、其他學校を始め病院、衞生、消防等の各種重要施設を完成する等實績頗る顯著なり。又熊取村戸數千四百戸内外を算し住民は多く農業を主とし、綿製品纖維工業發達せる村落なるも、納税成績頗る惡しく、氏が村長に就任するや、極力此惡風の矯正を圖りたる結果、今や村内一人の滯納者を見ざに至り、思想淳朴、質實剛健なる平和鄕を現出せり。其他府會議員に二期當選せるを始め、郡内町村長會議長所得税調査委員等に擧げられ貢獻する所大なり。曩に昭和七年特別大演習の砌、御用酒を仰付られ、又各博覽會、共進會等より褒狀賞狀等を授與せられたること枚擧に遑あらず。

資性溫厚にして長者の風格あり。公共公同の念に厚く、泉南郡熊取村々費として、金一萬圓寄附したる廉に依り、昭和十五年十一月十五日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せらる。

紺綬褒章賞賞者

山本吉五郎氏

文久元年七月生

廣島市銀本町十五番地

鐵道用枕木商

略歴

幼にして父を喪ひ、薄倖の家に成長し、母の慈愛深き敎養の下に人と成り、長ずるに及んで奮勵努力、遂に一代にして産を積み、家名を擧げたる山本吉五郎氏の半生は、洵に立志傳の一頁を飾るに餘りあり、其德行は以て衆人の範となすに足るものありと言ふべし。

氏は文久元年七月を以て廣島縣山縣郡戸河内村本鄕の人奥田元平氏の三男に生る。實家は代々農を業とし長男初太郎氏を頭に九人の子女あり。然るに父元平氏は氏が八歳の時三十八歳を一期として長逝し、多數の子女を殘されたる母政野氏は一時途方に暮れたるも健氣にも奮起して、纖手克く家業に精勵すると共に、子女の養育を怠らず。氏は長ずるに從ひ、母の慈愛に感ずること深く、十四五歳の頃より、兄と共に田畑に出でて農事に勵む。後先代喜平氏の養子となり材木商を開業して、拮据經營に任じ、爾來年々發展して、明治四十一年より、鐵道省へ枕木の納入を開始し、業況盛大を加ふるや大正五年廣島市に移轉し、家運更に隆々として今日に至れり。曩に多額納税者の班に列し、又東亞木材防腐株式會社取締役として重きを爲せり。鄕里に在住中大正二年戸河内村々會議員に推され、村治に貢獻する所尠からず。

公共の念頗る厚く、戸河内村内に孝子として知られたる堀田八郎が、舊藩時代に褒美として免租地五段歩を拜領所有し居たるものが、偶然轉々して氏の有に歸したる奇緣により、孝子の事蹟を永久に傳ふる爲、其地に一基の記念碑を建設し該土地に公債證金一千圓を添へて、村社及四箇寺に寄附し、又同町河本病院に時價七千圓のレントゲン一基、同町松原村に電燈架設費金五百圓、同町那須小學校敎育資金として、金一千萬を寄附したる外、大正十五年二月、廣島縣山縣郡戸河内村敎育費として、金二萬圓を寄附したる廉に依り、其功を旌せられ、昭和三年十月十二日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せらる。其他學校、日本赤十字社、日本海員掖濟會等の事業に盡し、之等に私財を投じ、又神社佛閣に淨財を寄進したること一再に止まらず。衆人、氏の德を慕ふもの彌々多き、洵に所以ありと言ふべし。

精根表章受賞者

宮崎吉次郎氏

明治二十七年十月二十三日生
小樽市新緑町東四丁目一

略歴

氏は富山縣下新川郡石田村の生れ、夙に一家と共に北海道に移住す。

氏の厳父は家郷に在りて父祖の業を継ぎ精勤怠りなかりしが、爾霊にして北海道に出で新天地の開拓に邁進する者續出するを見て、坐視するに忍びず、遂に一家を挙げて北海道に移住するに至れり。

父祖傳統の地を離れて他郷に名を成さんとするは、固遠海に臨む我が國民の共通性とも謂ふべく、また進取以て雄圖を遂成するは、男子の本懐たるを失はざるも、鄉緒たる四隣の情と朝夕に親しみたる山河に訣別して、人情風土共に異り易き異郷に移り住むの決意は、容易に成し得るものにあらず。

志操堅固にして、不撓不屈の忍耐力ある者にあらざれば、断じて決行し得ざるべく、また一家協調して家長に殉ずるの精神なくんば家を挙げて郷關を出づることは能はざるべし。

厳父ならびに一家の子弟相携へて北海道を目指したる宮崎家の如きは、蓋し一家一心の結團力を以て父祖の名を恥しめざらんことを期したるものなるべく厳父の風格一門の人格標準するに難からず。吉次郎氏また凛然たる決意のもとに厳父に從ひ、堂々たる青雲の志を抱いて北海道の土を踏みしが、父君の創業せし海産物商たるや尋常一様の努力を以てしては隆昌を得るものにあらず、日夜刻苦精勤して怠りなき父君の姿を見ては、時に嘆聲を洩すことさへありしが、其の都度自らを戒ち、父君を扶けて事日なく、渾身勉勵を挿げて家運の興隆に專念せしかば、清く、にして家業の基礎なり、一家慈顔を開くの光明を仰ぐことを得たり。

苦闘を共にしたる厳父は業志の貫徹に會心の勇を鼓し家業に精勵して倦むところを知らざりしが大正七年五月病を得て薨す。仍ち家業を継ぎたる氏は滿火業域を擴大し、海産物貿易を愛營し、廣く關東州、朝鮮、滿洲に至るまで販路を擴張し、更に昭和十年鑄鉄製造業を開始し、斯業の發展に邁進しつつあり。

昭和四年十月小樽市道路敷地として三段八畝二歩を寄附せし廉に依り、同八年勅定の精殺表章を賜ふの光榮に浴す。

開業以来堅実なる営業振を以て信用を博し、現在に至る。
本社 小樽市稲穂町西四丁目一番地
電話 三五四番
支店 札幌市南一条西二丁目
電話 三五四番
函館出張所 函館市末広町
電話 三五四番

精根表章受賞者

村山清八氏

明治十七年十一月九日生
住所 三笠鉱山日吉町
千百十九番地
電話 三笠鉱山日吉町
三五四番

略歴

ざらんことを期したるものなるべく嚴父の風格一門の人格想像するに難からず。吉次郎氏また凜然たる決意のもとに嚴父に從ひ、堂々たる青雲の志を抱いて北海道の土を踏みしが、父君の創業せし海產物商たるや尋常一樣の努力を以てしては隆昌を得るものにあらず、日夜刻苦精勵して怠りなき父君の姿を眺めては、時に嘆聲を洩すことさへありしが、其の都度自らを鞭ち、父君を扶けて寧日なく、渾身熱誠を捧げて家運の興隆に專念せしかば、漸くにして家業の業礎なり、一家愁眉を開くの光明を仰ぐことを得たり。

苦艱を共にしたる嚴父は素志の貫徹に會心の勇を鼓し家業に精勵して倦むところを知らざりしが大正七年五月病を得て歿す。仍ち家業を繼ぎたる氏は漸次業域を擴大し、海產物貿易を兼營し、廣く關東州、朝鮮、滿洲に至るまで販路を擴張し、更に昭和十年罐詰製造業を開始し、斯業の發展に邁進しつつあり。

昭和四年十月小樽市道路敷地として三段八畝二步を寄附せし廉に依り、同八年勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

四日市商工會議所常議員、村山石炭、海神組各株式會社取締役、三岐運送株式會社監査役、村山商店主、製油肥料商

紺綬褒章受賞者

正八位勳六等　**村山清八氏**

明治十七年十一月九日生

住所　三重縣四日市市濱田町四千百十九番地

營業所　三重縣四日市市築港

略歷

多年に亘り、茶、肥料、精米、運送等の各種事業を經營し明治以前より既に東海地方に於ける有數の商賈として、盛名四隣を壓するものあり。現時に至りては、主として製油肥料商を營み、各會社を創立して、之が重役として活躍し、業界に重きを爲せるもの、之を村上清八氏と爲す。

氏は中村彥八氏の子として、明治十七年十一月九日を以て生れ、村上一平氏の養子となり、後其家督を相續す。氏が丁年に達して間も無く勃發したる日露戰役に從軍し、滿洲の野に轉戰して、拔群の功を樹て、正八位に敍し陸軍少尉に任ぜらる。凱旋後養家の業を繼ぎ一意經營に任ず。當家は三重縣下に於て久しく營業を續け來り、家運隆々として、磐石の如き基礎既に成れる上、氏の如き好箇の後繼者を得て、玆に事業益々發展し、現時村山商店に製油部、製肥部を設け、又村山石炭、神海組各株式會社をも經營せる外、三岐運送株式會社監査役として、業界に縱橫の才腕を揮ひつゝある一方、曩に四日市市會議員に選ばれ、市政の爲に盡して多大の功績を貽し、又同市商工會議所議員として五期勤續し、其常議員として、同地商工會の爲に盡瘁しつゝあり。其他債務、人事調停委員を囑せられ、貢獻する所尠からず。

公共、公同の念に厚く、或は各種公益事業に盡して之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進したること枚擧に遑あらざるが、中にも宇治山田市河崎町小學校へ、二宮尊德先生の銅像を寄附したるを始め、同市同町氏神へ御手洗所を寄進同市西行谷へ芭蕉翁句碑を建設し又四日市市へ市民壇を建設寄附し、爲に四日市市並宇治山田市より、感謝狀を贈らるゝこと各二回に及び、又熱海町溫泉組合よりも感謝狀を受く。昭和九年四月、四日市諏訪公園誓之御柱國旗揭揚兼野外催事臺各一基を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同十一年四月二十一日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せらる。

村上賢二

元中央證券株式會社專務取締役、東京株式取引所
一號取引員

緒綬褒章受賞者

故　**村上賢二**氏

明治十六年十月九日生
東京市龜町區龜町一丁目五ノ二

略歴

氏は靜岡縣人椅田金藏氏の二男、靜岡縣磐田郡掛塚町に生る、齢十二歳の時、明治二十九年、横濱市に出でて輸出絹絲業西村喜三郎氏商店に入り、一小店員となる。氏の實社會への第一歩たり。盡し氏は初等の課程を終るや、向學の志を伸ぶるため上級の學校に進學するの熱意に燃えしも、環境これを許し難き狀態にありしかば、身を實業界に投じて名を成さんことを決意せしものにして、氏も亦立志傳中の逸材たるを失はず。

西村商店に入りたる氏は、主家に仕へて極めて忠實、克く辛酸勞苦に耐へ業務に精勵すると共に、餘暇を得ては只管勉學に勉め智德の涵養に怠りなかりしかば、主家の信認漸次加はり、同僚また敬愛して模範店員たるの譽れ高かりき。同店にあること約八年、すでに商道の全般を修得し、獨立飛躍の雄圖を抱くに至りしが、偶々叔父村上太三郎氏の認むるところとなり、明治三十七年同家に入りて養子となる。

叔父村上氏は東京市にて株式仲買を業としせしが、氏も亦養父を扶けて經綸の才腕を揮ひ、家業をして益々隆盛に赴かしめたり。

養父後後家業を繼承して業績の愛固を期し、意上磐石の揚ぎなきを得るや、個人經營を株式組織に變更し、株式會社村上商店を創立自ら社長の重責に就きて業界を牽引し、傍ら中央證券株式會社を起して專務取締役たりしほか、東京鐵田銀行の監機に參與して金融界へも進出、大いにその將來を囑目期待されしが、前途なほ寒秋に富むの身を以て可惜易實の悲運に遭ふ。昭和五年九月逝く。享年僅かに四十七。

氏は夙に社會公共に奉ずるの念厚く、生前私財を投じて得並せし寄特の行爲夥からず、赤十字社事業費をはじめ靜岡縣磐田中學校創立費、同揚場町大火救濟資金等を寄附して褒狀を授けられしが、就中昭和四年二月同揚場町道路正事費として金壹萬圓を寄附せし慶に依り同五年勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主村上慶三郎氏は東京府の人岩田辰五郎氏の五男、先代賢二氏の養子となる。慶應大學に學び、印刷機械製造業に從ふ。

岡山合同紙株式會社取締役

緒綬褒章受賞者

溝手一雄氏

明治四十四年九月五日生
岡山縣都窪郡早島町大字早島千四百八十九番地

略歴

御々溝手家は當年を以て十三代を數へ、三百年を關する舊家にして、古色蒼然たる門扉と、邸內數棟の老松は、一見漫ろに其舊家たるを偲ばしむ。往時同所附近一帶は、洪水の都

岡山合同貯蓄銀行員

紺綬褒章受賞者

溝手一雄氏

明治四十四年五月五日生

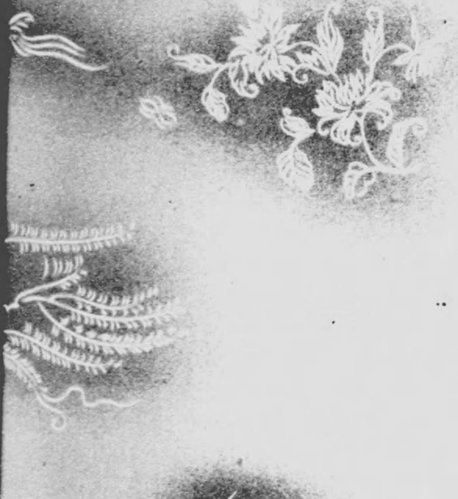
岡山縣都窪郡早島町大字早島千四百八十九番地

略歴

抑々溝手家は當主を以て十三代を數へ、三百年を閲する豪家にして、古色蒼然たる門扉と、邸内數棟の老松は、一見漫ろに其舊家たるを偲ばしむ。往時同所附近一帶は、洪水の都度荒蕪して一面泥海と化し、蘆葦を極めしが、浮田秀家巨財を投じて堤を築き、水害に備ふるに至り民憂全く去りて漸次開墾せらる。同所に現存せる浮田堤之也。當家の初代其頃より此地に居住、資力を擁して盛に開墾の業を起し、同町東部過半を其有と爲し、以來連綿として之を傳ふ。曾祖父九七郎は七代前の祖丸郎右衛門と共に最も傑出し、鄕土の事に盡す所極めて大なりしが、維新後老齢を以て他界す。祖父直次郎は父九七郎と共に濃侯に仕へ、忠勤を勵む。頗る覇氣に富める人材なりき。先代保太郎氏は明治十年三月三十日を以て生れ、同十六年一月叔父九郎平の養子となりしが、同十八年五月離縁して實家を再興す。大正十年貴族院議員に列し、岡山合同貯蓄銀行頭取、岡山農工銀行、倉敷紡績株式會社取締役たりき。頭腦精緻にして記憶力に富み、獨學にて諸學を修め、其他政治、經濟、哲學、宗教等一として通ぜざるなく、專門家を驚歎せしむるものありしと稱せらる。而も豪家に成人したるに似ず、頗る世情に通じ、思遣りの情に敎く、寛大にして本末を誤らず、溫容の裡に冒し難き貫祿を具ふ。昭和八年十一月、五十七歳にて逝去す。

當主一雄氏は、明治四十四年五月五日を以て生れ、昭和八年十一月廿五日亡父の跡を承けて家督を相續す。岡山第一中學校四年修了後、第六高等學校を經て、東京帝國大學經濟科を卒業したる秀才にして先考の重役たりし岡山合同貯蓄銀行調査課に勤務して現在に至る。先代の氣性を享けて、溫乎たる裡に胃し難き氣品あり。嗜眞、ゴルフの外、中學時代より蹴上競技に多大の趣味を有す。

公共の念亦厚く、昭和九年二月岡出郡都窪郡早島町水道開設費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、同年八月十七日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴したる外、官幣中社吉備津神社改修造營に淨財を寄進し、又日本赤十字社、恩賜財團濟生會、軍人援護會等の事業に寄與する所尠からず



蚤父歿後家業を繼承して業礎の鞏固を期し、愈よ磐石の搖ぎなきを得るや、個人經營を株式組織に變更し、株式會社村上商店を創立自ら社長の重責に就きて業界を應援し、傍ら中央證券株式會社を起して專務取締役たりしほか、東京德田銀行の創設に參與して金融界へも進出、大いにその將來を矚目期待されしが、前途なほ春秋に富むの身を以て可惜易簀の悲運に遭ふ。昭和五年九月逝く。享年僅かに四十七。

氏は夙に社會公共に奉ずるの念厚く、生前私財を投じて俳益せし寄特の行爲尠からず、赤十字社事業費をはじめ靜岡縣磐田中學校創立費、同掛塚町大火救濟資金等を寄附して褒狀を授けられしが、就中昭和四年二月同掛塚町道路工事費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り同五年勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主村上慶三郎氏は東京府の人岩田辰五郎氏の五男、先代實二氏の養子となる。慶應大學に學び、印刷帳簿製造業に從ふ。

藍、紺綬褒章受賞者

故　坂口平兵衛氏

安政元年六月九日生

紺綬褒章受賞者

故　坂口豊藏氏

明治五年一月十三日生

米子市尾高町六六

略歴

故坂口平兵衛氏は米子の人平吉郎氏の長男。資性温良夙に蠶業の振興に意を注ぎ、蠶業傳習所を設置して、養蠶製絲法の普及に努め、ついで製絲業を創め米子製絲合資會社を設立自ら社長となりて、鋭意品質の改良と製絲操業の刷新を企圖し、山陰道製絲業界に機械製絲の先鞭をつけ、漸次能率增加の新施設を整備し、斯業の進展に資する外、殖林事業を興し銀行業、電氣事業を經營して地方產業の興隆を助長し、更にまた坂口奬學館を設立して鄕土俊英の育英に努力を投じて教育を振興し、開墾、鑛業、倉庫、海運の諸事業にも不斷の精進を惜しまず、山陰道產業發展の基礎を確立したる氏の功績は偉大なり。多額納稅議員として貴族院議員に選ばれ、明治三十七八年戰役の功に依り勳四等に敍せられ旭小を賜ひ、歿後正六位を贈らる。大正五年十一月二十二日殖產興業に盡瘁したる功績により勅定の藍綬褒章を賜はり更に昭和四年五月鳥取縣立米子商蠶學校設立費金十五萬圓寄附の廉に依り昭和四年十月二十三日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴す。

坂口豐藏氏は平吉郎氏の五男にして故平兵衛氏の令弟。後長兄平兵衛氏の養子となり家督を相續す。長兄にして養父たる平兵衛氏の遺志を繼承したる氏は、山陰電氣社長、山陰製氷社長たりしほか、廣島電氣取締役、米子銀行副頭取、米子信用組合長として山陰實業界に重きを成し、亡父に劣らざる滅私の精勵は坂口家の家門をして益々光輝あらしめたり。大正十四年九月鳥取縣立米子工業學校建設費として金壹萬圓寄附の廉により昭和三年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、更に同四年四月米子市水道敷設費として金參萬圓を寄附したる廉により、同年九月十日勅定の紺綬褒章飯版壹箇を賜ふの光榮に浴す。

當主平兵衛氏は故平兵衛氏の長男にして豐藏氏の養嗣子たり。昭和五年家督を相續平兵衛を襲名。明治大學經濟學部の出身にして新進の實業家、父祖の業をして更に新時代に即應せしめ職域奉公に萬金の赤誠を投じつつある多額納稅者として縣下の名望家たり。

合名會社三宅商店代表者、機械製作並鋼商

紺綬褒章受賞者

三宅敏介氏

明治十九年八月生

大阪市西區新町通五丁目十一番地

略歴

年少僅に十七歳にして大阪に出で、異常の勤勉を以て、機械に關する工程並事務の一般を會得し、後獨立して機械製作

す。

坂口豐藏氏は平吉郎氏の五男にして故平兵衛氏の令弟。後長兄平兵衛氏の養子となり家督を相續す。長兄にして養父たる平兵衛氏の遺志を繼承したる氏は、山陰電氣社長、山陰製氷社長たりしほか、廣島電氣取締役、米子銀行副頭取、米子信用組合長として山陰實業界に事きを成し、亡父に劣らざる滅私の精勵は坂口家の家門をして益々光輝あらしめたり。大正十四年九月鳥取縣立米子工業學校建設費として金壹萬圓寄附の廉により昭和三年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、更に同四年四月米子市水道敷設費として金參萬圓を寄附したる廉により、同年九月十日勅定の紺綬褒章飯版壹箇を賜ふの光榮に浴す。

當主平兵衛氏は故平兵衛氏の長男にして豐藏氏の養嗣子たり。昭和五年家督を相續平兵衛を襲名。明治大學經濟學部の出身にして新進の實業家、父祖の業をして更に新時代に卽應せしめ職域奉公に誠金の赤誠を投じつつある多額納稅者として縣下の名望家たり。

合名會社三宅商店代表者、機械製作並卸商

紺綬褒章受賞者

三宅敏介氏

明治十九年八月生

大阪市西區新町通五丁目十一番地

略歷

年少僅に十七歳にして大阪に出で、異常の勤勉を以て、機械に關する工程並事務の一般を會得し、後獨立して機械製作並に卸商を創始し、拮据經營、遂に輝やかしき業績を擧げ、今や大阪に於ける多數同業者の間に、斷然頭角を擡んじ、其營業方針の堅實なると、製品の優良とを以て、江湖の間に多大の信用を博し、全國に其販路を布き、隆々たる業運を展しつゝある三宅敏介氏の如き、苟くも華城に於ける業界を語らむとするもの、斷じて逸すべからざる人材にして、其成功の跡を辿れば、後進子弟の範と爲すべきもの尠からず。玆に大に傳へざるべからざる一人たり。

氏は岡山縣人三宅泰氏の二男として、明治十九年八月を以て呱々の聲を揚げ、後三宅修齋の養子となり、前名敏を改め敏介と稱す。資性慧敏頴悟にして、意志頗る堅確、少時既に英才を顯はし、鄕土の鳳雛として、里人の間に其將來を囑望せらる。夙に業界に志あり、長ずるに及んで其志益々已み難く、御ち十七歳の時、斷然として故鄕を去り大阪に出づ。爾來十餘年間あらゆる世路の艱苦を嘗めつゝ、而も其初志を捨てず。必ず斯する所を貫徹せずんば已まざるの意氣を以て幾多の困苦を忍び、障碍を掃し、誘惑を却け、以て機械類に對する知識を蓄積して稍々其一般を知るに至るや、玆に獨立の機を得て、大正四年機械製作並卸商を創始す。爾來奮闘努力、商況隆盛に赴くに及び、昭和五年組織を改めて合資會社となし、自ら其代表者として之を統べ、爾來業績益々順調を辿り、以て今日の盛大を見るに至れり。

公共、公同の念に厚く、昭和十三年十二月、日本赤十字社大阪支部病院施療病床維持費として、金二萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同十四年十二月十二日、勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。又同十四年一月、恩賜財團軍人援護會に、金一萬圓を寄附したる外、各種の公益事業を翼けて之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進したること枚擧に遑あらず。

家族には、夫人かず（明治廿七年生）との間に二男二女あり。洵に清福養むべき一家たり。

京都倉庫株式會社常務取締役

褒賞受賞者

水野英一氏

明治四十四年十月二日生
京都市下京區佛光寺富小路東入

略歷

帝國最高學府を出でゝ、京浴實業界に飄爽たる英姿を現はし、俊秒なる才腕を縱橫に揮ひ、其將來を囑目せらるゝもの之を水野英一氏と爲す。

先代故水野竹次郎氏は、明治四年八月十五日をもつて生れ幼時家督を知らず、慈父の膝下に愛育せらる。天資通明にして意志剛る物動、物々長ずるに及び身の不遇を歎じ、大に感憤興起し、私かに期する所あり。而も家計素より豐かならず學業亦意に任せざりしを以て、夙に他家に出でゝ商業の途に携る。爾來勵精力行、隣人の售賣に堪へ、勤奮を斥け、言語に絕する辛酸勞苦に挑むこと厭く、其間堅忍克く人情の表裏を察し、商業の機微を究め、以て他日雄飛の素地を作る。年くて後、些かの資を得るに至るや、未數仲買人となり、乾坤一擲の機運を挽して證券取引所内に證名を購す。昭和五年一月、京都倉庫株式會社を設立し、業界に卓きを爲せり。

多年不遇の境に在りし氏は、仁愛の心極めて深く、社會、慈善、救濟等の事業に對しては財を惜まずして之に投し、曩に日本赤十字社京都支部事業費として、金一萬圓を寄附し、昭和三年六月四日勅定の緋綬褒章を、また同二年三月、京都府奥丹後震災救助費金二萬圓を寄附し、同三年十二月廿七日、同飾版を賜ひ、其篤行を嘉賞せらる。後昭和九年九月九日、六十四歲を以て長逝せり。

英一氏は、卽ち其長男として、明治四十四年十月二日を以て生れ、父君の歿後家督を嗣ぎ、其業を繼承す。夙に京都府立第二中學、第三高等學校を經て、京都帝國大學法學部に學び、昭和十三年三月之を卒業するや、直に大阪株式取引所計算課に就職、事務を修得す。同十四年退社し、家業たる京都倉庫株式會社常務取締役に就任し、又京都運輸株式會社取締役として、新進の意氣を以て之が經營の任に當れる外、東本願寺維持財團理事として、宗門の爲に盡瘁しつゝあり。

氏亦先考仁侯の性を享け、公共の念に厚く、昭和九年九月京都市社會施設事業費として、金一萬圓を寄附し、同年十二月廿一日、勅定の緋綬褒章下賜の光榮に浴せり。其他日本濟生會、日本海員掖濟會、軍人援護會等に盡し、其有功社員に推さる。

尾張時計株式會社々長、記錄商

褒賞受賞者

三輪嘉兵衞氏

明治九年五月十六日生
住所　名古屋市中區中ノ町二丁目五番地
勤務所　名古屋市西區船入町

略歷

當家は赤岡屋と號して米穀肥料商を營み、多年の信用と、堅固なる地盤を有する名古屋屈指の老舖たり。先代嘉兵衞氏は夙に英邁の資を以て、銳意家業の隆興を圖り、中京實業界に活躍したるが、就中本邦に於て需要せらるゝ時計が、主として外國品の輸入に仰ぐを憂ひて、時計國産の計を樹て、同志と共に尾張時計株式會社を創立し、專ら外國品と對抗して

尾張時計株式會社々長、肥料商

緑綬褒章受賞者

三輪嘉兵衛氏

明治九年五月十六日生

住所　名古屋市中區中ノ町二丁目五番地
營業所　名古屋市西區船入町

略歴

當家は春岡屋と號して米穀肥料商を營み、多年の信用と、堅固なる地盤を有する名古屋屈指の老舗たり。先代嘉兵衛氏壯夙に英邁の資を以て、鋭意家業の隆興を圖り、中京實業界に活躍したるが、就中本邦に於て需要せらるゝ時計が、主として外國品の輸入に仰ぐを憂ひて、時計國産の計を樹て、同志と共に尾張時計株式會社を創立し、專ら外國品と對抗して之が輸入防遏に努むる一方、技術の優秀を期し、海外輸出の途を拓く等、實獻する所頗る大なるものありき。現代嘉兵衛氏は、明治九年五月十六日、其長男として生れ、同三十八年父君の老齢に依る隱居と共に家督を相續し、前名文三郎を改め襲名す。先代の餘を享け、重厚穩實にして而も進取の氣に富み、其遺業を繼承するや、益々業務の發展に努力、今や斯界第一流の巨商として重きを爲すに至れり。曩に名古屋肥料商組合長として、同業者の團結增進に努め、又父君の創設に係る時計會社の社長に推され、爾來鋭意其經營に任じ、又日支事變前より軍需品製造を開始、着々業績を擧げ以て今日に至れり。

氏は自家の店員は素より、會社從業員に對しても、常に溫情を以て接し、生活の安定を圖ると共に、賞罰を明かにし、之を誘掖指導して、適材を適所に配置し、以て成績の向上に努め、店員社員亦勉勵を盡して業務に當りつゝある、洵に業界の一美事と稱すべし。

公共、公同の念に厚く、大小各種の社會事業其他に盡して私財を投じたること一再に止らず。大正十年四月、日本赤十字社愛知支部へ、金一萬圓を寄附したる縁に依り、其功を錄せられ、同十一年十一月十一日、勅定の緑綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

家庭　先年不幸にも前後して夫人きみ子並に長男嘉一郎氏は死去し現在の家族は左の如し。

二男　文　次氏　明治四十四年六月生、名古屋高商卒業
同　夫人志づ子　大正三年二月生、名古屋高女卒業
三男　良吉氏　大正六年十一月廿九日生
目下神戸商大在學中

昭和三年六月同社解散の際、其の純益金を以て、京都府與丹後震災罹災救助費金一萬圓を寄附し、同三年十二月廿七日、同會版を賜ひ、其篤行を嘉賞せらる。後昭和九年九月九日、六十四歳を以て長逝せり。

英一氏は、即ち其長男として、明治四十四年十月二日を以て生れ、父君の歿後家督を嗣ぎ、其業を繼承す。夙に京都府立第二中學、第三高等學校を經て、京都帝國大學法學部に學び、昭和十三年三月之を卒業するや、直に大阪株式取引所計算課に就職、事務を修得す。同十四年退社し、家業たる京都倉庫株式會社常務取締役に就任し、又京都運輸株式會社取締役として、新進の意氣を以て之が經營の任に當れる外、東本願寺維持財團理事として、宗門の爲に盡瘁しつゝあり。

氏亦先考仁俠の性を享け、公共の念に厚く、昭和九年九月京都市社會施設事業費として、金一萬圓を寄附し、同年十二月廿一日、勅定の緑綬褒章下賜の光榮に浴せり。其他日本濟生會、日本海員掖濟會、軍人援護會等に盡し、其有功社員に推さる。

貴族院議員 株式會社浜松銀行取締役會長、株式會社浜松商業銀行取締役會長、株式會社浜松電氣鐵道株式會社各取締役、浜松商工會議所顧問

勳二等瑞寶章受賞者

從六位 **宮本茂七氏**

文久三年九月十八日生

靜岡縣濱松市松城町九五

略歷

繊維、帽子、彩染の世界的產地として知らるる濱松市は、今や本邦有數の近代產業都市として異數の躍進をとげつつあり。明治維新直後にありては東海道に於る一宿驛たるに過ぎず。德川時代六萬石の城下町として殷賑を極めたる同地も、一時衰微の一途を辿る外なかりき。しかも克く起死回生今日の發展を遂げ得たるは、專ら宮本茂七翁の奮鬪努力に因るものにして、濱松市の發達史はまた翁の奮鬪史たるを失はず、其の產業の發展に貢したる功績顯著なるものあり、昭和三年十一月七日勅定の綬授賞章を賜ひ、功勞を顯彰せらるるの光榮に浴す。濱松市天林寺境內に建設されたる銅像と共に、翁の生涯を飾る榮光たり。

氏は濱松近在和地村栗地の人宮藏氏の長男、幼名八朔。父君は農を家業とせしが後濱松に出でて吳服業を創む。父母に伴はれて濱松に出でたる氏は明治四年九歲にして三好塾に入り商賣往來を學び、更に漢學を修學して小學校に入學、明治十一年十六歲の時、小學校全科を優等の成績を以て卒業、尙も漢學を修めしが、傍ら家業を扶けて倦むところを知らず、十九歲の壯早くも東京、名古屋、京都の問屋を巡歷して仕入れをなすに至れり。

二十九歲濱松町會議員となりしが、不幸病を得て專ら療養に入る。三十二歲にして病全く癒え健康を回復するや、實業界への進出を期し、帝國銀行株式會社、日本樂器株式會社の創立に參畫、ともに發起人となり明治三十一年日本樂器の取締役となる。氏三十六歲の時なり。越へて同三十三年木綿中形染株式會社創立委員長となり、會社成立後取締役たり。日本形染株式會社の前身なり。斯くて氏の本格的事業人としての活躍は開始され、爾來帝國製網、濱松機道、天龍川水力電氣其の他諸會社の創設に參與し、日本形染の社長たること多年にわたり、產業の伸展に寄與せしところ極めて多大なりしのみならず、この間濱松商工會議所會頭たりしほか關係諸團體組合の要職にありて、常に指導者的使命の達成に萬全を盡し、老來益々勇健戰城率公に餘生を捧じて赤誠を披瀝しつつあり。

從四位勳三等 株式會社浜松銀行取締役會長、株式會社浜松商業銀行取締役會長、株式會社浜松電氣鐵道株式會社各取締役、浜松商工會議所會頭

勳二等瑞寶章受賞者

從六位 **丸亀小六氏**

明治十四年十月五日生

靜岡縣濱松市田町

略歷

貴に前の芳躅を說くもの、必ず先づ其發祥地として錦秋五湖を擧げて、安倍の眺望を開却するものあり。現時廣島地下

二十九歳濱松町會議員となりしが、不幸病を得て專ら療養に入る。三十二歳にして病全く癒え健康を回復するや、實業界への進出を期し、帝國製帽株式會社、日本樂器株式會社の創立に參畫、ともに發起人となり明治三十一年日本樂器の取締役となる、氏三十六歳の時なり。超へて同三十三年木綿中形株式會社創立委員長となり、會社成立後取締役たり。日本形染株式會社の前身なり。斯くて氏の本格的事業人としての活躍は開始され、爾來帝國製帽、濱松鐵道、天龍川水力電氣其の他諸會社の樞機に參與し、日本形染の社長たること多年にわたり、産業の伸展に寄與せしところ極めて多大なりしのみならず、この間濱松商工會議所會頭たりしほか關係諸團體諸組合の要職にありて、常に指導者的使命の達成に萬全を盡し、老來益々勇健職域奉公に餘生を奉じて赤誠を披瀝しつつあり。

家納喜酒造株式會社々長、中國釀造、福美人酒造各株式會社取締役、商工會長、水道組合長、酒類釀造業

紺綬褒章受賞者

勳七等功七級　**丸亀小六氏**

明治十四年十月五日生
廣島縣佐伯郡廿日市町

略歴

世に酒の芳醇を說くもの、必ず先づ其産地として攝津灘五郷を擧げて、安藝の醇酒を閑却するものあり。現時廣島縣下に於て製産せらるゝ清酒は、其濃度に於て、芳味に於て、斷じて灘五郷産に讓らざるのみならず、寧ろ之を凌駕せんとする優良酒あり。酒徒にして廣島酒の芳醇を知らざるものは、未だ與に酒を談ずべからざる也。玆に小傳を叙せんとする丸亀小六氏は、銘酒家納喜の釀造元にして、廣島縣下に於ける醇々たる清酒釀造家の一人たり。

氏は廣島縣人立石甚七氏の四男として明治十四年十月五日を以て生れ、先代丸亀泰助の養子となる。先代は酒類販賣店を營み居たるが當主小六氏の代に至り酒造業を志し、拮据經營に任じ、奮闘努力の末、その釀造に係る銘酒に家納喜の銘を打ちて市場に出すや、其品質の優良にして價格の低廉なる忽ち江湖の絶讃好評を博し、各種の品評會、博覽會等に出品して人賞せざることなく、十數回に亘りて優等賞を獲得し、今や廣島縣下は素より、全國的に廣汎なる販路を拓き、强固なる地盤を築くに至れり。曩に加茂鶴酒造株式會社監査役に推され、現時家納喜酒造株式會社々長たる外、中國釀造、福美人酒造各株式會社取締役として、業界に重きを爲せるのみならず、廿日市町水道組合長、同商工會長として、同町の爲めに盡瘁しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和十一年二月、廣島縣佐伯郡廿日市町公會堂建設費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り其功を錄せられ、同年五月三十日、勅定の紺綬褒賞を下賜せらるゝの光榮に浴せり。その他日本赤十字社、軍人援護會等の事業を翼賛して、有功章を贈られ、又武道奬勵會に其基金として、昭和十三年以來、日露戰役に出征、功に依りて賜りたる金鵄勳章年金二百五拾圓を、終身永久に寄附し、更に廿日市町小學校へ教育基金として一千圓を寄附したる外、神社佛閣に浮財を寄進し、各種公共事業に私財を致したること枚擧に遑あらず。洵に當代罕に觀る奇特の士と稱すべし。

元町久織物合資會社々長、元生糸販賣組合聯合會埼玉
社々長、元郡農會長、元村長

藍綬褒章受賞者

故 勲七等 町田嘉之助氏

慶應三年一月二十七日生
埼玉縣秩父郡原谷村黒谷八二二

略歴

氏は埼玉縣秩父郡原谷村大字大野原農内田四郎平氏の二男十七歳にして同村大字黒谷農町田慶作氏の養子となる。

夙に英才の譽高く齢僅か十八歳にして原谷村々役場筆生として村治に干與す。爾來累進して助役より村長となり村長たること實に二十有八年、原谷村々政に參與すること前後を通じて五十年間に及び、自治の振興村治の發展に盡瘁したる功勞偉大なるものあり、同村をして天下の模範村たらしめしは專ら氏に負ふところにして、昭和二年三月十四日勅定の藍綬褒章を賜ひ、其の功績を顯彰せらるるの光榮に浴す。また宜べなりと謂ふべし。

氏は啻に村治奉公五十年の長きにわたりて克くこれを全うしたるのみならず、地方農業の發展に資するところ尠からず産業人としての功績また嶄然たるものあり。卽ち製絲事業の伸展に意を用ひ夙に製絲組合埼玉社を起して自ら社長たりしのみならず大日本生絲販賣組合聯合會理事、埼玉縣信用購買販賣利用組合聯合會理事、大日本帝國農會議員、產業組合秩父郡部會長、原谷村信用購買販賣利用組合組合長、秩父郡農會長、生絲販賣組合聯合會埼玉縣原谷組長を歷任、斯業並に地方產業の發展に寄與し、大日本農會總裁宮より有功章を拜受し、大日本產業組合中央會頭より功勞章を贈與さるるなど、受賞枚擧に遑あらず。勲七等に敍せられ靑色桐葉章を賜ふ。其の現存するや村翁の譽を以てし村民擧つて哀悼の意を表す。

氏また生前社會公共に擧ずる念厚く、大正四年原谷小學校基本金として金壹百圓、同十五年原谷村大字黒谷普王院へ石燈籠建設費として金百五圓、昭和八年同村社氷神社へ金五百圓を寄附するなど奇特の行爲多かりき。

當主町田氏は氏の長男にして、現に織物製造を業となし父業を繼ぎて町久織物合資會社、和銅輸出織物株式會社各社長として家業の隆昌に專念精勵する傍ら秩父織物工業組合幹部として更にまた原谷機業同盟會長として斯業に貢獻し、非常時局下にありて同業者を指導督勵し、所謂鷄域率公の實を擧げつつ、父名を呼しめざるの活躍をつゞけ、鄕黨景仰の的たり。

藍綬褒章受賞者

松原市太郎氏

明治二十八年十二月七日生
住所 兵庫縣飾磨郡大白村
本籍同 大阪市北區曾根崎上三丁目
三十二番地

略歴

大阪に於て鉄鋼大部の製造販賣を業とするもの、其數素よ
り少からざるも、就中其れなるものを求むれば、何人も先づ

ど、受賞枚擧に遑あらず。勳七等に敍せられ青色桐葉章を賜ふ。其の歿するや村葬の禮を以てし村民擧つて哀悼の意を表す。

氏また生前社會公共に奉ずる念厚く、大正四年原谷小學校基本金として金壹百圓、同十五年原谷村大字黑谷醫王院へ石燈籠建設費として金百五圓、昭和八年同村社聖神社へ金五百圓を寄附するなど奇特の行爲多かりき。

當主町田氏は氏の長男にして、現に織物製造を業となし父業を繼ぎて町久織物合資會社、和銅輸出織物株式會社各社長として家業の隆昌に專念精勵する傍ら秩父織物工業組合幹部として更にまた原谷機業同盟會長として斯業に貢獻し、非常時局下にありて同業者を指導督勵し、所謂職域奉公の實を擧げつつ、父名を辱しめざるの活躍をつゞけ、鄕黨景仰の的たり。

松原銃砲店主、銃砲火藥製造販賣業

紺綬褒章受賞者

松原市太郎氏

明治二十八年十二月七日生

住所　兵庫縣養父郡大藏村

營業所　大阪市北區曾根崎上三丁目三十二番地

略歷

大阪に於て銃砲火藥の製造販賣を業とするもの、其數素より尠からざるも、就中其尤なるものを求むれば、何人も先づ松原銃砲店に第一指を屈するを躊躇せざるべし。

松原家は世々兵庫縣養父郡大藏村に住し、祖先は出石藩に屬する町方役付を勤めたる家柄たり。氏は先代傳吉氏の長男として明治二十八年十二月七日を以て生る。資性聰明にして、而も堅實、頗る進取敢爲の氣に富む。夙に商賈として身を立てんことを志し、明治四十二年單身大阪に出で、親戚に當れる西村銃破店に業務見習として入店す。時に、歳僅に十五歳なりき。爾來刻苦精勵、店務に與はりて奮鬪努力すること十有餘年の長きに及び、其間事務に熟し、業界の表裏に通ずるに至るや、大正十年獨立して、銃砲店を開業す。恁くて專心經營に任じ、年々業務の隆盛に赴くと共に之が製造をも開始し、工場を東淀川に設置して以來愈々其大を爲し、今や華城第一流の商賈として同業者の間に重きを爲すに至り、現時大阪銃砲製造組合長、大阪銃砲販賣組合幹事等に擧げられ、業界に多大の貢獻を爲しつゝあり。

公共公同の念に厚く、曾根崎上三町會副會長を始め、銃後奉公會、青年團等の役員に推され、寢食を忘れて之に力を致しつゝある外、日本赤十字社の事業に翼贊して有功章を贈られ、又第一生命保險の有功社員たり。曩に鄕里の大藏小學校に、二宮尊德翁の銅像を寄贈し、又毎年同校卒業生に記念として、果樹苗を配布する等、奇特の行爲を德とせられ、但馬教育會長より感謝狀及銀盃を、又村長足立義夫氏より感謝狀を贈らる。昭和十一年四月、大藏小學校敷地購入費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年七月十六日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔へり。

氏、頗る向上心に富み、常に心性の修養を怠らず、曾て中年にして日本大學專門部に入學し、年若き學徒に伍して法學を修めたる如き、洵に稀に觀る篤學の士と稱すべく、此一事を以て氏の爲人の一班を推知するを得べく又以て後進子弟の範と爲すに足るべし。

緑綬褒章受賞者

松原市太郎氏

明治二十八年十二月七日生
住所　兵庫縣養父郡大屋村
營業所　大阪市北區曾根崎上三丁目三十二番地

略歴

大阪に於て銃砲火薬の製造販賣を業とするもの、其數寡より夥からざるも、就中其尤なるものを求むれば、何人も先づ松原銃砲店に第一指を屈するを躊躇せざるべし。

松原家は世々兵庫縣養父郡大屋村に住し、祖先は出石藩に屬する町方役付を勤めたる家柄たり。氏は先代傳吉氏の長男として明治二十八年十二月七日を以て生る。資性聰明にして而も堅實、頗る進取敢爲の氣に富む。夙に商賣として身を立てんことを志し、明治四十二年單身大阪に出で、親戚に當れる西村銃砲店に業務見習として入店す。時に、歳僅に十五歳なりき。爾來測苦精勵、店務に與はりて奮闘努力すること十有餘年の長きに及び、其間事務に熟し、業界の表裏に通ずるに至るや、大正十年獨立して、銃砲店を開業す。爾くて專心經營に任じ、年々業務の隆盛に赴くと共に之が製造をも開始し、工場を東淀川に設置して以來益々其大を爲し、今や華城第一流の商賈として同業者の間に重きを爲すに至り、現時大阪銃砲製造組合長、大阪銃砲販賣組合幹事等に擧げられ、業界に多大の貢獻を爲しつゝあり。

公共公同の念に厚く、曾根崎上三町會副會長を始め、就後準公會、青年團等の役員に推され、總食を忘れて之に力を致しつゝある外、日本赤十字社の事業に賛賛して有功章を贈られ、又第一生命保險の有功社員たり。夙に鄉里の大藏小學校に、二百本櫻苗の銅像を寄贈し、又毎年同校卒業生に記念として、果樹苗を配布する等、奇特の行爲を德とせられ、但馬牧育會長より感謝狀及賞盃を、又村長足立義夫氏より感謝狀を贈らる。昭和十一年四月、大藏小學校敷地購入費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年七月十六日勅定の緑綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔へり。

氏、頗る向上心に富み、常に心性の修養を怠らず、曾て中年にして日本大學專門部に入學し、年若き學徒に伍して法學を修めたる如き、洵に緑に關る篤學の士と稱すべく、此一事を以て氏の爲人の一班を推知するを得べく又以て後進子弟の範と爲すに足るべし。

ど、受賞枚擧に遑あらず。勳七等に叙せられ青色桐葉章を賜ふ。其の叙するや村葬の禮を以てし村民擧つて哀悼の意を表す。

氏また生前社會公共に奉ずる念厚く、大正四年原谷小學校基本金として金壹百圓、同十五年原谷村大字黒谷醫王院へ石燈籠建設費として金百九圓、昭和八年同村社聖神社へ金五百圓を寄附するなど奇特の行爲多かりき。

當主町田氏は氏の長男にして、現に織物製造を業となし父業を繼ぎて町々織物合資會社、和銅輸出織物株式會社各社長として家業の隆昌に專念精勵する傍ら秩父織物工業組合幹部として更にまた原谷機業同盟會長として斯業に貢獻し、非常時局下にありて同業者を指導督勵し、所謂職域奉公の實を擧げつつ、父名を辱しめざるの活躍をつゞけ、鄉黨景仰の的たり。

元函館酸素株式會社、大沼養狐株式會社、松下土地株式會社各社長、元北海道會議長、元函館市會議長

緑、紺綬褒章受賞者

故 松下熊槌氏

安政四年十二月十八日生

住所 北海道函館市曙町二ノ九

營業所 北海道函館市末廣町三七ノ七

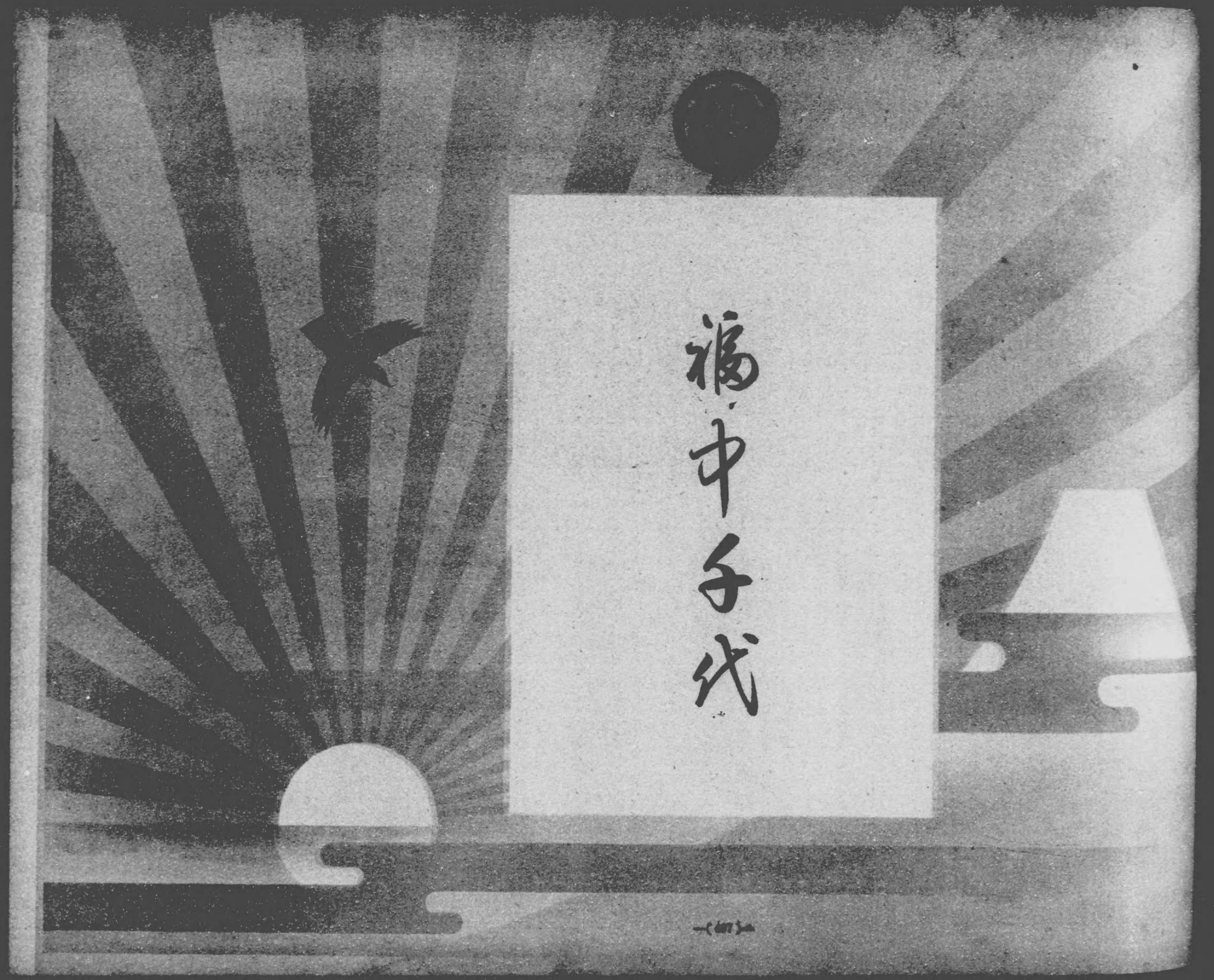
略歴

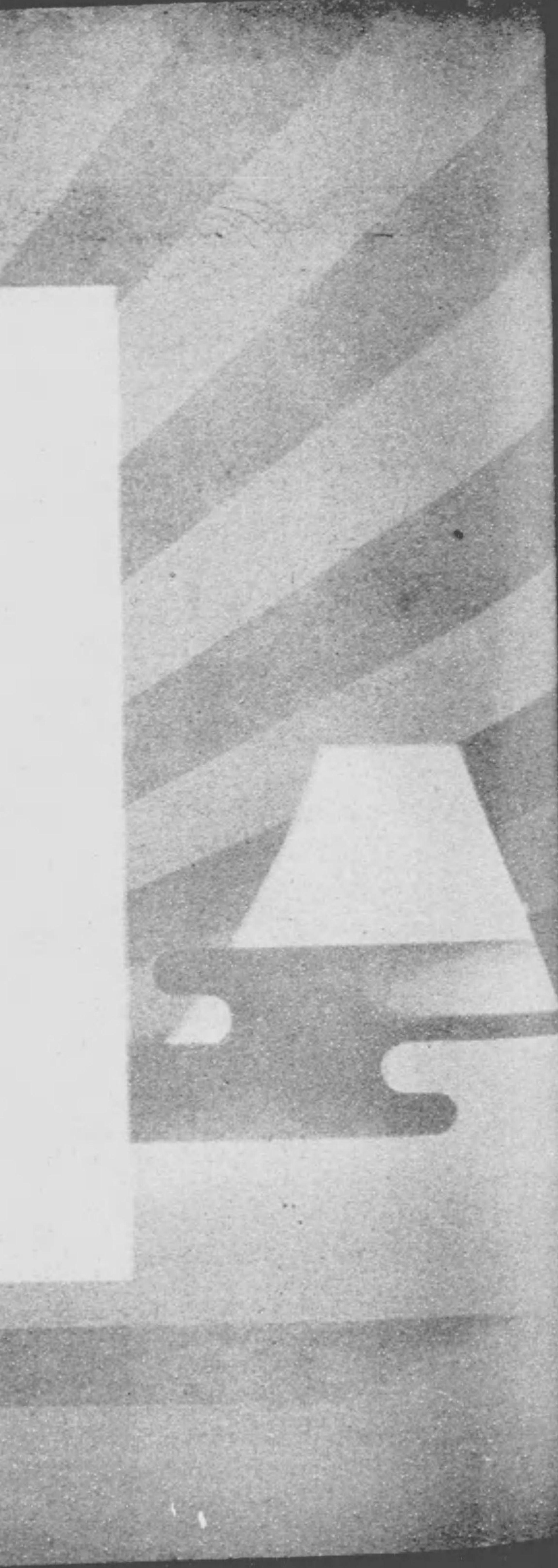
○夙に殖産興業に志し、地を未開發の北海道にもとめ鰮鯖の漁獲に鮭鱒の漁區開拓に、あるひは養狐業を起し、克く斯業の興隆に資したる功績顯著なるものあり、昭和三年十一月二十三日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰せらる。

○昭和十年二月高等水産學校基金として、金壹萬圓寄附の廉に依り、同十一年九月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらる。

氏は福岡縣小倉の出身。小笠原藩校育徳館に學び、明治十三年北海道開拓使御用掛となり東京出張所に勤務、後請ふて札幌の本廳に轉任明治十九年北海道廳開設せらるるや再び轉じて道屬となりしが、自ら身を産業界に投じて北海道開拓の天命を達成せんことを期し、屬たること僅かに八ヶ月にして退官、帝國水産株式會社の創立に參畫して同社函館出張所支配人となる。爾來氏が水産事業の發展開發に資したる功績偉大なるものあるも、就中鰮鯖漁獲に先鞭をつけカムサツカに進出しては鮭鱒漁業を確立し、斯業今日の隆盛の端緒を開きたるが如きは、國家的偉業としてわが水産業史に大いなる足跡を印するに足るものなり。更に氏は大正十四年大阪島德藏氏の經營下にありし大沼養狐株式會社を讓受け、併せて茅部郡中川養狐場をも經營し、種狐の選擇、經營法の改善に專ら意を注ぎ、遂に養狐業をして國家的事業たるを認識せしむるに至れり。北海道並に樺太において養狐業の隆盛を招來するを得たるは氏に負ふところ極めて多し。

氏は斯くの如く殖産興業に寄與せしところ尠からざりしのみならず、函館市會議長たること實に三十五ヶ年、同商業會議所副會頭たること二十二ヶ年、北海道會議長たること十ヶ年に及び、函館市並に北海道の興隆伸展に裨益したるところ多大なりき。昭和十二年二月歿す。當主虎雄氏は氏の長男、青山學院出身。父君歿後家督を相續、大沼養狐株式會社取締役、松下土地株式會社々長たり。


福中子代



紺綬褒章受賞者

福中千代氏

明治三十三年九月二日生
西宮市松園町七十八番地

夫君の亡跡を繼ぎ、その遺業を守りて家運を興隆せしめ、家名を辱しめざるとともに夫君の遺名を高からしむるものは稀れなり。

由來わが國における傳統輝しき家族制度の美風として、夫唱婦和を尊び、婦徳の美たるもの、專ら內助の功を成して夫君を扶くるを以て良妻の鑑となす。

多年にわたる斯くの如き風習は、時に女性をして因循姑息ならしめ、また女子敎育の方針よろしきを得ざりし時代にありては、所謂良妻賢母型の養成をもつて唯一の方針となし、時代の推移に省みず、個人の天性を無視して個性を伸べしめず、徒らに消極的方針を墨守するを常とせり。

もとより、家庭を放擲し、子女の養育薫陶を省みざるが如き、輕佻浮薄なる賣名的行動に終始する女性はとらざるも、盲目的に家庭を守ることにのみ念にして、敎養を勵まず、社會の風潮に關れず、化石化されたる主婦の啓發を促し得ざる女性もまたとらず。

明朗闊達にして身心ともに健全、敎育の欠きを以て家庭の內外に處し、しかも主婦たるの責を果し、內助の精髓に怠りなきものを以て理想となす。

化石化されたる主婦の多くは彈力性を缺き、思慮に乏しくして無味乾燥、徒々にして女性の至寶となすべき情操をさへ缺く。獨立性に富み、積極進取の意氣をもつて夫君を激勵鞭撻し、獻身の熱情を餘すものは極めて僅少なり。

然に一朝夫君を喪ふの悲運に遭遇せんか、忽ちにして周章狼狽、意氣消沈して退嬰萎縮し、家運を傾け家名を汚し夫君の名をさへも辱しむるものあり。

貞淑温和にして女性たるの嫻美の德を備へ、內に毅然たる意操を藏して獨立不羈克く非常の艱難を克服し、家運に盡すなきを得ぜしむる女性は蓋し稀れなり。

わが福中千代氏のごときは、夫君在世中にありては、非凡の賢妻たり、夫君を扶け勵まして餘すところなく、家庭を守りて實績よろしきを得、餘暇を利用して敎養に勵み、傍ら女性の分擔すべき社會的、國家的使命の遂行を忘れず、夫君歿後にありては、敢然起つて家門の主柱たり、家運の興隆に不斷の精勵を續けて倦むところを知らず、福中家を盤石の安きに置き家名を損することなく、亡夫の遺志を伸ぶるに忠實にして、社會公共に奉ずるの奇特の行狀鮮からず。洵に氏の如きは婦女の龜鑑たるのみならず、また以て女丈夫たるを失はず。

氏は京都府の人山本幸太郎氏の三女にして京都市烏丸に生る。大正九年四月福中佐太郎氏に嫁す。大阪市金蘭會高等女學校出身の才媛なり。

その金蘭會高等女學校に學ぶや、常に優秀なる成績を擧げて他の模範たり。しかも古都京都の傳統たる優雅の麗質を備へて擧措また温良、同學子女の畏敬の的たりき。

京都に生をうくる者男性と女性たるとを問はず、因循姑息なるを以て通例となすの譏れる觀念あり。氏は京洛の地に生れ、慈愛深き父母の膝下に育成され、稍々長じて大阪の地に學びしが、柔和清麗の容姿のうちに毅然たる氣質を包藏し、聊かも優柔不斷の風なかりき。

氏が夫君早世の悲運に遭遇しながらも、克くこれに耐へて挫折するところなかりしは、氏の男勝りの天資と、不斷の人生修練による賜たることは論を俟たざるも、また氏が夙に敬神崇祖の念厚く、特にカトリツク敎を信仰すること極めて深き信仰の偉力によるところ多大なりと謂ふべし。

カトリツク敎の敎律は頗る嚴格にして、同敎信者の私的生活大いに學ぶべきものあり、道義を重んじ一言一行を忽せにせず、常に清純なる態度を以て社會に處するは、凡く世に知らるるところ。氏もまた宗徒たるの面目を昂揚して、一點の不純を存するなし。

今や居を大阪府中河內郡大正村字木之本より西宮市松園町七八に移し、夙川カトリツク敎會に禮拜して夫君の冥福を祈るとともに、家運の興隆を祈念するを日常の日課となすを唯一の悅樂となせり。

氏はさきに大阪カトリツク敎會維持費をもとむるや、卒先して多額の私財を投じ、更に夙川カトリツク敎會の維持運營につきても多大の寄附を惜しまざりしのみならず、社會公共施設の整備擴充の事あるや、常に事業の達成に盡瘁し、其の奇特の行爲枚擧に遑あらず、表彰受賞の光榮に浴したること一再にとどまらざる中に、昭和十一年十月大阪府中河內郡大正尋常高等小學校講堂建築資金として金壹萬圓を寄附せし廉により、同十二年十一月十六日勅定の紺綬褒章を賜ひ、善行を表彰せらるるの光榮を重ぬ。

長谷川九一郎

らず、[illegible]中寂を磐石の安きに置き家名を損することなく、亡夫の遺志を伸ぶるに忠實にして、社會公共に奉ずるの奇特の行爲渉からず。洵に氏の如きは婦女の龜鑑たるのみならず、また以て女丈夫たるを失はず。

氏は京都府の人山本幸太郎氏の三女にして京都市烏丸に生る。大正九年四月[illegible]中佐太郎氏に嫁す。大阪市金蘭會高等女學校出身の才媛なり。

その金蘭會高等女學校に學ぶや、常に優秀なる成績を擧げて他の模範たり。しかも古都京都の傳統たる優雅の[illegible]を備へて學措また[illegible]、同學子女の長敬の的たりき。

京都に生をうくる者男性と女性たるとを問はず、因循姑息なるを以て通例となすの誤れる觀念あり。

氏は京洛の地に生れ、慈愛深き父母の膝下に育成され、[illegible]して大阪の地に學びしが、[illegible]の容姿のうちに凜然たる氣質を包藏し、聊かも優柔不斷の風なかりき。

氏が夫君早逝の悲運に遭遇しながらも、克くこれに耐へて挫折するところなかりしは、氏の男勝りの天資と、不斷の人生修練による賜たることは論を俟たざるも、また氏が夙に敬神崇祖の念厚く、特にカトリック教を信仰することを極めて深き信仰の偉力によるところ多大なりと謂ふべし。

カトリック教の教律は[illegible]にして、[illegible]の私的生活大いに學ぶべきものあり、[illegible]を重んじ一百一[illegible]

[illegible]

一年十月大阪府中河内郡大正尋常高等小學校[illegible]に遊ぶらず、[illegible]の光榮に浴したること一再にとどまらざる中に、昭和十十六日勅[illegible]の[illegible]を賜ひ、普行と表彰せらるるの光榮を重ね。

緑綬褒章受賞者

故 長谷川九一郎氏

神戸市兵庫區橋通三八

故長谷川九一郎氏は神戸市における隠れたる人傑として、幾多の話柄をのこせり。

開港當時における屈指の貿易業者として、永年にわたつて盛昇の創業に貢献せし功績はいふも更なり。しかれども長谷川家の先代として氏の足跡を調みるより寧ろ一個の社會人として氏を追慕せんとするは、その卓抜せし人物識見、宏大なりし氣宇、敬仰するに足る仁俠をより加賞に値へんとするがためなり。

曾て長谷川家の一室に年少無錢の一壯工滞在するあり、世の常の雇傭にあらざるは一見してこれを知るを得るも、その何人たるかを知るものは九一郎氏のみなりき。

氏は壯工を遇するに貧富の隔を以てし、ある時は終日を壯工の旅に侍して懇情の奔放自在に驅使さるるを黙認し、ある時はまた競馬の場裏を驅してともに痛飲するあり、壯人の多くは雇主の態度を訝りて、その目的の那邊にあるやを疑へり。しかも壯工は嚮然として来り嚮然として去るを例とせり。當時の壯工こそ後年木邦實現の偉材として盛名を馳はるゝに至りし橋本關雪氏なりき。豪胆今日の地位あるは、もちろん其の卓抜せる天賦と不斷の精進によるものなるも、また九一郎氏の知己仁俠に富む人士の熱誠ありし過去を忘るることを得ざるべし。

神戸名物おかずのビルヂングとして、永年にわたり幾々たるビルヂングが竣工せしに拘らず、その偉容を開港口の四方一角に聳せしこととありき。時既に時代の進展に伴ひビルヂングの使命に適應せし九一郎氏なりしが、貸貸契約希望者續出のなかに、一つとして氏の希望と目的に副よものなきを理由として、閉鎖のまま放置すること多年に及べり。一見關東に似たる關東と關ふべきも、關して然らず、氏の高邁なる氣骨が然らしめたるものにして、洵に凡俗の士の為し得るところにあらず。氏の斯く知己仁俠と氣骨は、氏が武道を熱愛し、これに精進したる精神修練の賜と關ふべきか。氏が劍道の達人なりしは餘りにも有名なり。

昭和九年七月恩賜財團済生會兵庫縣支部の救療費として金壹萬圓を寄附せし縁に依り、同十年十二月二十四日勅定の緑綬褒章を賜はの光榮に浴す。

吳服商

紺綬褒章受賞者

松原フサ氏

明治八年九月十八日生
京都市中京區堺町通三條下ル道祐町

略歴

夙しては、其夫に仕へて貞順能く內助の功を致し、其夫の歿後は遺業を護り、繼手克く家運の隆昌を致し、而も一面各種の公益事業に賛賛して之に私財を寄附する等、常に烈々たる國家奉公の志を致しつゝある松原フサ刀自の如き、其篤徳は、實に我市婦界に於ける龜鑑たるのみならず、其奇特の行爲は、亦以て衆人の範と爲すに足るものあり。

刀自は京都府上阪嘉七氏の長女として明治八年九月十八日を以て、京都市銅駝學區橘柳町に生る。資性溫良貞淑、頗る怜悧にして、婦女子としての嗜みに缺くる所なく、同二十五年四月、芳紀十八の春、呉服商松原伊助氏に嫁す。爾來克く夫君に仕へて周到至らざるなく、而も男子も及ばざる非凡の商才あり。夫唱婦隨、能く夫君を輔けて遂に巨富を積むに至る。恁くて昭和八年、夫君歿するや、令孫秀夫君を護りて、雄々しくも家業の經營に任じ、以て今日に至れり。

公共、公同の念に厚く、昭和九年十月、日本赤十字社京都支部病院無料病床維持資金として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を賞せられ、同十一年四月十五日、勅定の紺綬褒章を賜ひて、其徳行を表彰せられ、更に同十三年一月、大阪府北河內郡枚方町橋築架設費として、金一萬百五十圓を寄附し、同十四年五月八日、同飾版を下賜せらるゝの光榮に浴せり。其他昭和五年九月十六日、京都市民救濟會へ白米二十石を寄贈したるを始め、同十年一月十四日、京都府方面委員事業費として金一千圓、同年四月二十日、第十六師團滿洲派遣將兵慰問金として金一千圓、昭和十二年九月十八日、第十六師團を經て國防費へ、金一萬圓を、同日令孫秀夫君の名義を以て、京都市出征軍人遺家族へ、金一萬圓を夫々獻金したる外、同十三年三月京都鹽山神社へ、金五百圓を寄進し、同十四年五月十六日京都日彰在鄉軍人分會へ、銃劍術具二十組を寄附する等、各方面に私財を投じ、又神社佛閣に淨財を寄進したること枚擧に遑あらず。

刀自の如き、洵に公益優先を多年實踐し來れる篤行家にして、各方面より景仰を享けつゝある所以ありと言ふべし。

材として盛名を謳はるゝに至りし橋本關雪翁畫伯なりき。畫伯今日の榮位あるは、もちろん其の卓抜せる天資と不斷の精進によるものなるも、また九一郎氏の如き仁俠に富む人士の鞭撻ありし過去を忘るることを得さるべし。

神戸名物あかなのビルディングとして、永年にわたり堂々たるビルディングが竣工せしに拘らず、その偉容を福原口の西方一角に曝せしことありき。建設者は時代の進展に伴ひビルディングの使命に達觀せし九一郎氏なりしが、借賃契約希望者續出の中に、一つとして氏の希望と目的に副ふものなきを理由として、閉鎖のまゝ放置すること多年に及べり。一見偏狹に假たる態度と謂ふべきも、斷じて然らず、氏の高潔なる氣骨が然らしめたるものにして、到底凡庸の士の爲し得るところにあらず。氏の斯く如き仁俠と氣骨は、氏が武道を熱愛し、これに精進したる精神鍊磨の賜と謂ふべきか。氏が劍道の達人なりしは從りにも有名なり。

昭和九年七月恩賜財團濟生會兵庫縣支部の救療費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十年十二月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

樺太水産興業株式會社々長、鮮定日本水產冷藏株式會社
重役、鏑山組

皆月榮氏

明治三十一年四月十日生
北海道網走町南六條一丁目

氏は北海道網走市に生る。先考の遺業たる鏑山業に從ひて精勵克く家運を興隆せしめしが、のち水產業界に進出して盛名あり、特に樺太水產業の振興に多大の功績ありたり。

氏は同業の多くが北海道近海を漁區として、同業相嗤むの激甚なる競爭裡に、しかも消極的方針によりて蓄積を墨守するの態狀を匡正するに忍びず、父業たる鏑山業を通營するの餘力を以つて、鄂國樺太沿海に進出し、新漁區を開拓するとともに、漁獲物の販路擴大に勉め、業績大いに擧るや樺太水產興業株式會社を創設して自ら社長たり、更に網走町に日本冷藏株式會社創設せらるるや、其の機に參與して重役たり、少壯氣鋭の漁業家たる氏は夙くて海陸に業務を伸ぶるに至れり。

北門の地北海道において業を營み漁業を兼ね、更に鏑山業を經營して名を成せる者極めて多し。しかれども其の多くは北海道開拓の草創時代にありて、いまだ學なき僅蒐ならざるの時にすでに基礎を築きたるものにして、氏の如く父業を繼承したりと雖も、その業の凡てが素襖金きを得ざりじに拘らず、克くこれを育成して、仲長の榮光あらしめたるものは稱めて餘れなり。

金澤なる時運の金潮と、激烈なる競爭過程にありて、堂々父業に輝しき結實を齎らしたるは、氏が不屈不撓の精神を振起せしめて勤勉力行怠りなかりし賜と謂ふべきも、また氏の凡庸にあらざる識見と手腕に負ふところ多しと謂ふべし。

氏は夙に社會公共に事ずるの念厚く、私財を投じて社會公共事業の助成に資したる奇特の行爲夥からず、氏が漁業家にして鏑山業を營む傍ら、裏に札幌市に後樂寮院を經營するの一例を擧ぐれば、氏が如何に社會施設の擴充整備に勉意を有するかを證するに足るべし。

蓋し後樂の名稱は氏の社會公共に奉ずるの赤誠を表現するものにして、滅私の至情を吐露して餘すところなしと謂ふべし。

昭和十二年三月網走町において、消防器材の充實を期すること卒先して金壹萬圓を寄附せし厚に依り同年九月十日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

日本橋區、京橋區ゲル舟株式會社取締役、中國銀行取締役
松居庄七氏
明治二十年三月生
京都市下京區西洞小路上ル
略歴
京洛の地に於て多年牛皮販賣業品卸商を營み、確固不動の基礎と、其大なる信用とを以て聞々たる業界を全國に布き、業界第一流の商賈として、名實江湖に嘖嘖するもの、之を地區の光榮に浴す。

起せしめて勤勉力行怠りなかりし賜と謂ふべきも、また氏の凡庸にあらざる識見と手腕に負ふところ多しと謂ふべし。

氏は夙に社會公共に奉ずるの念厚く、私財を投じて社會公共事業の助成に資したる奇特の行爲尠からず、氏が漁業家にして鑛山業を營む傍ら、曩に札幌市に後樂醫院を經營するの一例を擧ぐれば、氏が如何に社會施設の擴充整備に熱意を有するかを證するに足るべし。

蓋し後樂の名稱は氏の社會公共に奉ずるの赤誠を表現するものにして、滅私の至情を吐露して餘すところなしと謂ふべし。

昭和十二年三月網走町において、消防器材の充實を期するや卒先して器材購入費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り同年九月十日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

日本新藥、京都ホテル各株式會社取締役、半襟服裝品卸商

紺綬褒章受賞者

松居庄七氏

明治二十年三月生

京都市下京區室町錦小路上ル

略歷

京洛の地に於て多年半襟服裝品卸商を營み、確固不動の基礎と、甚大なる信用とを以て隆々たる業勢を全國に布き、業界第一流の商賈として、名聲江湖に籍甚するもの、之を松居商店とす。

當家は近江國神崎郡五箇莊村より發し先々代庄七氏京都に出でゝ呉服商を創む、之を初代と爲す。先代庄七氏は岐阜縣大垣藩士市川東慶氏の六男に生れ、入りて松居家の養子となり、其家督を嗣ぐや、數十年の間日夜家業に精勵し、又諸會社に關係し其重役となりて、巨萬の富を築き、一方京都商工會議所議員として、同地商工業發展の爲に貢獻する所頗る大なりしが、昭和三年十月七十一歲を以て歿せり。氏は其長男として、明治二十年三月を以て生れ、前名を信太郎と稱す。夙に京都市立第一商業學校を卒業して家業に從ひ、先代の歿後を承けて家督を相續し、庄七を襲名す。昭和五年十二月家業を從來の個人經營より、資本金三十萬圓の株式會社松居庄七商店と改め、取締役社長となり、其經營に任ず。

資性溫厚篤實にして、頗る商才に富み、克く業界の大勢に順應して、不況時に際しても其對策を誤らず、業態年々順調發展の歩を辿りて、今日の隆盛を極むるに至る。現時日本新藥、京都ホテル各株式會社取締役として重きを爲すと共に、明倫小學校學務委員、社會教化委員、司法保護委員、調停委員等の公職に就き、盡瘁する所尠からず。居常國家奉公の念に富み、社會公共事業に對し、深き理解と厚き同情とを有し之等の事業に盡して、私財を致せること枚擧に遑あらず。昭和三年十一月恩賜財團濟生會へ、金一萬圓を寄附し、同四年五月十七日、勅定の紺綬褒章を拜受し、家門の榮譽を輝かせり。又日本赤十字社有功社員に推され昭和十五年七月一日同京都支部長より、木杯一箇を、又曩に日本海員技濟會より、二等有功章を夫々贈らる。其他東本願寺財團法人理事として同宗派の爲に力を致せり。富子夫人は溫良貞淑の聞え高く、能く家を治め、夫君をして後顧の憂なからしむるのみならず赤十字社有功社員に推され、令息修造君亦同特別社員として共に公同に盡しつゝあり。衆家其門に集る、洵に所以ありと言ふべし。

元錦衣鵬侍従
勲三位勲一等工学博士男爵　古市公威氏

安政元年閏七月十二日生
東京市渋谷区常磐石林町一八

略歴

氏は播州姫路の藩士古市孝氏の長男、明治十二年父君の亡跡を襲ぎて家督を相続、前名兵庫郎を改めて公威となす。

幼にして神童の誉れ高く、稍々長じて大学南校に學び、明治八年その英才を認められ、抜擢されて佛國に留學す。同地に遊學すること前後六ケ年エコールサントラルを卒業後、巴里大學に學び土木工學の蘊奥を極め大いに學識を博め、エンジエニル・デ・アールエ・マニフユアクチュールならびにサンシエ・エス・シヤンスの學位を受く。

明治十三年卓抜せる識見と、該博なる學識を抱いて颯爽と歸朝、歸来官途ならびに學界に重用され、土木局屬を振出しに内務、文部省御用掛、内務技師、帝國大學教授、同學長、内務省土木技師監、同土木局長、逓信次官、同總務長官、同官房長、鐵道作業局長官等を歴任し、日露戰争勃發するや京釜鐵道總裁となり戰時軍略の實を期して功績あり、次で韓國鉄道管理局長に任じ、のち官途を辭して實業界に入りては、東亞興業株式會社、東京地下鐵道株式會社各社長、ならびに金剛山電氣株式會社取締役たり。

明治二十一年工學博士の學位を授與され、同二十三年貴族院議員に勅選さる。大正八年勲功に依り華族に列せられ男爵を賜ふ。同十三年國帝顧問官に親任せられ、東京帝國大學名譽教授、帝國學士會員となる。

この間東亞鐵道研究會理事長、學術研究會議會長、前國工業會議々長日本工學會理事長土木學會々長等を歴任し、わが國土木工事界に盡瘁せしところ極めて顯著なるものありしが明治二十三年十一月一日ならびに同二十九年三月二十六日賦に勅定の叙綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰せらるるの光榮に浴せり。昭和九年逝去す。

當主六三氏は氏の長男にして明治十八年六月の出生、昭和九年家督を相續。明治四十三年東京帝國大學採鑛冶金科を卒業し、大正八年末永、南米、南阿の鑛業界を視察、住友別子鑛業所採鑛課長、住友合資會社技師長を經て、現に住友本社技師長、住友鑛業株式會社取締役たるほか帝國鑛業開發株式會社副社長たり。

貴族院議員故勲二等
錦鶏褒章受賞者
故　**古川久吉氏**

弘化三年五月二十日生
青島市堺町四ノ一七

略歴

父祖の業に精勵して、能く其資産を擴り、公共に盡して、克く其財を散じたる古川久吉氏の如き、洵に當代稀に覩る篤行の士といふべし。

氏は弘化三年五月二十日、先代伊三郎の長男に生れ、長じ

を賜ふ。同十三年樞密顧問官に親任せられ、東京帝國大學名譽教授、帝國學士會員となる。

この間東亞鐵道研究會理事長、學術研究會議會長、前國工業會議々長日本工學會理事長土木學會々長等を歷任し、わが國土木工學界に盡瘁せしところ極めて顯著なるものありしが明治二十三年十一月一日ならびに同二十九年三月二十六日夙に勅定の藍綬褒章を賜ひ、其の功勞を顯彰せらるるの光榮に浴せり。昭和九年逝去す。

當主六三氏は氏の長男にして明治十八年六月の出生、昭和九年家督を相續。明治四十三年東京帝國大學採鑛冶金科を卒業し、大正八年英米、南米、南阿の鑛業界を視察、住友別子鑛業所採鑛課長、住友合資會社技師長を經て、現に住友本社技師長、住友鑛業株式會社取締役たるほか帝國鑛業開發株式會社副社長たり。

醬油釀造販賣業

紺綬褒章受賞者

故 古川久吉氏

弘化三年五月二十日生
廣島市堺町四ノ一七

略歷

父祖の業に精勵して、饒意其發展を圖り、公共に盡して、克く其財を散じたる古川久吉氏の如き、洵に當代稀に觀る篤行の士といふべし。

氏は弘化三年五月二十日、先代伊三郎の長男に生れ、長じて家業たる醬油の釀造販賣に從事し、家督を相續して以來一層の精勵を以て業務の擴張、販路の開拓に努む。時恰も明治維新政府成りて、交通運輸の便漸く開け爲に商運著しく進展し、歲と共に其產額集增し、遂に巨萬の富を積み、廣島縣下に於ける多額納稅者の班に伍するに至れり。曩に廣島產業銀行、藝備銀行の創立に參畫し、其成立後孰れも取締役に擧げられ、又藝備鐵道株式會社監査役たる等實業界に重きを爲せり。

天資溫厚篤實、人に接して謙讓、故を以て頗る德望あり、曾て衆望を負ふて廣島市會議員に當選すること數次、同市自治に貢獻する所頗る多かりき。又公共の念に厚く、大正八年三月廣島市船入病院敷地として、烟二千三百八十七坪、價格金一萬一千九百餘圓を寄附したる廉に依り、同年十月二十九日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。其他日本赤十字社、海軍協會、武德會等の事業に寶贊して有功章を授與せられたる外、居住地の發展に盡して、町民より金盃を贈られ、明治二十七八年戰役に際しては、國民後援の實を擧げ恤兵輜軍に力を注ぎて、士氣を鼓舞するの功勞大なるものありとし廣島市會の決議を以て金盃を贈與せらる。又大正七年米價騰貴の際貧民救助の目的を以て、金貳千圓を、同十一年及同十二年の二回廣島市船入町道路敷を、同十三年關東地方大震火災救濟の爲、白米一百俵を寄附する等枚擧に遑あらず。爲に其筋より褒章其他を受けたること二十餘回の多きに及べり。

後病を以て歿し養嗣子正彥氏之を繼ぐ。氏は男爵毛利祥久氏の五男、明治三十五年五月一日を以て生れ、古川家の養子となり、先代の長女花子に配せらる。早大法科出身の秀才にして曩に藝備鐵道株式會社取締役たりしことあり。現時地主家主として、又廣島製鐵株式會社々長、大阪梅田機械株式會社監査役たり。少壯有爲の實業家として、將來の飛躍を期待せらる。

帯廣魚菜卸賣市場株式會社取締役社長、商九百貫店々主

紺綬褒章受賞者

藤本長藏氏

明治六年五月二十日生

住所　北海道帯廣市大通五ノ一九

營業所　北海道帯廣市西二條南八丁目二七

略歴

○大正十年帯廣市道路敷地として土地七段壹畝貳拾七歩を寄附せし廉に依り、同年十月五日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の傳行を表彰せらる。

○昭和三年九月帯廣市道路敷地として土地四段貳拾四歩を寄附せし廉に依り、同四年八月八日勅定の紺綬褒章飾版壹個を賜ひ、其の傳行を表彰せらる。

氏は富山縣人藤本孫右衛門氏の令弟。富山縣西礪波郡小勢村に生る。夙に北海道雄飛を志し、二十三歳の時郷里を出で吳服雜貨の行商を行ひつつ旅費を稼ぎて渡道し、明治三十年遠く十勝帯廣の原野に一茅屋を設けて、ささやかなる呉服雜貨商を創業す。本業たる呉服雜貨商を營む傍ら、荒蕪地の貸下げを受け、これを開墾して農耕地たらしめると共に牧場を經營するの有利なるに着眼し十勝郡川西村の原野三百五十町歩の拂下げを受け、畑地並に牧場の開墾經營に從事するに至る。これ實に氏が今日の大を成すに至れる第一歩にして、當時孤獨の様家たるに等しき荒蕪地の開拓に着目したる氏の理財的に秀でたる慧眼は、洵に敬服するに値ひあり。

然りと雖も如何に氏の慧眼を以てするも、氏が今日の大を成すに至れるは容易の業にあらず。無慘だに及ばざる幾多の辛酸刻苦の克服なかるべからず。氏が終始一貫常住を伴ふる唯一の恍惚として我々營々家業に精勵しつつ、なほ克く土地開拓の偉業を達成したる足跡は、後進の以て儀型となすに足れり。

しかも氏は常に社會公共に率ずる念厚く帯廣市草創の時代より戸長、役場助役、町會議員、地價調査委員、地主總會會長、實業協會長等を歴任し誠意的至誠を捧げて國家事業の遂行、地方自治の發展、産業の振興に盡したること夥からず。特に帯廣魚菜卸賣市場を創設して需給の圓滑を期し、安價にして新鮮なる食料物資を提供するの端緒を開きたるが如きまた北海印刷株式會社を起し北海道文化の向上を促進せしめたるごときは銘記するに足る功績と謂ふべし。多額納稅者たる氏は、昭和十一年六十四歳の高齢をもつて只一人、日本語を專ら使用して歐米漫遊を敢行す。この一事をのみ以てするも氏の面目躍如たるものあり。

星島倫理法人會帯廣支會會長、名古屋パルプ製造株式會社、倶知安ヶ原開墾株式會社、山王林業株式會社各取締役

藍綬褒章受賞者

福川忠平氏

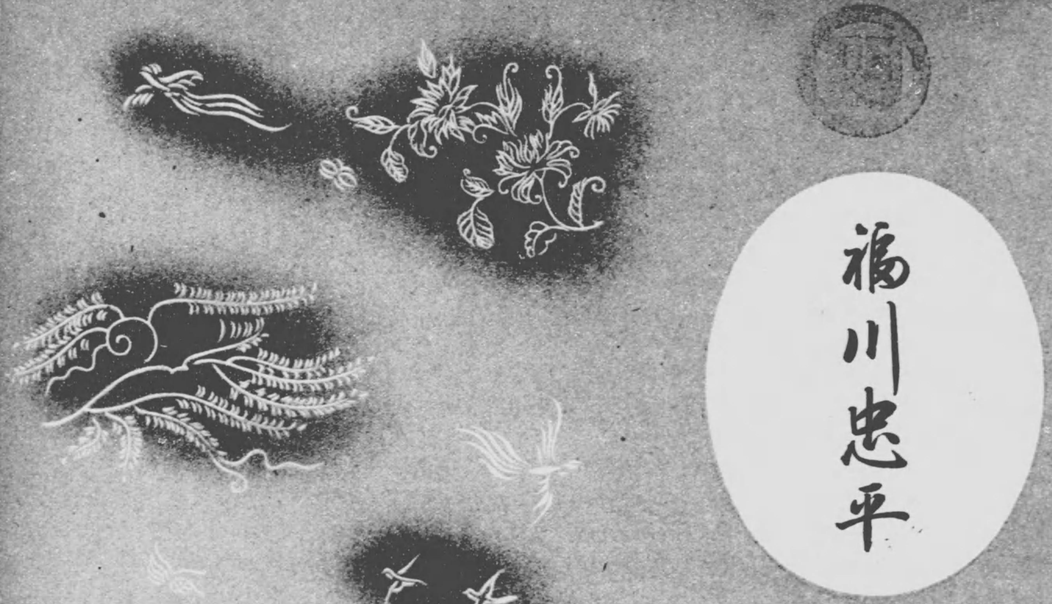
明治七年三月五日生

東京市芝區白金今里町九六

略歴

○大正七年十月日本赤十字社聯合同胞救護事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同八年十一月十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の傳行を表彰せらる。

福川忠平



成すに至れる仕容易の業にあらず。想像だに及ばざる幾多の辛酸刻苦の克服なかるべからず。氏が終始一貫希望を伸ぶるを唯一の悦楽として孜々営々家業に精励しつつ、なほ克く土地開拓の偉業を達成したる足跡は、後進の以て亀鑑となすに足れり。

しかも氏は常に社会公共に寄与する念厚く帯廣市草創の時代より戸長、役場惣代、町会議員、地価調査委員、地主協会会長、實業協会長等を歴任し誠忠的至誠を捧げて國家事業の遂行、地方自治の發展、産業の振興に資したること尠からず。特に帯廣魚菜卸賣市場を創設して需給の圓滑を期し、安價にして新鮮なる食料物資を提供するの端緒を開きたるが如きまた北海印刷株式會社を起し北海道文化の向上を促進せしめたるごときは銘記するに足る功績と謂ふべし。多額納税者たる氏は、昭和十一年六十四歳の高齢をもつて只一人、日本語を專ら使用して議会議場を取行す。この一事をのみ以てするも氏の國民精神旺盛なるものあり。

農業倉庫設立株式會社、名古屋バルプ製造株式會社、係土ケ谷實業株式會社、山王林場株式會社各重役

帯廣商業會議所議員

福川忠平氏

明治七年三月五日生
東京市芝區白金今里町九六

略歴

○大正七年十月日本赤十字社勝岡屋支部事業費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同八年十一月十一日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の賞行を褒揚せらる。

○大正九年六月より十二月に至る間に於て消生會事業資金勝岡屋立開知農林學校建設資金として金貳萬圓、震災救濟資金として金貳萬圓を寄附せし廉に依り、昭和二年四月十九日勅定の緑綬褒章御賜品並金盃を賜ひ、其の賞行を褒揚せらる。

○大正十一年五月勝岡高等學校創設費として金五萬圓を寄附せし廉に依り、明治五年五月二十一日勅定の緑綬褒章を賜ひ、其の賞行を褒揚せらる。

氏は勝岡藩の人福川忠兵衛氏の長男、勝岡藩周智郡森町に生る。先代忠兵衛氏は和泉屋屋号兵衛と稱し農業と林業を營み同地方における相當の資産家なりき。氏夙夜するに及びて社會公共に奉ぜんとする念早くも厚く、三十一歳の時同郷の先輩鈴木藤三郎氏と相謀り、周智農林學校を創立せり。農村子弟の智徳向上の設備たらしめんとする夢行にして、漸く三十歳を出でてこの企畫あり、氏の凡庸にあらざることを知るべし。次で大正二年同校建築物をはじめ一切の施設を同窓部に寄附こゝにおいて同校は私營より公營となりしが、氏は常にその後全なる成長に留意し、大正五年夏に青宿合一棟を建築寄附するの美事に出でたり。その後同校國立に移管せらるゝや金壹萬圓を、また大正十四年中等農業教員養成所として同校施設の充實を期するなど、教育の發に貢獻せしところ鮮少ならず。この間天賦の商才を發揮しては同業諸會社の經營に光輝あらしめ、その業績の内外に及び後世模範に行ふところ可ならざるはなく、一代にして郷黨の宗老となる。海に氏の如きは實底の範たるを失はず、其の富利努力の足跡と、實に社會公共に寄ずるの念厚きは、高人の亀鑑となすに足れり。

紫綬褒章受賞者

故 藤村九平氏

安政三年十一月二十四日生
徳島市新町字北側十五番地

略歴

氏は絣紺賀浦士職村九平氏の長男藤名龜吉。先考九平氏は明治八年藩侯公債の賣却金三百二十圓を資金として度量衡器の製作を創業し、大蔵省より尺度製作の請負を命ぜられ、原器の下附を受け、勇躍請負尺度の製作にとりかかりたるも、竹尺の製造に習熟したる職人を得難く、製作に困難を伴ひ、素人細工の域を脱せざりしも、偶々同九年播州姫路の同業内海某破産廃業せるを知り、直ちに人を派して失職職人を招聘するに至りて漸く製作も本格化するに至れり。

明治十年西南の役は、全國一般に不況を招き、度器製造業界も本其の餘波を受けしも、氏は時來に堅みを觀して事念家業に精勵して意らざるうち、景況漸次に回復して、業界また活氣を呈するに至り、業績鴻みに良好を加へ、後進養成所をも設立して、優秀職人の養成を開始するなど、全國同業者の注目するところとなれり。

ついで東京に出張所を開いて販路の擴張を圖る裡、東京府下に多數の取引を有したる有力の一同業者が失脚するに際しこれが取引先全部を繼承することとなり、一躍帝都業界に於ても重きを成し、業績益よ堅固となりしは幸運といふべきもまた氏創苦十餘年にわたる誠實が齎らしたる當然の報ひといふべきが受當なるべし。

技術精巧にして優秀なる藤村製品は 斷然業界を壓倒し、第四回内國勸業博覽會に於て有功賞を授けられたる外、賞せらるゝこと實に十數回に及べり。

業界に巨大なる足跡を印して明治三十六年歿するや、龜吉氏亡跡を相續して九平を襲名。先考晩年に振付けたる蒸氣原動機の偉力を利用して多量製造に邁進すると共に製造品目の擴大と製作機械の改善發明に努めたり。即ち明治三十九年交線狀巻尺製繩機、回轉式目盛鋲機其の他附屬工品製造用機械を增設し、竹尺動力目盛機械を發明。藤布産地六ヶ所揚動力機の考案を完成して斯界を瞠若たらしめ、益々先考の遺志を述成し、衛器業界商店の聲價をして内外に高からしめたり。斯くの如く氏の度器製造業界に貢獻したるところ極めて顯著なるが、大正三年三月十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の功績を顯彰せらるゝの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

故 平井由太郎氏

元治元年六月廿三日生
奈良市高畑本藥師六二五

略歴

多年中央地方の政界に馳驅して、盛名を馳せたるも、中年に及び翻然方向を轉換して米國に渡航し、功成り産を積みて歸朝するや、爾來各種の社會事業に盡瘁し、後裔を得て、其光輝ある生涯を終りたる平井由太郎氏の如き、最も異色に富める人材と言ふべし。

氏は奈良縣平井增三郎氏の長男として、奈良縣吉野郡白銀村に生れ、明治十六年家事を相續す。夙に鴻儒を卒りて漢學を修むること才識高邁にして、政治的手腕また凡ならず。明治廿二年齢僅に廿七歳にして、白銀村々長に推され、同廿六年再

ふべきが妥當なるべし。

技術精巧にして優秀なる藤村製品は　斷然業界を壓倒し、第四回內國勸業博覽會に於て有功賞を授けられたる外、賞せらるゝこと實に十數回に及べり。

業界に巨大なる足跡を印して明治三十六年歿するや、龜吉氏亡跡を相續して九平を襲名。先考晩年に据付けたる蒸氣原動機の偉力を利用して多數製造に邁進すると共に製造品目の擴大と製作機械の改善發明に努めたり。卽ち明治三十九年交線狀巻尺製織機、回轉式目盛機械其の他附屬工品製造用機械を增設し、竹尺動力目盛機械を發明、麻布巻生地六ツ筋掛動力機の考案を完成して斯界を驚若たらしめ、堂々先考の遺志を達成し、衡器業者藤村商店の聲價をして內外に高からしめたり。斯くの如く氏の度器製造業界に貢獻したるところ極めて顯著なるが、大正三年三月十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の功績を顯彰せらるゝの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

故　平井由太郎氏

元治元年六月廿三日生

奈良市高畑本藥師六二五

略歷

多年中央地方の政界に馳驅して、盛名を馳せたるも、中年に及び翻然方向を轉換して米國に渡航し、功成り產を積みて歸朝するや、爾來各種の社會事業に盡瘁し、後病を得て、其光輝ある生涯を終りたる平井由太郎氏の如き、最も異色に富める人材と言ふべし。

氏は奈良縣平井增三郎氏の長男として、奈良縣吉野郡白銀村に生れ、明治十六年家督を相續す。夙に鄕黌を卒りて漢學を修む、才識高邁にして、政治的手腕また凡ならず。明治廿二年齡僅に廿七歲にして、白銀村々長に推され、同廿六年再選、鄕土の爲に盡瘁する所極めて大なり。同廿七年以來屢次郡會縣會各議員に擧げられ、同三十六年鄕黨の輿望を負ふて衆議院議員に選出せられしが、同年十二月同院の解散に遭ふや、一切の公職を辭し、同三十七年四月、雄志を懷いて北米合衆國に渡航し、加州ロスアンゼルス市に於て植木業を經營し、年々莫大なる利益を擧げ、數年後には鞏固なる基礎を築き、居留同胞の間に尊敬せらるゝの地位を占むるに至れり。此間同胞の親和、福祉の增進、兒童教育の普及、國民精神の涵養に意を注ぎ、又日本人會長として、或は日本病院社長、日本學團理事長、佛教會理事長として、在留同胞の保護と、其發展の爲に盡したる功甚だ大也。恁くて昭和二年六月歸朝し、奈良市に居をトし、晩年和歌書畫等を侶として餘生を送りつゝありしが、昭和八年三月廿七日、享年七十歲を以て、隣人哀悼の裡に遠焉として長逝せり。

公共の念に厚く、曩に在米中西本願寺別院設立費として、金七萬弗を寄附し、又鄕里白銀村北小學校及南白銀村小學校基本財產として、金壹萬圓を寄附し、昭和三年十月廿四日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。

家庭には夫人マスエ（明治六年生）長男喜孝氏（明治廿五年三月生）同夫人清江（明治三十一年三月生）奈良縣仲谷清太郎氏の長女、同縣五條高女卒業、長男喜清（大正十二年四月生）天理中學在學中、長女和子（大正八年十二月生）奈良女高師附屬高女卒業後大阪女專卒業、次女タミ子（昭和八年三月生）小學校在學中、當主長男喜孝氏は北米合衆國カルホルニヤ大學を卒業したる秀才にして、現時日本無煙炭鑛業株式會社に長として、敏腕を揮ひつゝあり。

故由太郎氏の次男章治（明治廿七年生）は米國紐育大學商科卒業、現在大德重工業株式會社々長（東京）同夫人時子（明治三十四年生）神奈川縣堀田知二郎氏の三女、米國桑港ハイスクール卒業、同三男池田慶四郎（明治三十三年生）高智商業卒業池田家に養子となる、同長女マス子（明治三十八年生）米國ハリーウッドハイスクール卒業、南加大學音樂科卒業現在合衆國に於て音樂家として在留す。

黄綬褒章受賞者

故 福島彌兵衛氏

福島合名會社代表社員

大正三年二月二日生
東京市本所區緑町一丁目六

略歴

福島家の祖は越前の出身、夙に江戸に出で諸大名旗本に出入して、用金方を勤め傍ら質商を営む。連綿二百五十年に及ぶ舊家なり。

當主彌兵衛氏は東京府の人福島繁三郎氏の三男、東京市本所區千歳町二丁目（當時松井町一丁目）に生る。先代祖父八代彌兵衛氏の婿子となり、昭和二年家督を相續、前名明を改して彌兵衛を襲名す。

歴代家業に精勵して家運を興隆せしむると共に、常に意を社會公共の爲めに奉ぜんことに用ひ、あるひは社會事業に、あるひは教育事業に私財を投じて裨益せしところ尠からず、七代彌兵衛氏のごときは隠居して豊と改名するに至る迄深川區學務委員長たること實に二十餘年に及び、教育事業の振興に寄與せしところ頗る多大にして、教育功勞者として文部省ならびに東京府より表彰されしこと數回に及べり。

先代彌兵衛氏また夙に海防事業の充實整備を痛感し、これが助長に尠從せしところ鮮少ならず、明治二十年七月二十一日早くも勅定の黄綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

柴光輝く家門をして、其の名を辱しめず、ますます家運を興隆せしむると共に、家名を盛んならしむるものは鮮し。福島家歴代その人を得て傳統の家門に榮譽を添へたるのみならず、父祖傳來の家業を守りて精勵、時代の進展に伴ひて、業容の整備を斷行して誤らず、確固不動の業礎を築きて揚ぎなきを得たるは、偏に見るの遠慮にして、以てわが國家族制度の範たるを失はず。

時に當主彌兵衛氏は、いまだ少壯の域を脱せざるに拘らず圓轉滑脱すでに老成の風格あり、福島合名會社代表社員として家業の發展を圖らすと共に、父祖の遺志を伸べて餘すところなく、幾中教育事業の發展に專念し、私財を投じて斯業の伸張に資するところ鮮少ならず、大正十四年東京市本所區教育會へ金壹千圓、同深川區教育會へ金壹千圓、千葉縣市川市教育會へ金壹千圓をそれぞれ寄附せしほか寄特の行爲枚擧に遑あらず。

前途なほ春秋に富み洋々たるものあり、推されて諸公職に就き、國家社會に更に一段奉仕するの日近かるべきを信じて疑はず。

京都瓦斯株式會社取締役、福島合資會社無限責任社員
平井興業株式會社社長々兼、國際觀光協會理事

黄綬褒章受賞者

平井仁兵衛氏

嘉永元年二月十六日生
京都市下京區清水三丁目

○昭和二年二月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、同三年六月六日勅定の黄綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

○昭和二年三月京都府奥丹後地方震災罹災者救助費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同三年十二月二十七日同府版地縣を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

平井仁兵衛

京都瓦斯株式會社取締役、朝鮮無煙炭鑛株式會社監査役
平井同族株式會社々長、西陣織物卸問屋

紺綬褒章受賞者

平井仁兵衛氏

萬延元年二月十六日生
京都市下京區清水三丁目

○昭和二年二月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、同三年六月六日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○昭和二年三月京都府奥丹後地方震災罹災者救助費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同三年十二月二十七日同飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

氏は滋賀縣犬上郡豊郷村四十九院の人村上十平氏の長男にして、幼名小三郎。

氏は天資英邁にして慧敏、幼にして神童の譽高かかりしが十七歳にして早くも家總代となり二十一歳にして戸長を命ぜらる。以て凡庸の士にあらざりしことを知るに足るべし。

氏夙に遠大の希望あり、家郷に在りて朽ちんより、都會に進出して商業を以て身を立て名を成さんことを決意し、明治十八年父君に乞ふて家業はこれを實弟に委ね、京都に出でて、西陣織商として盛名ありし先代平井仁兵衛氏商店へ見習とし奉公するに至れり。

もとより俊英、忽ち主家の認むるところとなり、信認を博し遂に同家の養嗣子となる。店員より家族の主柱に飛躍したる氏は孜々營々養父を扶けて精勵倦むところを知らざりしが氏が養嗣子に迎へられたると年を同うして養父の急逝に遭ふ。即ち家督を繼ぎ養父名を襲ひて仁氏衛と改名一段と家運の隆興に邁進すると共に、西陣織物の新研究に沒頭し、斯業の進展に寄與するところ尠からず、偶々日露の役勃發して業界不振に陷るや西陣織物補救會を組織して失業者を救濟する等應急の措置に萬全を期しつつ斯業の挽回に稗益せしところ多大なりき。晩近非常時局下にあつて同業再び悲運に遭遇するや、愼重國策の遂行に協力を投ずると共に、同業の歸嚮するところを誤らしめず、業界浮沈の重大時機に處して善處したる態度は一佳話たるを失はず。

氏は家業を督する傍ら京都商工會議所議員たること二期に及び、また京都瓦斯株式會社、同拓殖會社取締役、平安銀行監査役として京都財界に盡瘁したる功績も亦沒すべからざるものあり。

明治四十四年故里に進農會を組織して農村の振興に資したる外善行多かりしが、昭和の聖代を迎へて顯書の光榮に浴す。

町會議員、元産業組合長、農業

紺綬褒章受賞者

番場義作氏

明治二十年二月三日生
北海道常呂郡野付牛町八三五

略歴

氏は石川縣人番場與三松氏の次男、石川縣羽咋郡河合村太田に生る。生家は世々農を以て家業となせしも、貧にして窮乏年とともに加はり、打開の策を講ずるの必要に迫られしが恰も明治三十一年九月氏の實兄佐市氏屯田兵として北海道に派遣せらるゝこととなりたるを好機に父母兄弟一家五人を擧げて北海道に移住し、現住の地野付牛村に居住することとせり。氏十二歳の時なり。氏郷里にありては、家業を扶くるに急なると家貧しかりしかば、小學校にすら通學することを得ざりしが、北海道に渡りて漸く小學校に學ぶことを得たる氏は佐藤歡喜して學業に勵むこととはなれり。しかれども、夏季農繁期に入れば家事を手傳ふの日多くして、自然通學を廢するのやむなきを例とし、冬季のみ辛うじて全學期を通じて通學するを得たりしが、しかも學業常に拔群にして優秀なる成績を以て卒業するや、更に補修科に學ぶこと二ヶ年に及びしが、十六歳の時父君の奬めに從ひて商店員となり、商道を習得すること五ヶ年、主家を辭して社會に出でたる氏は、いまだ職運に惠まれず、ある時は土工の群に投じて苦難をなむる等幾多の辛酸を克服し、漸く二十五歳にして獨立分家し、本來の希望たりし農業に從事することとなれり。然るに同年實兄佐市氏急逝しまたも氏の前途は暗雲に閉されんとせしが不屈不撓の精神に自らを鞭うちて實兄遺族四人を引きとると共に、更に勇を鼓して日夜開墾の業に從ひ、孜々として精勵して倦むところを知らず、大正五年に至りて現住の地を中心に近隣の畑地十町歩を購入するの盛況を呈せり。その後更に同所附近四十餘町歩をも購入せしが、忽ち學校建設指定地となり、漸次學校官衙住宅の數を增し番場町を形成するに至れり。町名に氏の姓を冠したるは蓋し氏の開拓の功績を永久に記念せんがためなり。氏は開墾開拓の素志を達成するや農園の經營、植林事業、畜産業をも創業し、また資を投じて製氷會社專務たり、地方産業の振作に寄與するところ尠からず、町會議員、學務委員としての功勞また著大なり。

昭和十三年九月野付牛中學校敷地として土地參町參段參畝十歩を寄附せし廉に依り、同十四年勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

紺綬褒章受賞者

第七等 故 松永功氏

明治二十五年二月廿七日生
三重縣北牟婁郡船津村中里

略歴

氏の生家松永家は代々林業を營み、同地方有數の素封家にして、嚴父忠兵衛氏は永年にわたり船津村村長、助役、郡會議員として地方自治の發展に盡瘁せり。

氏は早稻田大學商科の出身。資性溫厚篤實頭腦明敏、夙に英俊の譽れ高かりしが、深く期するところあり、同窓競ふて職を求むるに拘らず、氏は悠然故郷に歸り、直ちに一年志願兵として軍隊生活に入れり。滿期除隊の後專ら父業に從ひ嚴

紺綬褒章受賞者

勳七等　故　松永功氏

明治二十五年二月廿七日生
三重縣北牟婁郡船津村中里

略歴

氏の生家松永家は代々林業を營み、同地方有數の素封家にして、嚴父忠兵衛氏は永年にわたり船津村村長、助役、郡會議員として地方自治の發展に盡瘁せり。

氏は早稻田大學商科の出身。資性溫厚篤實頭腦明敏、夙に英俊の譽れ高かりしが、深く期するところあり、同窓競ふて職を求むるに拘らず、氏は悠然故郷に歸り、直ちに一年志願兵として軍隊生活に入れり。滿期除隊の後專ら父業に從ひ嚴父を扶けて精勵恪勤、郷黨の信望また漸く厚きを加へたるが大正七年シベリヤに出征、拔群の功を樹てて凱旋、再び家業に專念するに至りたるが、當時船津村に郵便局なく林業並に郷村の發展に支障を來すこと尠からず、當局に乞ふて三等郵便局を設置せしめ、大正九年三月自ら局長の職に任ぜらる。

最高の學府に新知識を修得し、更に萬里の戰野を馳驅して勳功に包まれたる新進氣鋭の青年が、三等郵便局長の職に甘んずることは、到底凡庸の業にあらず、氏が敢て家郷にとどまりて此の途を選びたるは、氏の胸底に愛郷の熱意と、浮薄輕佻家郷を捨てて都會に走る農村子弟の輕擧を戒しめんとする熱情の存したるに因るものと謂ふべく、重厚にしてしかも慧敏なる氏の性格を覗ふに足る態度として敬服すべきなり。

氏は郵便局長として通信事務に精勵して、郷村の文化の向上と産業の發展に資するところ多かりしのみならず、修得せる新知識によりて、村内百般の施設改良に滅私的努力を投じたるため、村民の長敬愈よ加はり、衆望益々高きを加ふるに至れり。即ち大正十年五月村會議員選擧施行せらるゝや、推擧されて立候補し、最高點をもつて當選、着々村政の革新に當り、氏の指導的卓見によりて村治は面目を一新せり。次で同十二年十二月更に學務委員に擧げられ、郷村子弟の教育に幾多の新機軸をひらき、其の遠大なる學識は、近郷に迄謳歌され、大いに將來を期待されしも、昭和十年一月病を得て歿す。享年四十四。

大正八年十二月勳八等に敍せられ瑞寶章を賜ひ、昭和二年五月勳七等に陞叙せらる。

昭和三年七月三重縣北牟婁郡船津川改修費として金壹萬五千餘圓を寄附せし廉に依り、同年十月一日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

本來の希望たりし農業に從事することとなれり。然るに同年實兄佐市氏急逝しまたも氏の前途は暗雲に閉されんとせしが不屈不撓の精神に自らを鞭うちて實兄遺族四人を引きとると共に、更に勇を鼓して日夜開墾の業に從ひ、孜々として精勵して倦むところを知らず、大正五年に至りて現住の地を中心に近隣の畑地十町歩を購入するの盛況を呈せり。その後更に同所附近四十餘町歩をも購入せしが、忽ち學校建設指定地となり、漸次學校官衙住宅の數を增し番場町を形成するに至れり。町名に氏の姓を冠したるは蓋し氏の開拓の功績を永久に記念せんがためなり。氏は開墾開拓の素志を達成するや農園の經營、植林事業、畜産業をも創業し、また資を投じて製氷會社專務たり、地方産業の振作に寄與するところ尠からず、町會議員、學務委員としての功勞また著大なり。

昭和十三年九月野付牛中學校敷地として土地參町參段參畝十歩を寄附せし廉に依り、同十四年勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元仙臺商業會議所會頭、元仙臺市長

藍綬褒章受賞者

故　正六位勳五等　**早川智寛氏**

弘化元年七月二十四日生
仙臺市花壇一

略歷

氏は小倉藩士早川慶兵衛氏の長男たり。早川家は其の祖甲斐源氏逸見氏に創り、世々豐前小笠原侯に仕ふ。もと速水を氏となせしも智寛氏に至りて早川と改姓す。氏は幼名彦太郎父君歿後延太郎と更め、退藏と改名更に智寛と改む。

慶應三年二十四歳にして長崎に遊學、ついで上京して海軍豫備校攻玉塾に入り、明治四年六月兵部省勤務を命ぜられしも辭して同十二月土木寮に入る。同六年十二月土木中屬に任ぜらる。氏三十歳の時なり。爾來累進して三重、宮城兩縣土木課長に任じ、更に宮城縣勸業課長を兼任、同十六年産牛馬組合理事長を命ぜられ、農商課長兼努となる。同十九年十月愛媛縣書記官に任ぜられしも、辭して仙臺土功會社を興し自ら社長の任に就く。同二十年社長を辭し同志と相謀りて新たに早川組を設立し土木請負事業を開始す。氏四十四歳の時にして氏の實業界進出の第一歩たり。同二十二年早くも推されて仙臺實業組合中心會長となり、二十四年四十八歳にして更に仙臺商業會議所會頭の要職に就く。同二十六年早川組を解散して資産拾餘萬圓を組員に頒與し、社員感激して銅像を建設して恩を謝す。以て氏の人格を窺ふに足るべし。同年仙臺米穀取引所理事長となり、宮城縣農會長、郡會議員、村會議員、地方森林會議員、大日本蠶絲會宮城縣支部幹事長、其の他産業團體公共團體の要職を歷任し、明治三十六年仙臺市長に推さる。同三十九年勳五等に敍せられ双光旭日章を賜ふ。同四十三年二月多年にわたる功勞を嘉みせられ藍綬褒章を賜ふの光榮に浴す。大正七年一月逝く、享年七十五。

氏は至誠の士にして資性豁達、少壯夙に國事に奔走するところあり、しかも明治維新の大業成るや、政事を談ぜず學を修めて修練怠りなく內務省官吏を經て野に下り、殖産興業に精勵し、植林、荒蕪地の開拓、養蠶の奬勵、牧畜の振興、其他各種産業の振作、農事の改善、教育の普及、勤儉貯蓄の奬勵、小學校基本財産の蓄積、窮民の救恤等凡そ社會公共を益したる功績著しさものあり、敍上の經歷は單にその要職の一班を羅列したるに過ぎざるも、氏が終生を通じて成就達成したる諸事業は、今や多大の成果を齎らし、何れも氏の遺德景仰の的たらざるはなし。

橋本工作所主

紺綬褒章受賞者

橋本太四郎氏

明治二十年八月二日生
大阪府泉南郡佐野町高松一二四六

略歷

大阪府下の南部に位し、和泉國に包含せらるゝ泉北、泉南

橋本太四郎

橋本工作所主

紺綬褒章受賞者

橋本太四郎氏

明治二十年八月二日生

大阪府泉南郡佐野町高松一二四六

略歴

大阪府下の南部に位し、和泉國に包含せらるゝ泉北、泉南の兩郡は、隣縣紀州と共に、晉に近畿に於ける第一の機業地たるのみならず、亦我邦有數の機業地として、其名聲海内に籍甚するものあり。多年斯業に依りて發達を遂げたる此地方は、今後更に機業に因りて一層の發展を見むとするの情勢に在り。玆に小傳を叙せむとする橋本太四郎氏は、加賀の國金澤百萬石の城下に人と成り、弱冠志を樹てゝ近畿に出で、遂に泉州機業の中心地たる泉南郡佐野町に來りて、斯界に入り爾來織物機の研究に志し、慘憺たる苦心の結果、幾多の優秀なる機器を創造し、同地業界の爲に多大の貢献を捧げたる先覺者にして、苟も泉州の機業界を語らむとするものゝ、斷じて逸すべからざる人材なりとす。

氏は石川縣人、橋本榮次郎の八男として、明治二十年八月二日、金澤市に生る。資性頴悟にして、頗る創造の才に富み少時既に群童の間に、其將來を矚目せらる。夙に大志を抱き北陸の邊土に碌々たるを欲せず、即ち明治四十年決然泉州に來り、身を機業界に投ず。後橋本工作所を創立し、拮据經營に任ず。氏の事に當るや、熱誠を傾け、不退轉の意氣を以て勇往邁進、之を成就せずんば已まざるの概あり。恁くて漸次業界に大を爲し、特に織物の糊付機の改良創作に腐心し、遂に之に成功して優秀なる機械を製作し、業界に偉大なる貢献を爲し、各方面より斯業の大先達として景仰せらるゝに至れり。曩に米國に於ける織物機研究の爲に渡米し、滯留二箇年に亘りて各機業地及織機を視察調査し、來歸其研究製作に資する所大なるものありき。

一面公共、公同の念に厚く、佐野第一小學校修養道場建設費として、金三萬圓を寄附したる外、日本赤十字社へ六千圓陸海軍兩省へ各金五千圓、浪速中學校々費一千五百圓、同校内に神社建設費一千圓、其他各方面に私財を投じたる額五萬六千餘圓に達せり。爲に其功を錄せられ、昭和十三年八月九日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。

米穀取引所理事長となり、宮城縣農會長、郡會議員、村會議員、地方森林會議員、大日本蠶絲會宮城縣支部幹事長、其の他産業團體公共團體の要職を歷任し、明治三十六年仙臺市長に推さる。同三十九年勳五等に敍せられ双光旭日章を賜ふ。同四十三年二月多年にわたる功勞を嘉みせられ藍綬褒章を賜ふの光榮に浴す。大正七年一月逝く、享年七十五。

氏は至誠の士にして資性豁達、少壯夙に國事に奔走するところあり、しかも明治維新の大業成るや、政事を談ぜず學を修めて修練怠りなく内務省官吏を經て野に下り、殖産興業に精勵し、植林、荒蕪地の開拓、養蠶の奬勵、牧畜の振興、其他各種産業の振作、農事の改善、教育の普及、勤儉貯蓄の奬勵、小學校基本財産の蓄積、窮民の救恤等凡そ社會公共を益したる功績著しさものあり、彼上の經歷は單にその要職の一班を羅列したるに過ぎざるも、氏が終生を通じて成就達成したる諸事業は、今や多大の成果を齎らし、何れも氏の遺德景仰の的たらざるはなし。

農業

紺綬褒章受賞者

故　原　清兵衛氏

嘉永五年二月二日生
神奈川縣高座郡相原村小山六〇八

略歷

原家は世々神奈川縣下相原村小山にありて農を業とせしが氏が呱々の聲をあげたる嘉永五年たるや、浦賀灣頭に砲聲一發、黑船の來航により世は擧げて物情騷然たる中に新日本の黎明を告げし年にして、新日本の誕生と共に原家の動向も著しく生氣を帶び寒村の一農家たるにとゞまらず新開港地浦賀に接壤せる新開地の一新人として、劃期的飛躍を期して再出發するに至れり。

即ち慧眼克く時代の將來を達觀して土地の買收に勉め、農家たるよりは寧ろ大地主たらんことを志して着々近隣に雄志を伸べて、目的の達成に邁進せしかば、清兵衛氏稍々長ずるに及んでは原家の財は、地方屈指の域に達し、土地の開發に依る地方發展策は、愈よ其の緒につかんとするの殷盛を極め氏も亦家業の伸張に不斷の努力を投じ、駸々乎として進歩の一途を辿りたる、わが國運の進展を其の儘に家運の隆昌に反映せしめ、日清日露の兩役を經て、國威大いに揚るや、原家また頻りに家財を積み、四隣の徳望自らあつまり、地方名望家の一つに推さるるに至れり。

氏は家財の膨脹に得々たる凡庸の士にあらず、夙に地方における殖産興業に意を用ひ、機を得て私財を提供しこれが振興に資するところあらんことを期せしが、偶々其の地農黨に適するに想到するや、卒先して縣立農黨學校の建設を說き、遂に同志の協力を得て縣當局を動かし、設立の議漸く成り校地の決定せらるに際して逸早く其の所有にかかる畑地二町六段七畝二十七歩を敷地として提供せり。

大正十二年十二月同校竣工以後、地方農村の子弟にして同校に學びて農黨の學を修め、家業を隆興して農黨業の發展伸張に裨益したる者極めて多く同地方今日のの隆盛あるは多く氏の功績に負ふところ。大正十四年校地敷地寄附の廉に依り勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主清兵衛氏また先考の遺志を伸べ社會公共に奉ずるの念厚く、就中其の產業道路の開發整備に專念盡瘁し、縣道村道用地として寄附したる土地、すでに壹萬坪に及べり。現に日本赤十字社特別社員たるも、用地寄附の功勞により近く顯彰せらるゝの光榮に浴すべく原家に榮光を添ふる日また遠からざるべし。

元第二銀行、横濱興信銀行各頭取、元原合名會社社長

紺綬褒章受賞者

故　從五位勳三等　原　富太郎氏

明治元年八月生
横濱市中區本牧町三ノ溪四三五九

略歷

○大正九年十二月恩賜財團濟生會へ金拾萬圓寄附せし廉に依り、同十年五月十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○大正九年五月社團法人神奈川縣匡濟會へ金拾萬圓を寄附

適するに想到するや、卒先して縣立農蠶學校の建設を說き、遂に同志の協力を得て縣當局を動かし、設立の議漸く成り校地の決定せらるに際して逸早く其の所有にかかる畑地二町六段七畝二十七歩を敷地として提供せり。

大正十二年十二月同校竣工以後、地方農村の子弟にして同校に學びて農蠶の學を修め、家業を隆興して農蠶業の發展伸張に裨益したる者極めて多く同地方今日のの隆盛あるは多く氏の功績に負ふところ。大正十四年校地敷地寄附の廉に依り勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主清兵衛氏また先考の遺志を伸べ社會公共に奉ずるの念厚く、就中其の產業道路の開發整備に專念盡瘁し、縣道村道用地として寄附したる土地、すでに壹萬坪に及べり。現に日本赤十字社特別社員たるも、用地寄附の功勞により近く顯彰せらるゝの光榮に浴すべく原家に榮光を添ふる日また遠からざるべし。

元第二銀行、横濱興信銀行各頭取、元原合名會社社長

紺綬褒章受賞者

故 從五位勳三等 **原 富太郎氏**

明治元年八月生

横濱市中區本牧町三ノ溪四三五九

略歷

○大正九年十二月恩賜財團濟生會へ金拾萬圓寄附せし廉に依り、同十年五月十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○大正九年五月社團法人神奈川縣匡濟會へ金拾萬圓を寄附せし廉に依り、昭和二年六月十四日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

○大正九年三月明治神宮奉養會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、昭和四年二月十八日勅定の紺綬褒章飾版壹箇を賜ひ其の善行を表彰せらる。

原 屋壽氏

横濱市辨天通三丁目四八

○大正十三年十一月財團法人横濱孤兒院敷地として土地二段九畝十四歩を寄附せし廉に依り、同十四年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

原 壽枝氏

横濱市辨天通三丁目四八

○昭和十二年九月社團法人神奈川縣匡濟會へ金壹萬貳千參百圓を寄附せし廉に依り、同十四年八月二十三日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらる。

故原富太郎氏は單に横濱市財界の重鎭長老たりしのみならず、わが國生絲輸出貿易界の覇者として、多年にわたり蠶絲貿易の改善發達に努力を投じたる偉傑たりき。

氏は青木久兵衛氏の長男、東京專門學校を卒業するや當時埼玉縣兒玉郡渡瀨村より出で横濱にて茂木惣兵衛氏と竝び稱せられたる豪商原善三郎氏の嗣子元三郎の養嗣手となり、同氏長女屋壽女と婚姻す。元三郎氏歿後家業を嗣ぎたる氏は祖父善三郎氏を扶けて生絲貿易に專念從事し、原合名會社を根據として實業界財界を縱橫に馳驅し、盛名を謳はる。氏はまた有名なる美術愛好家にして著名畫家にして氏の援助を仰ぎたるもの尠からず。三溪と號し自ら彩管を揮ふを悅樂とせり屋壽氏は即ち氏の未亡人にして、壽枝氏は長男善一郎氏の未亡人たり。一家二代にわたり三度光榮に浴す。原家に榮光を添ふるものと謂ふべし。

精農篤志者褒賞者

長谷川末吉氏

明治元年十月九日生
北海道銅路國厚岸郡厚岸町弁天町一二

略歴

氏は青森縣人長谷川峰五郎氏の長男。青森縣西津輕郡鳴海村字浮田に生る。長谷川家は代々農を以て業となせしが、父君峰五郎氏夙に北海道開拓の雄圖を抱き、明治八年渡道して釧路國厚岸に移住。素志を伸べんとせしも不幸事業悉く失敗に帰り、家運また顧る圍鬱に瀕するに至りしかば、氏も遂に意を決し父君のもとを去つて土木建築請負業諸山傳次氏に身を寄す。土木建築請負業に從ふこと四ケ年、この間幾多の辛酸困苦に耐へ、主家に仕へて誠實勤勉、勤倹力行して若干の財を蓄ふるを得たり。すなはち明治二十三年歸して獨立、海産物仲買業を創業す。結婚經營家業に精勵すること二ケ年にして更に酒造業を創む。實に氏が北海道酒造業界に於て關を占むるに至る第一歩なり。時に明治二十五年。至二十六年父君を喪ふ。債鬼来りて氏を責む。創業早々にして業務多端なりし氏に更に亡父負債の負擔加はる。しかも氏は血涙の奮闘をもつて克く亡父の負債を皆濟し、なほ家業の伸展を遂げしめて小康を得るに至れり。氏の如きは實に赤手空拳より身を起し、獨立獨歩身命を唯一の資となして不斷の努力を投じ、遂に業績を成す。洵に立志傳中の逸材にして、また業庶の範となすに足れり。

農業實工績立として商勢益々良好となるや氏は更に農業を伸べて木材業、農業、呉服、太物類賣業を兼營するに至れり。廣大なる遊林地の拂下げを受けてはこれを開墾して農牧の業を起し、また地勢を考慮しては宅地となすなど、土地開拓利用に關特の手腕を揮ひて餘すところなく、加ふるに鰊魚製造業をも開始す。その自由奔放にしてしかも堅實なる企業方針は行ふところ可ならざるなく遂に北海道多額納税者たるの地位を獲得す。氏はまた村總代、町會議員、水産組合長、酒造組合長、農會長等の公職を歴任して自治の發展、殖産興業に神益せし功績極めて顯著なるのみならず、私財を投じて社會公共に率したる寄特の行爲枚擧に遑あらず、其の額十數萬圓にのぼる。就中昭和八年厚岸尋常小學校用地として價格五萬圓の土地を寄附せし點に依り、同十一年九月二十四日勅定の精農篤志者褒賞を賜ふの光榮に浴す。

業礎愈よ確立して商勢益々良好となるや氏は更に業翼を伸べて木材業、農業、呉服、太物販賣業を兼營するに至れり。廣大なる荒蕪地の拂下貸下げを受けてはこれを開墾して農牧の業を起し、また地勢を考慮しては宅地となすなど、土地開拓利用に獨特の手腕を揮ひて餘すところなく、加ふるに煉瓦製造業をも開始す。その自由奔放にしてしかも健實なる企業方針は行ふところ可ならざるなく遂に北海道多額納稅者たるの地位を獲得す。氏はまた村總代、町會議員、水産組合長、酒造組合長、農會長等の公職を歷任して自治の發展、殖産興業に裨益せし功績極めて顯著なるのみならず、私財を投じて社會公共に奉じたる奇特の行爲枚擧に遑あらず、其の額十數萬圓にのぼる。就中昭和八年眞龍尋常小學校用地として價格五萬圓の土地を寄附せし廉に依り、同十一年九月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

太平鑛業株式會社、大和石油株式會社各取締役、日本サルベージ株式會社相談役、國光製鋼鑛業株式會社、長谷川株式會社各社長、輸出入業

紺綬褒章受賞者

長谷川爲藏氏

明治二十三年五月二十九日生

住所　神戸市葺合區篠池通七ノ一八

營業所　大阪市西區土佐堀一ノ三六

略歷

氏は福井縣今立郡和田村内田彌左衛門氏の二男たり。嚴父彌左衛氏は農を業とし副業として蠶種製造を營みしも、氏は中産階級の子弟として家運の隆盛を期するの念やみ難く、父業を繼ぐとするも、專門的知識を必要とするを痛感し、嚴父に乞ふて福井縣農藝化學技術員養成所に入る。研學の進むに伴ひ、自ら進むべき途あるを發見、學業を卒るや家業を繼ぐを斷念して大阪に出で、大阪アルカリ株式會社に入る。青年技術家として大いに敏腕を認められ、將來を期待されしが、深く期するところありて、同市長谷川商會に轉じ、健實にして神速なる商才を發揮し、技術家にして而も衆を率ひるの政治的手腕あるを推賞され漸次累進の一途を辿るに及んで、同商店主長谷川辰太郎氏の着目するところとなり、同家の養嗣子となり、一女ゆき女と結婚。養父を扶けて縱横の才腕を揮ひ、長谷川商店の隆昌發展に資するところ極めて多く、實業家たるの地歩を築くや、各種企業に參畫し、帝國サルベージ帝國海事其他諸會社の當務を歷任し、長谷川株式會社、國光製鋼鑛業株式會社を創設し、共に社長としてこれを主宰し、さらに太平鑛業株式會社、大和石油株式會社の取締役として練達の敏腕をもつて運營の衝に當り、國家産業の進展に寄與しつつあり。

今や國家は高度國防國家建設の途上にあり、氏の職域また此の大事業に關聯するところ多く、職分奉公に日夜奮鬪努力しつつある氏の如きは、寔に理想的産業人と云ふべく、また氏は夙に社會公共の念に篤く、大正十年故里福井縣今立郡和田村小學校へ、備品購入費として金壹千圓を寄附して褒狀を授けられたる外、恩賜財團濟生會基金、海事救濟資金、軍人援護資金、各種社會事業資金、神社改繕資金、佛閣造營資金として多額の浮財を寄附し感謝狀褒狀を授けられたること枚擧に遑あらず。

昭和十四年十月日本赤十字社兵庫支部事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十二月十二日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。

株式會社野田製材所取締役社長、ベニヤグルー株式會社取締役

精靈表章受賞者

野田幸作氏

明治十一年一月十九日生

住所　靜岡縣庵原郡富士川町中之郷一二二二

營業所　靜岡縣庵原郡富士川町中之郷六四八

略歷

氏は靜岡縣人野田長平氏の次男、靜岡縣庵原郡富士川町に生る。

實々農を家業とし、氏もまた初等教育を修了するや農事に從事せしが、次男として夙に新たなる業を興して一門に榮えあらしめんことを期し、秘かに其の機を待ちしが、明治三十五年氏二十四歳にして材木商を創業するに決し、山林事業に身を投じて斯業の基礎知識たる木材の品質、良否、用途、產地、仕向地、慣行、運搬、其の他伐採技術、製材技術等を專念實地に臨まで研究し、到底凡人の企及し得ざる刻苦勉勵を克服し、自ら從業員に伍して勞働に從ふ等、身を以て研鑽に當りしかば、斯業の蘊奧を究むること速やかに、大正四年に至りて家鄕富士川町に製材工場を設立するを得たり。斯くて氏の初志たる新業開拓の緒緖を得たりと雖も、容易に業務は確立し得るものにあらず、更に修業時代に倍加する辛酸を經て漸く業礎の確立を見るや、氏は尋飛躍を試みて昭和九年一月ベニヤ工場を新設せり。

ベニヤ板の需要は範圍廣大なれども、其の製作に當りては特に優秀なる技術を必要となす。氏は僅かに初等の教育を終了したるのみなるに拘らず不斷の努力を投じて獨學克く斯業の向上に勉め、專門知識を會得するを得たりしかば製品の聲價高きを加へ、麾下同業の製品を壓倒するの盛況を示せり。

昭和十三年一月業容益々擴大するや木材關係事業を一切包括せる株式會社野田製材所を設立、自ら取締役社長となりて全般の業務を統轄するに至る。

この間庵原安倍材木商同業組合副組合長、同組合長、同顧問を歷任して業界の進展に資したるところ尠からず、また富士川町會議員、富士川信用購買販賣組合監事、理事、同副組合長として地方自治の發展ならびに、一般產業界の振興に寄與せしところ多し。

氏はまた社會公共の念に厚く、富士川小學校の電話、ラヂオ設置費として金壹千圓、富士川町各種團體へ金壹千圓、軍人後援會へ金五千圓を寄附せしが、昭和十四年七月富士川町教育振興費として金壹萬圓寄附せし廉に依り、同十五年五月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

精靈表章受賞者

故西尾正七氏

文久二年八月二十一日生

兵庫縣川邊郡東谷村下財字國之町五六

略歷

北緯一帶の地は北に連疊たる山脈を負ひ、南は近く茅海に臨み、氣候温和にして地味豐かに、而も大阪、神戸の兩大都市と接近の關係にあるを以て、產業大に興り、交通の便亦開け、古

の向上に勉め、專門知識を會得するを得たりしかば製品の聲價高きを加へ、縣下同業の製品を壓倒するの盛況を示せり。

昭和十三年一月業容愈よ擴大するや木材關係事業を一切包括せる株式會社野田製材所を設立、自ら取締役社長となりて全般の業務を統轄するに至る。

この間庵原安倍材木商同業組合副組合長、同組合長、同顧問を歷任して業界の進展に資したるところ尠からず、また富士川町會議員、富士川信用購買販賣組合監事、理事、同副組合長として地方自治の發展ならびに、一般産業界の振興に寄與せしところ多し。

氏はまた社會公共の念に厚く、富士川小學校の電話、ラヂオ設置費として金壹千圓、富士川町各種團體へ金壹千圓、軍人後援會へ金五千圓を寄附せしが、昭和十四年七月富士川町教育振興費として金壹萬圓寄附せし廉に依り、同十五年五月十三日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

醬油酢醸造販賣業

紺綬褒章受賞者

故　西尾正七氏

文久二年八月二十一日生

兵庫縣川邊郡東谷村下財字西之町三六

略歷

北攝一帶の地は北に重疊たる山陵を負ひ、南は近く茅海に臨み、氣候溫和にして地味豐かに、而も大阪、神戸の兩大都市を指顧の間に控えて、産業大に揚り、交通の便亦開け、古來芳醇なる銘酒の産地として聞へ、又良質の醬油を産するを以て名あり。此地に醬油釀造業を營み、其品質の優良と、販路の廣汎なるとによりて盛名を江湖に馳せ、同地方第一の素封家として推さるゝもの、之を西尾家と爲す。

西尾家は慶應年間正兵衛の代に創まる。遠祖は往昔多田滿仲公の家人にして、禰宜町と稱して七人衆の一人なりき。然るに星霜遷りて、茫々玆に一千年、德川時代に入り、數世の前、千代松の代に至りて破産す。恁くて三四代前、本家より分家して酒造業を營み後更に分家に分家して新に西尾家を樹つ。正七氏は文久二年八月二十一日を以て、攝津國池田に生る。資性溫厚篤實商機に敏にして經營の才あり。即ち獨立醬油醸造業を創始し、苦心經營製品の優良と價格の低廉を期し、山正醬油の名を冠して、之を市場に提供するや、甚く世上の賞讃を博し、忽にして其名斯界に顯はる。爾來業運大に展け、遂に今日の巨富を積むに至る。曩に北攝銀行並北攝信託の取締役に擧げられ、同地方の金融界に重きを爲し、又猪名川水力取締役として敏腕を揮ひ、業界に盡す所頗る大なりき。

公共、公同の念頗る厚く、昭和八年二月兵庫縣川邊郡東谷尋常高等小學校舍改築費として、金壹萬圓を寄附したる廉により、其功を錄せられ、同九年二月十二日勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の光榮を揚へり。其他各種の社會事業に盡して、私財を投じたること一再に止まらざりき。

昭和十二年病を以て遽忌として逝く。氏に明治二十年出生の長子忠義ありしも、昭和四年病歿せるを以て、令孫に當る忠義の子忠正家督を相續し、正七を襲名す。現代正七氏亦慧敏頴悟にして、而も溫厚篤實なる資性を享け、德望祖父の名を辱めざるものあり。現時東谷村青年團長に推されて、地方青年身心の向上發展に努力し、又川邊郡聯合青年團理事、甘露寺信徒總代等を勤め、令名嘖々たり。

前中林綿布株式會社取締役社長　綿布商

紺綬褒章受賞者

故　中林孫次郎氏

明治十九年二月十四日生
大阪府泉南郡熊取村大字紺屋

○昭和六年十一月廿六日

昭和四年十二月大阪府泉南郡熊取尋常高等小學校へ建物一棟並備品寄附す。依て大正七年九月十九日勅定の紺綬褒章を賜ひ以て之を表彰せらる

略歷

關西綿業界の偉材中林孫次郎氏は、大阪府の人先代孫次郎氏の長男にして明治十九年二月十四日を以て大阪府泉南郡熊取村大字紺屋に生れ幼名直茂と稱す。大正五年家督を相續し幼名を改め孫次郎を襲名し父君の遺業を繼承す。俊敏才學に秀でし氏は益々精勵努力し業務の發展に從ひ、大正十年四月織を變更し株式會社とし、自ら其の社長となる。同氏養嗣子正夫氏（京都帝國大學卒業）をして專務取締役とし、產業報國に努力し家運頗る隆盛を極む。

夙に公共の念に厚く昭和四年十二月大阪府泉南郡熊取尋常高等小學校へ建物一棟並備品を寄附せし廉により昭和六年十一月廿六日に勅定の紺綬褒章を下賜せらる。又昭和十四年十一月大阪地方海軍人事部へ艦上戰鬪機「中林號」の製作費として金六萬五千圓を獻金し、陸軍省へ「中林號」製作費として金七萬五千圓也を獻金せし外、同年熊取村教育資金とし金壹萬圓を寄附する等社會公共の爲努力せしところ多し。

中林綿布株式會社專務取締役

紺綬褒章受賞者

中林正夫氏

明治四十二年六月三日生
大阪府泉南郡熊取村大字紺屋

略歷

關西綿業界の偉材として、多年業界に雄名を謳はれたる中林孫次郎氏の養嗣子となり、養父に劣らざる有爲の材を以て父業を授け、其才腕識量を謳はれつゝあるもの、之を中林正夫氏と爲す。

抑々中林家は、大阪府下泉南郡に於ける屈指の舊家にして

中林正夫

中林證券株式會社取締役

紺綬褒章受賞者

中林正夫氏

明治四十二年六月三日生
大阪府泉南郡熊取村大字朝代

略歴

關西證券界の偉材として、多年證券界に雄名を馳はれたる中林弥太郎氏の實嗣子となり、實父に劣らざる有爲の材を以て父業を繼げ、其才腕識覚を謳はれつゝあるもの、之を中林正夫氏と爲す。

初め中林家は、大阪府下泉南郡に於ける舊指の豪家にして世々地主を營む。實父弥太郎は實性豪放闊悟にして才學に秀で、夙に家業たる地主を繼承して、業務の發展に專念し、其間區會議員を見るに至りて組織を變更、株式會社として自ら其社長の任に就く。其間商業の發達改善に努むる所甚だ多く、又公共公開の念に厚くして、昭和四年十二月、大阪府泉南郡熊取小學校へ建物一棟並備品を寄附したる處に依り、昭和六年十一月二十六日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其後行を表彰せらる。氏は之に感激し、實家益々發展の發展に盡瘁すると共に公益事業に力を致しつゝありしが、昭和十六年三月一日、病を以て長逝せり。併しながら氏が證券界に盡したる功績は永久に滅せざるものありと言ふべし。正夫氏は、大阪府中河内郡加美村牧作奥田富太郎氏の三男として、明治四十二年六月三日を以て生れ、京都帝國大學經濟科を卒業したる秀才にして、昭和九年一月先代の實妻子となりて父業を繼げ、當時中林證券株式會社專務取締役として、天賦の才腕を揮ひ、當に隆業發展を企として、實界の振興に努力し、以て今日の隆昌を見るに至れり。

氏亦公共公開の念に厚くして、國家奉公の志先代に勝らず。昭和十四年十一月、恩賜財團軍人援護會大阪支部事業資金として、金一萬圓を寄附したる處に依り其功を賞せられ、昭和十五年九月九日、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。其他各種の社會事業等に寄資して、之に私財を投じ、又神社佛閣に浮財を寄進したること枚擧に遑あらず。

實家の系統は眞宗にして、氏は各種の運動競技及音樂に多大の興味を有す。家庭には妻妹衆リ三刀自の外、一男二女あり。夫人は義に篤く、父子二代に亘りて、公共に奉ずること斯の如く厚きは、蓋し鮮し。實家が衆人の間に信望ある、洵に所以ありといふべし。

詞に努力し家運隆る隆盛を極む。

夙に公共の企に厚く昭和四年十二月大阪府泉南郡熊取等常高等小學校へ建物一棟並備品を寄附せし處により昭和六年十一月廿六日に勅定の紺綬褒章を下賜せらる。又昭和十四年十一月大阪地方海軍人事部へ艦上戰闘機「中林號」の製作費として金六萬五千圓を獻金し、陸軍省へ「中林號」製作費として金七萬五千圓也を獻金せし外、同年熊取村教育資金として金壹萬圓を寄附する等社會公共の爲努力せしところ多し。

西村直

品川白煉瓦株式會社取締役、日本皮革株式會社監査役

紺綬褒章受賞者

從七位　西村直氏

明治二十二年十一月一日生
東京市麻布區笄町一七六

略歴

氏は東京の府の人、西村勝三氏の長男にして、明治四十一年家督を相續。先考勝三氏はわが國における製革製靴の鼻祖にして、初めて軍隊に供給する軍用靴ならびに軍用皮革の製造に從事し、また兵士用莫大小製造及び軍服裁縫をも企ね、國家に貢獻せしところ尠からざりき。氏は佐倉の藩士西村兵右衛門氏の三男にして、夙に醫業として聞るもの尠かりし皮革業を、國家に奉ずるの赤心より、自ら進んで揮んで家業となせし逸材にして、家業の傍ら機組を創立し、耐火煉瓦の製造に從ひ、品川白煉瓦製造株式會社の基礎を確立せり。明治四十一年竝く、氏は生前皮革業界に貢献せしところ尠からざりし廉により、明治三十三年一月二十五日勅定の紺綬褒章を賜はの光榮に浴せり。

當主直氏は夙に慶應義塾普通部を經て東京高等工業學校應用化學科に學び、明治四十二年優秀なる成績を以て卒業するや、父君經營にかかる日本皮革株式會社に入りて現業を習得せしが、同社に在ること四ケ月にして一年志願兵として野砲兵第一聯隊に入隊、翌年砲兵少尉に任ぜられ除隊後、東京瓦斯株式會社大島精製所に入りて瓦斯の副生産物研究に從ひ、大いに得るところありたり。

のち先考の創業たる耐火煉瓦製造業が工業の發展に伴ひ、關る有望なるべきを洞察し、專念これが經營にあたらんとせしが、當時斯業は未だ幼稚の域を脱せず、先進各國を觀察して其の長を學ぶの必要あるを痛感し、大正二年十一月横濱出帆の便船によりて外遊の途に上る。

ドイツ、イギリス、オーストラリヤ、イタリー、スイス、スエーデン、ノールウエーの各國を遍歴し、著名なる窯業及び化學工業の諸工場を具さに觀察し、歸途ロシヤを經由して同三年十月歸朝、爾來西村同族、品川白煉瓦、西村工業各社の社長に就任、更に化學工業關係各社の經營に參畫し、現に關與の重任にあり。

大正八年滿生會事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十一月十一日勅定の紺綬褒章を賜はの光榮に浴す。

日本工機株式會社監査役、日本フェルト工機株式會社取締役會長、株式會社中島商店取締役會長、毛織物卸商

紺綬褒章受賞者

從七等　中嶋弘氏

明治二年八月二十七日生
大阪市東區安土町四ノ一五

略歴

○昭和十四年十一月大阪市社會事業施設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十五年九月二十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらる。

日本工業株式會社監査役、日本フェルト工業株式會社取締役會長、株式會社中嶋商店取締役會長、毛織物卸商

紺綬褒章受賞者

勳七等　中嶋　弘氏

明治二年八月二十七日生
大阪市東區安土町四ノ一五

略歴

○昭和十四年十一月大阪市社會事業施設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十五年九月二十一日勅定の紺綬褒章を賜ひ其の善行を表彰せらる。

○昭和十四年十一月恩賜財團濟生會大阪支部資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十五年十一月四日勅定の紺綬褒章飾版一箇を賜ひ其の善行を表彰せらる。

氏は京都府與謝郡宮津町に生る。宮津藩士中嶋直衛氏の二男たり。明治十六年七月齡僅かに十四歳にして、實業を以て身を立てんと志し大阪市に出づ。同市東區伏見町小西喜兵衛氏方に店員として忠勤を勵むこと十餘年、同二十七年主家の廢業に際會し、獨立して伏見町四丁目に唐物商を創む、獨立創業の意氣に燃え業礎漸く其の緒に着くや、日清の役勃發し召されて臺灣守備の任に就く。歸還後同二十九年再び營業を開始せしが、時勢の推移を洞察するに敏なる氏は、毛織物の輸入品に重點を置き、業容の一新を企圖し、孜々營々經營に專念せしため、當初微々たりし營業も漸次發展し、愈よ本格的活動に入らんとせし際、日露開戰となり再び召されて第三軍鴨綠江軍後備第五十三聯隊に編入さる。至誠溢ふるる熱情の氏は韓國駐劄軍指揮下にあつて轉戰、赫々たる武勳を樹てて凱旋し、戰火の眞只中にあつて鍛錬したる積極進取の原動力を驅つて、一意專神業務の發展に精勵せしため、業容忽ちにして伸長し、業界また氏を認識し、信望の度を深めたり。

氏の滅私的職域奉公の功績は枚擧に遑あらざるも、特に大正三年業界に卒先して國產毛織物の普及擴張に着目し、低廉なる價格を以て國產毛織物を販賣、國產愛用の精神を昂揚せしめたるほか、多大の犧牲を拂つて婦人服、子供服の服地製織並にこれが普及に勉め、わが國服裝文化の上に一大進展を齎らしたる先驅者的功績は、永く氏の名を服飾史上にとどめしめるに足るものなり。

氏の社會公共事業に投じたる淨財は巨額に上り其の範圍極めて廣汎にわたり篤行行賞多數に及ぶ。鄕里宮津町に私財二萬一千圓を投じて設立したる中嶋慈惠團も其の一端にして、氏の愛鄕心を物語る好個の記念施設たり。

斯株式會社大島精製所に入りて瓦斯の副生產物研究に從ひ、大いに得るところありたり。

のち先考の創業たる耐火煉瓦製造業が工業の發展に伴ひ、頗る有望なるべきを洞察し、專念これが經營にあたらんとせしが、當時斯業は未だ幼稚の域を脫せず、先進各國を視察して其の長を學ぶの必要あるを痛感し、大正二年十一月橫濱出帆の便船によりて外遊の途に上る。

ドイツ、イギリス、オーストラリヤ、イタリー、スイス、スエーデン、ノールウエーの各國を巡歷し、著名なる窯業及び化學工業の諸工場を具さに視察し、歸途ロシヤを經由して同三年十月歸朝、爾來西村同族、品川白煉瓦、西村工業各社の社長に歷任、更に化學工業關係各社の樞機に參畫し、現に顯書の重任にあり。

大正八年濟生會事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十一月十一日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

仁田大八郎

伊豆銀行、伊豆相互貯蓄銀行、株式會社堺屋本店、各取締役、元衆議院議員、農業

綠綬褒章受賞者

從六位勳四等　**仁田大八郎氏**

明治四年十月生
靜岡縣田方郡函南村

略歷

氏は伊豆仁田村の人仁田常種氏の長男。靜岡縣田方郡函南村に生る。父君常種氏は幼名瀧次郎、長じて大八郎と改め更に隱退して常種と稱す。實に仁田四郎忠常三十五代の孫たり。仁田家は代々仁田村に住し農を業となし土地の名族たり。常種氏また父業を繼ぎて農に從ひしも、夙に殖產興業の志あり明治六年伊豆生產會社を創立し自ら頭取となり寒天の製造に製茶事業に先覺者的努力を投じ、更に養蠶業を指導開拓する等同地方產業發展の基礎を確立したるのみならず、常に自治進展の指導者として多大の功績あり、明治十六年九月早くも勅定の藍綬褒章を賜ふの光榮に浴す。其の文に曰く

平生心を公益に注ぎ夙に生產會社を創立し寒天製造栽茶養蠶の業を起し、或は製絲畜魚牧羊諸場の開設を助け、力を修路興學濟貧に致し、私財を拋つ少からず、かつて久しく里正の務を執り、俸給を捐て以て居村の準備金に供する等公衆の利益を興し成績著明なりとす。

當時藍綬褒章を賜ふの光榮に浴したるものは、靜岡縣下に於ては氏唯一人なりき。以て氏の偉大なる足跡を窺ふに足るべく、氏が官賞を受くること實に前後十三回に及べりといふ

當主大八郎氏前名甲子郎、父君隱退後家督を相續父君の前名大八郎を襲名す。氏また父業を伸ぶるに精勵怠りなく、專ら父君の遺志を繼ぎて殖產興業に盡粹し、產馬會社を創立しては馬匹の品種改良を圖り、更に豚牛の飼養を奬勵して農家を富裕ならしめ、或ひは養蠶業を勸誘しては優良桑苗を移植せしめ魚種の移養家禽の改良につきても劃期的成果を齎らし或は又蠶繭、產茶の品評會、牛馬の鑵市場を開設して斯業の進展に資するなど其の功績父君に勝るとも劣らざるものあり明治二十六年二月六日勅定の綠綬褒章を賜ふの光榮に浴し、家門をして彌々榮光あらしめたり。

氏嘗て衆議院議員たりしが今や伊豆銀行、伊豆相互貯蓄銀行、株式會社堺屋本店重役として餘生を奉じて職域奉公に全からんことを期し矍鑠として活躍しつつあり。

大阪商工會議所議員、住吉毛糸、中川商店各株式會社々長、大阪メリヤスタオル同業組合長、大阪メリヤス製品同盟會幹事長

綠綬褒章受賞者

中川伊作氏

明治八年十一月生
大阪市東區南本町四丁目

略歷

眇たる一介の行商人より身を起し、努力奮鬪、多年の勞苦酬ひられて、遂に華城屈指の莫大小商として大を成すに至り

當時藍綬褒章を賜ふの光榮に浴したるものは、靜岡縣下に於ては氏唯一人なりき。以て氏の偉大なる足跡を窺ふに足るべく、氏が官賞を受くること實に前後十三回に及べりといふ

當主大八郎氏前名甲子郎、父君隱退後家督を相續父君の前名大八郎を襲名す。氏また父業を伸ぶるに精勵怠りなく、專ら父君の遺志を繼ぎて殖産興業に盡粹し、産馬會社を創立しては馬匹の品種改良を圖り、更に豚牛の飼養を奬勵して農家を富裕ならしめ、或ひは養蠶業を勸誘しては優良桑苗を移植せしめ魚種の移養家禽の改良につきても劃期的成果を齎らし或は又蠶繭、産茶の品評會、牛馬の鰹市場を開設して斯業の進展に資するなど其の功績父君に勝るとも劣らざるものあり明治二十六年二月六日勅定の綠綬褒章を賜ふの光榮に浴し、家門をして彌々榮光あらしめたり。

氏嘗て衆議院議員たりしが今や伊豆銀行、伊豆相互貯蓄銀行、株式會社堺屋本店重役として餘生を奉じて職域奉公に全からんことを期し髮鑠として活躍しつつあり。

大阪商工會議所議員、住吉毛糸、中川商店各株式會社々長、大阪メリヤスタオル同業組合長、大阪メリヤス製品同盟會幹事長

紺綬褒章受賞者

中川伊作氏

明治八年十一月生
大阪市東區南本町四丁目

略歷

眇たる一介の行商人より身を起し、努力奮鬪、多年の勞苦酬ひられて、遂に華城屈指の莫大小商として大を成すに至りたる中川伊作氏の如き、洵に立志傳の一頁を飾るに足るべき當代稀に觀る人材たり。

氏は兵庫縣人中川孫兵衛の長男にして、明治八年十一月を以て同縣多可郡杉原谷村に呱々の聲を揚げ、同四十一年八代目の家督を相續す。天資慧敏頴悟にして性頗る堅忍、夙に傾ける家運の挽回を期し、年少僅に十五歲の頃より早くも家業たる凍蒟蒻の行商に從事し、更に十八歲の時、丹波方面の雜貨卸業者の許に見習として入店し、刻苦精勵、業務に熟するや、二十歲の夏初めて獨立し但馬、丹波方面一帶に亘り雜貨の行商に從ひ、其間具さに世路の辛酸を嘗む。恁くて二十四歲の時大阪に出で、明治三十二年一月、年二十五歲にして、東區南久寶寺町一丁目に、さゝやかなる店舗を開き雜貨を取扱ひ、傍ら莫大小タオルの卸業を開始す。是今日の大を成すに至る第一歩たり。恁くて其業務の發展するに及び、同三十五年其店舗を現今の南本町四丁目に移轉し、豫て意圖せる自家製品の直接卸業を營み、且つ現金取引制を斷行し、一切値引無しの新經營法に則り、株式會社蜂莫大小久居工場を起すなど、製造販賣の兩方面に活躍し、漸次業運を開拓して、遂に業界に重きを爲すに至れり。現時中川商店、住吉毛絲各株式會社々長、蜂工業、メリヤス研究所、各株式會社取締役、蜂メリヤス久居工場長たる外、大阪メリヤスタオル同業組合長、大阪市メリヤス製品同盟會幹事長、同メリヤス卸商組合監事、大阪メリヤス商工新聞社長として活躍し、又大阪商工會議所議員、大阪市商工協會評議員、大阪市內地工業組合理事等に擧げられ、一方大阪市聯合青年團參與、大阪市實業俱樂部理事、大阪市體育協會評議員、中川青年團長、私立中川青年學校長其他各公職に擧げられ公事に盡瘁しつゝあり。

昭和十四年二月兵庫縣多可郡杉原谷尋常高等小學校改築費として金壹萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年八月一日勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

川口商工會議所議員、川口校友會理事、埼玉縣川口市元郷町二ノ二五一八

川口第三尋常高等小學校同窓會副會長、川口產業組合監事、

川口鑄物同業組合副組長、川口產業組合副理事

褒賞者

富岡顯治氏

明治二十九年十二月二十四日生

略歴

氏は埼玉縣人、埼玉縣川口市金山町三丁目に生る。氏が鉄鋳物製造業界に今日の大を成せる決して長年月を經たるにあらず赤手空拳より身を起して、しかも今日の盛名を得るの速やかなりしは、同業界において異例となすに足る。以て氏の非凡の逸材たることを窺ふを得べし。然りと雖も一業の業礎を確立するは、到底容易の業にあらざるなり。氏も亦幾多の辛酸を經て、漸く今日あるを得たるものにして、功を成すの比較的速やかなりしを以て同業界の異例とさるゝは、同業に從ひて名を立つるの如何に至難なるかを物語るものなり。氏は大正六年近衛歩兵第三聯隊に入隊し、軍事訓練のもと心身を鍛錬するに餘念なく、氏の百折不撓の精神は、二ケ年に上る軍隊生活の中にありて陶冶されたるものと謂ふべく、業に從ひて精勵倦むところを知らず、しかも進取氣鋭の意氣を以て、家業の進展に邁進してやまざる態度は、軍人精神の發露に外ならず。氏の今日あるを得たるは軍隊生活の體驗に負ふところまた尠からず。

昭和八年鋳鉄休業問題となるや、夙かに期するところあり、翌九年二月一工場の經營を受け、これを繼承して機械用銑鉄鋳物の製造に從ふ。實に氏が斯業への發足の第一歩たり。今や氏は非常時局下の重要産業部門を擔當し、生産額の七割は軍需向製品をもつて占むるの盛觀を呈す。しかも現に川口商工會議所議員、川口校友會理事、川口鋳物同業組合副組長、川口產業組合監事、川口第三尋常高等小學校同窓會副會長、川口產業組合理事たるほか、川口鋳物同業組合の創設に參與すること三回に及び、斯業の伸展に裨益せしところ偉めて多し。

氏はまた夙に社會公共に盡すの念厚く、昭和十四年川口市芝川架設門橋橋架修繕として金壹千圓、帝國在郷軍人會川口市分會へ金五百圓、川口實業指導所及び川口工業學校施設擴充費として金壹萬圓、同市第五青年學校へ金壹千圓を寄附せしが就中前記川口實業指導所へ寄附せし點に依り、同十五年三月一日勅定の紳設實業を賜ひ、其の善行を褒彰せらるるの光榮に浴す。

日本鉄興株式會社取締役社長、國際興業株式會社取締役、
帝國鉄道協會會員、貴族院議員、山林地

褒賞者

延賀喜三兵衛氏

明治二十年十一月生

兵庫縣揖保郡平岡村平岡六五七

略歴

父祖三代に亘りて醤油醸造業を營み、全國に廣汎なる販路

日本丸天醬油株式會社々長、龍野醬油工業組合理事、
醬油釀造販賣業、農業、山林業

紺綬褒章受賞者

延賀喜三兵衛氏

明治二十年十一月生
兵庫縣揖保郡半田村半田六五七

略歷

父祖三代に亘りて醬油釀造業を營み、全國に廣汎なる販路を布き、業界一方の覇者として、全國に其盛名を謳はれつゝある延賀家は、當主の祖父、先々代茂兵衛現地に在りて、農業の傍ら醬油釀造を營み先代喜三兵衛之を嗣ぐや、業績愈々擧り、丸大印の商標市場を風靡し、釀造高一萬七八千石を算せり。明治四十年八月、一族を以て資本金五十萬圓の日本丸天醬油株式會社を創立し社長となり、其間山林を買收して之を經營し、又岩見銀行頭取として金融界に盡したる外、多年郡會議員に選ばれ、地方政界に多大の貢獻を致しつゝありしが、大正十三年七十六歳を以て逝く。

現代喜三兵衛氏は、明治二十年十一月を以て生れ、河内より當家に入りて其養子となり、龍野中學を卒業、先代長逝の後を受けて家督を相續し以て今日に及べり。曩に大正十五年十一月自ら社長にして、先代が顧問たりし資本金二十五萬圓の龍野物產株式會社を買收して、日本丸天醬油に合併し、現時其社長たる外、龍野醬油工業組合理事として業界に重きを爲せり。當社製品の販路は、淡口は京阪神地方に、濃口は北海道、朝鮮、滿洲に及び、特に京都市及同地方一帶に於ける丸天醬油の聲價は特筆に値するものあり。

今上陛下御大典に際しては、當家釀造に係る製品御買上の榮に浴したる外、先代時代の明治二十七年全國醬油共進會へ出品以來、第四回內國勸業博覽會、戰勝記念博覽會、大正七年日本釀造協會近畿支部酒類品評會に於て有功章、優等章、優等賞、金牌等を贈られ、其他此種品評會博覽會等より、賞狀及賞牌を受けたること數百回に及べり。以て如何に其製品の優秀なるかを推知するに足るべし。

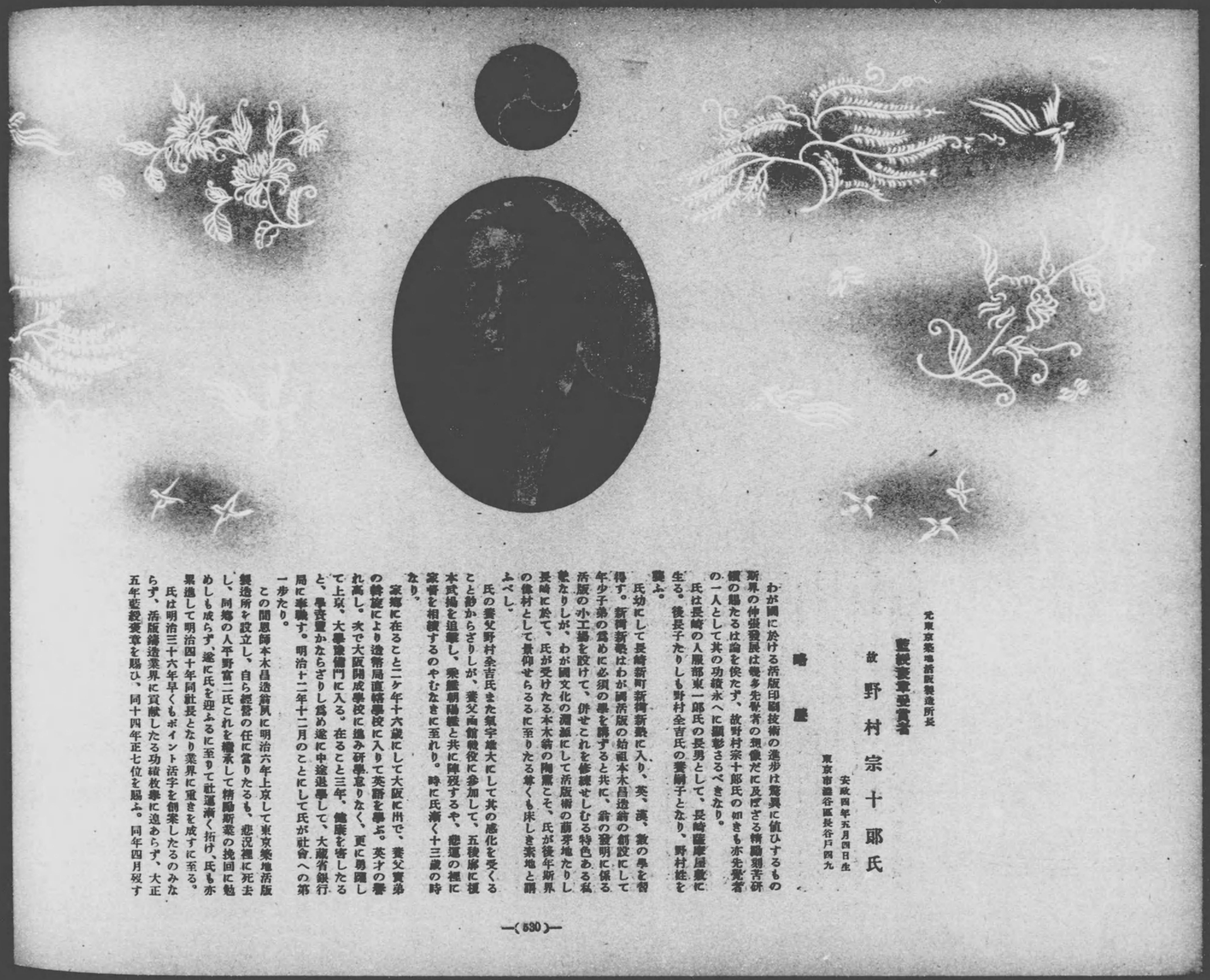
公共公同の念に厚く、昭和八年、居村半田村尋常高等小學校本館及教室建築費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り同九年八月六日、勅定の紺綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔ひたる外、其後更に同校講堂建築費を寄附し、其他各種の社會事業等に私財を致したること枚擧に遑あらず。

資性溫厚篤實、趣味頗る高雅にして、謠曲、書畫、骨董に造詣深く、特に南畫を能くす。

[illegible]に外ならず。氏の今日あるを得たるは軍隊生活の體驗に負ふところまた尠からず。

昭和八年歸休除隊となるや、秘かに期するところあり、翌九年二月一工場の讓渡を受け、これを經承して機械用鉄鐵鑄物の製造に從ふ。實に氏が斯業への發足の第一歩たり。今や氏は非常時局下の重要產部門を擔當し、生產額の七割は軍需向製品をもつて占むるの盛觀を呈す。しかも現に川口商工會議所議員、川口技能者養成施設組合監事、川口第三榮養食共同配給組合副組長、川口產業組合理事たるほか、川口鑄物同業組合の樞機に參與すること三回に及び、斯業の伸展に裨益せしところ極めて多し。

氏はまた夙に社會公共に報ずるの念厚く、昭和十四年川口市芝川架設門橋橋架替費として金壹千圓、帝國在鄉軍人會川口市分會へ金五百圓、川口重工業指導所及び川口工業學校施設擴充費として金壹萬圓、同市第五青年學校へ金壹千圓を寄附せしが就中前記川口重工業指導所へ寄附せし廉に依り、同十五年三月一日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰せらるるの光榮に浴す。



元東京築地活版製造所長

藍綬褒章受賞者

故 野村宗十郎氏

安政四年五月四日生
東京市澁谷區長谷戸四九

略歴

わが國に於ける活版印刷技術の進歩は驚異に値ひするもの斯界の伸張發展は幾多先覺者の想像だに及ばざる精勵刻苦研鑽の賜たるは論を俟たず、故野村宗十郎氏の如きも亦先覺者の一人として其の功績永へに顯彰さるべきなり。

氏は長崎の人服部東一郎氏の長男として、長崎薩摩屋敷に生る。後長子たりしも野村全吉氏の養嗣子となり、野村姓を襲ふ。

氏幼にして長崎新町新街新塾に入り、英、漢、數の學を習得す。新街新塾はわが國活版の始祖本木昌造翁の創設にして年少子弟の爲めに必須の學を講ずると共に、翁の發明に係る活版の小工場を設けて、併せこれを修練せしむる特色ある私塾なりしが、わが國文化の淵源にして活版術の萠芽地たりし長崎に於て、氏が受けたる本木翁の陶鑄こそ、氏が後年斯界の偉材として景仰せらるるに至りたる尊くも床しき素地と謂ふべし。

氏の養父野村全吉氏また氣宇雄大にして其の感化を受くること尠からざりしが、養父函館戰役に參加して、五稜廓に榎本武揚を追擊し、乘艦朝陽艦と共に陣歿するや、悲運の裡に家督を相續するのやむなきに至れり。時に氏漸く十三歳の時なり。

家郷に在ること二ケ年十六歳にして大阪に出で、養父實弟の斡旋により造幣局直轄學校に入りて英語を學ぶ。英才の譽れ高し。次で大阪開成學校に進み研學怠りなく、更に勇躍して上京、大學豫備門に入る。在ること三年、健康を害したると、學資豐かならざりし爲め遂に中途退學して、大藏省銀行局に奉職す。明治十二年十二月のことにして氏が社會への第一歩たり。

この間恩師本木昌造翁夙に明治六年上京して東京築地活版製造所を設立し、自ら經營の任に當りたるも、悲況裡に死去し、同郷の人平野富二氏これを繼承して精勵斯業の挽回に勉めしも成らず、遂に氏を迎ふるに至りて社運漸く拓け、氏も亦累進して明治四十年同社長となり業界に重きを成すに至る。

氏は明治三十六年早くもポイント活字を創案したるのみならず、活版鑄造業界に貢献したる功績枚擧に遑あらず、大正五年藍綬褒章を賜ひ、同十四年正七位を賜ふ。同年四月歿す

美術商

藍綬褒章受賞者

西川大六氏

明治十年七月八日生
住所 長野縣下水内郡飯山町
營業所 東京市本郷區湯島三組町八一

略歴

氏は長野縣人西川宗家氏の三男、長野縣下水内郡飯山町に生る。のち分家して一家を起す。明治四十五年東京市に一家を構へて別居す。

美術商

紺綬褒章受賞者

西川大六氏

明治十年七月八日生

住所　長野縣下水内郡飯山町

營業所　東京市本郷區湯島三組町八一

略歴

氏は長野縣人西川宗家氏の三男、長野縣下水内郡飯山町に生る。のち分家して一家を起す。明治四十五年東京市に一家を構へて別居す。

西川家は飯山町における舊家にして代々近隣町村の景仰の的たりしが、大六氏に至りて其の聲望愈よ高し。氏は幼にして俊敏、夙に向學の志厚かりしが、初等教育を終るや上級の學校に入るを斷念し、只管家庭にありて獨學に勵む。特に美術、藝術に關する書を渉獵してその蘊奥を極むることに勉めたりしが、長ずるに及んで飯山町々會議員たり、町政の發展に寄與せしところ尠からず、就中教育施設の擴充に盡瘁せし功績極めて顯著なるものあり、大正十三年一月長野縣立飯山高等女學校建設の議成るや、自ら卒先して同校敷地買收費として金壹萬圓を寄附事業の達成に資するところあり、其の美擧は酬ひられ昭和三年五月十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

由來長野縣は文化縣として知られ、其の教育機關の完備せるはもとより、一般縣人の智德の程度も他縣に比して極めて高し。蓋し古來より奬學の風盛んなりしに因るものなるは論を俟たざるも、また研學を積み智德を涵養するに、强ち學校をもとむるのみを以てせず、獨學克く智德を養ふの途あるを實踐躬行して垂範の實を示したる人材多きに因るものと謂ふべし。

學を以て功利を目的となし、名を成さんことに專らなるは眞の學にあらざるべし。身を養ひ身を磨くをもつて唯一の悅樂となし、自ら智德ならび備はるによりて、德望厚きを加ふることこそ眞の學たるの途なるべし。氏のごときも典型的にして模範的なる信州人の逸材、孜々營々家業を督するに怠りなく、しかも身を公共に奉じて報國の至誠を披瀝する傍ら、淬礪よく學を究めて德を積む。啻に信州人にとりて好個の先進たるのみならず、また衆庶が以て龜鑑となすに足る人材なり。今や好むところの道によりて美術商をもつて業となし東京にありて斯業に精勵するを餘生の悅樂とせり。もとより凡俗の美術商たらず、わが國文化の向上に貢獻せんことを期して餘念なし。

家鄕に在ること二ヶ年十六歳にして大阪に出で、養父實弟の斡旋により造幣局直轄學校に入りて英語を學ぶ。英才の譽れ高し。次で大阪開成學校に進み研學怠りなく、更に勇躍して上京、大學豫備門に入る。在ること三年、健康を害したると、學資豐かならざりし爲め遂に中途退學して、大藏省銀行局に奉職す。明治十二年十二月のことにして氏が社會への第一歩たり。

この間恩師本木昌造翁夙に明治六年上京して東京築地活版製造所を設立し、自ら經營の任に當りたるも、悲況裡に死去し、同鄕の人平野富二氏これを繼承して精勵斯業の挽回に勉めしも成らず、遂に氏を迎ふるに至りて社運漸く拓け、氏も亦累進して明治四十年同社長となり業界に重きを成すに至る。

氏は明治三十六年早くもポイント活字を創案したるのみならず、活版鑄造業界に貢献したる功績枚擧に遑あらず、大正五年藍綬褒章を賜ひ、同十四年正七位を賜ふ。同年四月歿す

阿吽阿数々主

紺綬褒章受賞者

第六拾 富岡俊次郎氏

文久二年八月三日生
東京市芝區伊皿子町二六

略歴

人其の地位に安んじ、自らを律するに清く、他を愛するに厚く、身を天地に奉じて同胞の安泰、人類の幸福を祈念するに專らなるを得るは難し。

日本精神と謂ひ、皇國精神と謂ひ大政翼賛と謂ふも其の理念の根本をなすものは、己を捨てて他に奉ずる精神に在りと謂ふを得べし。

自らを律するに反省なく、他を顧みるに寒公の至誠なく、軽佻浮薄我執の動くまゝなる生活に淫したる者、今や新體制の厳律に観討され、頓みに周章狼狽して安きを得ざるが如し。斯くの如きは洵に慨歎に堪へざる現象にして、時局認識の稽遅なるこれより甚しきはなし。

時局の緊迫化に伴ひて國家的必要が、個人的生活に浸潤するは當然にして、これを甘受し國家をして益々大ならしむるに努力することこそ、個人生活を豊かならしむる所以にして、奉仕情操の緊要なること今日より甚しきはなし。

奉仕情操の根幹は、己を捨つるにあり。自らを捨てて公に奉ずるの志あらば、自ら安くまた愉しかるべし。

わが富岡俊次郎氏の如きは、洵に久しきにわたり滅私奉公を實踐し、垂範の實を示して啓蒙指導の使命を達成したる篤志の士にして奉仕情操の涵養に裨益したるところ又尠からず

氏は兵庫縣の人。夙に實業界に雄飛して斯界に重きを成せしが、六十餘歳にして阿吽阿を自覺大悟し、遂に實業界を捨てて阿吽阿教を創立す。時に昭和四年のことなり。

爾来斯教に依りて同胞人類の福祉に貢献せんことを期し老驅を馳せ同志を誘導して斯教の普及に精進し、阿吽阿の無限愛に感激して幸福なる體驗本證の生活を營む。蓋し現代稀有の精神家なり。

氏に高齢七十五歳の今閨、令息夫妻、四人の愛孫あり、一家團欒和氣藹々、未だ曾て病者を出せしことなく、氏分家獨立以来五十有餘年間、一家の衆に服したることなしといふ。

昭和十三年三月恩賜財團慶福會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、同十四年十二月十八日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

千葉倉組合名會社代表

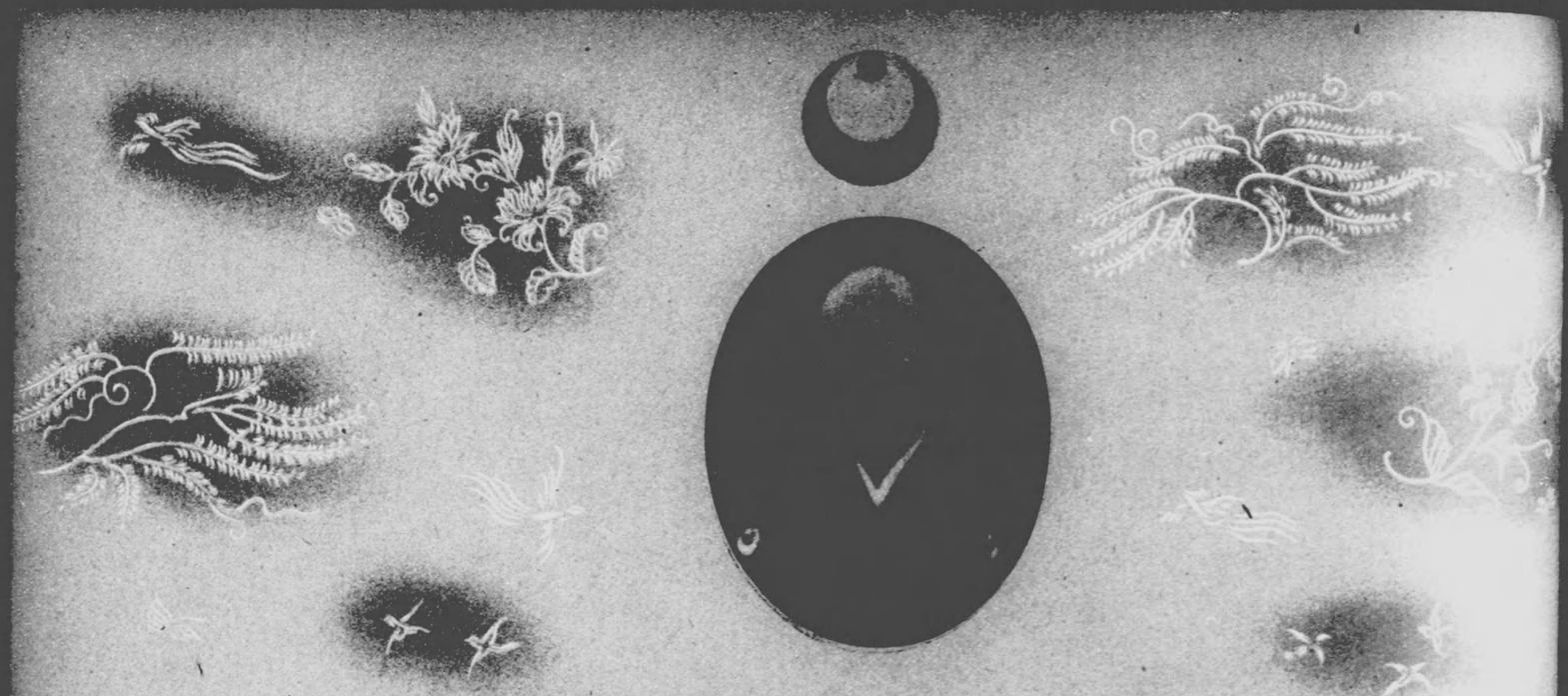
紺綬褒章受賞者

千葉利之助氏

明治十五年十二月廿四日生
阿波國那賀郡富田村中組

略歴

多年由緒ある歴史を誇る酒家が、明治維新後時世の急激なる變遷に遭ひて、家運の傾きたる時に生れ、年少にして既に乳ある家業の繁榮を計めたるも顧することなく、決然起つて



千葉倉庫合名會社代表
藍綬褒章受賞者

千葉利之助氏

明治十三年十二月廿四日生
實島縣海田市町中組

略歷

多年由緒ある歷史と誇る商家が、明治維新後時世の急激なる變遷に遭ひて、家道の傾きたる時に生れ、年少にして既に凡ゆる世路の辛酸を嘗めたるも屈すること無く、決然起つて家運の挽回を圖り、遂に今日の成功を見たるのみならず鄕土の爲に大なる貢獻を爲しつゝあるもの、之を千葉利之助氏と爲す。

實家は德川物語以來、三百五十年の間、道雄として傳統を繼ける由緒深き家柄にして、代々海田市町の年寄役を勤めたる名望家たりき。氏は明治十三年十二月二十四日先代肇之助の子として生る。資性敏實にして戰爲の氣に富み、家運の衰退を歎きて、少年時代より既に心に家道の挽回を期し、長ずるに及び、字品町に於て材木商を營み、勤敏力行を信條として抽實經營商大飛躍を伸張し、基礎の強固を加ふると共に、農業に重きを爲すに至り、昭和五年倉庫業を創め以て今日の大を成し、少年時代よりの宿望を達するを得たり。海田市に在る共感は、見るからに舊家たるを偲ばせ、庭園など古木名園に富み、遙ろに三百餘年來の實家の面目を語るに似たり。氏が今昔の感慨、洵に察するに餘りあり。最に海田市町が町政萬般して、自治の困難を觀ふるに至るや、町長として此難局を打開し得るもの、氏を措いて他に其人莫しとし、町民の懇請默し難く、大正七年町長に就任し、靈妙なる手腕を揮ひて整理に當る。其間氏の師子たる施設經營に對し種々批難を試みるものありしも、氏は頑として其所信を貫げず。遂に共困難なる整理事業を完成し、同町が今日の如き盛々たる町勢を呈するの基礎を築き、同九年功成りて退職せり。

公共の念に厚く、日本赤十字社、軍人援護會の事業に實踐して、共に有功章を贈られ、其他神社佛閣に淨財を寄進し、敎育を始め各種社會事業に資財を投ずること枚擧に遑あらず昭和十年七月海田市町公會堂竣成費として金六千五百圓並同敷地として、土地三畝十歩餘を寄附したる廉に依り、其功を賞せられ、同十一年五月十六日、勅定の緋綬褒章を下賜せらるゝの光榮を擔へり。

氏の如き洵に立志傳の一頁を飾るに足る人材にして、其篤行は以て衆民の龜鑑たるに足るべし。

望の士にして奉仕慘憺の涵養に裨益したるところ又尠からず

氏は兵庫縣の人。夙に實業界に雄飛して斯界に重きを成せしが、六十餘歳にして阿吽阿を自覺大悟し、遂に實業界を捨てて阿吽阿敎を創立す。時に昭和四年のことなり。

爾來斯敎に依りて同胞人類の福祉に貢獻せんことを期し老齡を顧みず同志を誘導して斯敎の普及に精進し、阿吽阿の無限愛に感激して幸福なる體驗奈謝の生活を營む。蓋し現代稀有の精神家なり。

氏に高齡七十五歳の今閒、令息夫妻、四人の愛孫あり、一家團欒和氣藹々、未だ曾て病者を出せしことなく、氏分家獨立以來五十有餘年間、一家の喪に服したることなしといふ。

昭和十三年三月恩賜財團慶福會へ金壹萬圓寄附せし廉に依り、同十四年十二月十八日勅定の緋綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

元東京手形交換所理事

勲一等 旭日大綬章 故 成瀬正恭氏

明治元年二月二十一日生
東京市大森区馬込町字平ノ原一〇

略歴

氏は香川県人成瀬猪七郎氏の三男、香川県本田郡井戸村に生る。明治十五年十五歳にして上京し慶應義塾に学び夏に同十九年米国に留学し、シカゴ市プライアント・テンド・ストラットン簿記学校に入る。翌年同校の一部課程を修了するやニューヨーク市コルネル大学法学部に入学、二十二年優秀なる成績を以て卒業を卒へ、独んで大学院にて法学の蘊奥を究むる青年学徒として敬々たる声価を得るや、志を抱いて帰朝し横浜正金銀行に入社、常文せる英門事の通訳を傍ら銀行に入り支配人の重職に就くや、銀行経営の才能を発揮して大いに信用を博ひ、三十一年招かれて第十五銀行副支配人となる。累進して取締役支配人の地位に就きしが、明治四十四年七月丁銀行頭取となり、爾来銀行業界の第一線に立ちて重きを成すに至れり。氏は卓抜せる銀行経営たるにとどまらず、貴族的風格にふさはしき文化人としても一家を成し、しかも自らを持するに慎みて能厳、温厚円人物を備へたるを以て、丁銀行頭取としてよりも、銀行者挙げて氏に協力これを扶けて再会を期せしめしかば、氏の所期の目的は悉ちにして達成せられ頭取就任後僅かて短時日にして資本金を三百万円に増資するに成功し、次で矢継早に五百万円に増額的増資をなす等、当時銀行業界にれたる大事業を完成せり。

氏が晩年に至るまで常議財界の重鎮として重視せられし所以は、其の銀行家としての卓見の依嘱を受けたるによることは勿論なるも、温厚篤実なる人格と円満なる識見に負ふところ多からず。氏が常に財界名士たるにとどまらず、わが国に於ける代表的人物として重視されたるは又故なきにあらざるなり。昭和十三年三月逝す。

氏が多生一貫して公共奉仕に志しこれを実践したる篤行は実に人後に一段の光輝あらしむるものにして、明治四十四年十月御生誕へ金壱万円御下賜の際に依り大正八年九月十九日勅定の帝都復興章を、更に大正十三年三月関東大震災救援費として金壱万円御寄附の際に依り、昭和四年二月十九日勅定の帝都震章飾版壹面を賜ふの光栄に浴す。

地主

緑綬褒章受賞者 故 竹田由松氏

安政三年八月八日生

大阪府下の一寒村に生れた人。父は竹田由荘と云ひ代々小作農にて、文字通り赤貧洗ふが如き家であつた。幼少の頃は兄親に従ふて農事に携つてゐたが、性来聡敏果断の氏には一寒村の小作農として甘んずることは出来なかつた。

依つて氏は単身大阪市に出て丁稚奉公をしたのであつた。当時は未だ徒奉時代の事であり、所謂「大阪商人」とすはる〻程、商略機智に富んでゐたが、奉公人の使用を誤り虐使に過る嫌、今日の青年を以てせむか如に奴隷にもにも均しいものがあつた。

併し氏はそれにも耐へた。生家に戻つて一生を小作農として

褒章

紺綬褒章受賞者

故　竹田由松氏

安政三年八月八日生

大阪府下の一寒村に生れた人。父は竹田由庄と云ひ代々小作農にて、文字通り赤貧洗ふが如き家であつた。幼少の頃は明親に従ふて農事に携つてゐたが、性来剛毅果断の氏には一寒村の小作農として甘んずることは出来なかつた。

依つて氏は単身大阪市に出て丁稚奉公をしたのであつた。当時は未だ徒弟時代の事であり、所謂「大阪商人」と言はるゝ程、商略機智に富んでゐたが、奉公人の使用を誤り屢使に過る事、今日の貨幣を以てせむか海に仮綿にもにも均しいものがあつた。

併し氏はそれにも屈へた。生家に戻つて一生を小作農として、貧の中に終る事を欲しなかつた。よしや自己の身が倒けても、倚怪且竹田家を再興せねばこまぬとの固き決心は如何なる艱便にも克く耐へ、商業の機略を会得する事に専心した。

その苦心は決して空しく葬らるべき筈がない。やがて氏は主家を出で、僅少の資本を以て商賈を始めた。或る時には古着を買買したこともある。又織物の仲介をして利を得た事もある。

兎に角氏はこれと云ふ一定の商品取扱をするよりは、利の少いものよりも、多いものと、次から次に選んで商賈をするのであつた。そして少しく利益を得れば、直ぐ歩調して、堆積に滞しく貧の中に日を経つてゐる悪弊を駆めるのであつた

氏は常に日進月歩の実業界を見る毎に、自己の教育の尠ないのを嘆くのであつた。貧の家に生れてそこに育ち、僅かに丁稚奉公に依つて機略を見る事のみで、大勢の趨向を察知して思惑をする事の外は動もすると缺けるもの～ある事を自ら悔ゆるのであつたが、氏が自ら悔ゆる程の事もなく、必ず成功してゐるのであつた。

従つて氏の巨利を博したる事は、平和なる時代に於てでなく、実に国難的一大変革の場合に多いと言はれてゐる。即ち日清戦争、或は又北清事件更に進んでは日露の役に際してブローカー式に氏が活躍して巨利を獲得した事が、氏を今日大阪市有数の資産家たらしめるに至つた原因である。

平素慈善にして義侠、奉公人等なる風を装ひ、常に忠君愛国を高唱し又は実践躬行以て自ら他に範を示すと云ふ風である。殊に氏が教育の如何に今後の社会に必要なるかを痛感してゐたかは、苟しくも教育に関する事業に対しては如何なる事柄にも快くこれを賛し私財を投ずる事を少しも惜むことなき態度に依て、これを立証し得るものがあらう。

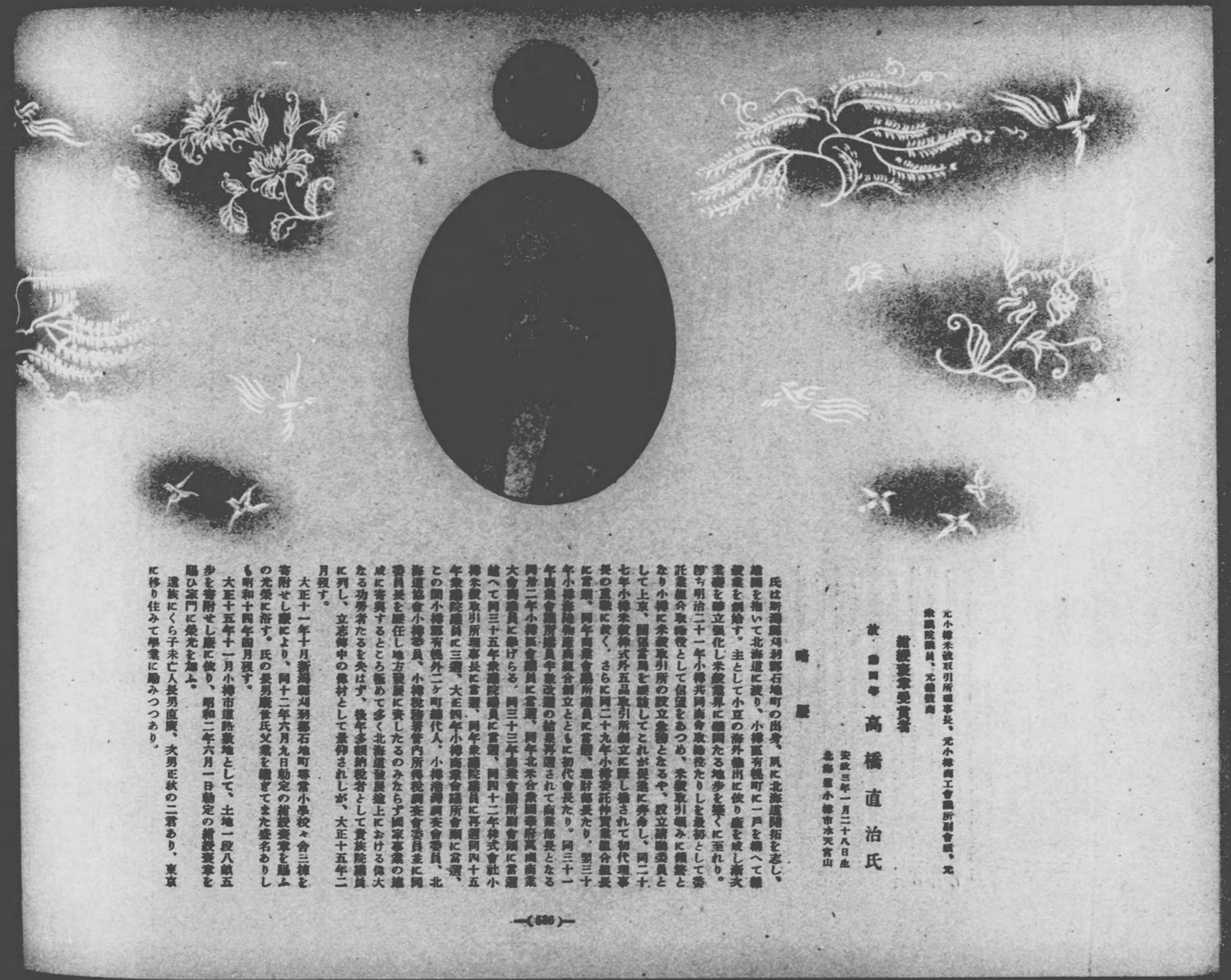
すなはち大正十三年偶々居町に幼稚園設立の議起るや、氏は喜び勇んでこれが建築敷地として土地一反八畝九歩、その価格金三萬八千五百圓也に同建築物三棟及び其附属建物器具一切その価格二萬三百五十四圓、合計六萬二百餘圓を寄附しここに大阪市有数の「泰幼稚園」を建設せしめたのであつた。

その功績に依つて、曩大正十四年四月七日を以て勅定の「紺綬褒章」を下賜せられ、その美挙を永遠に嘉賞されたのである。

して資本金を三百萬圓に増資するに成功し、次で矢継早に五百萬圓に増資を行ひ、当時銀行業界に於ける大事業を完遂せり。

氏が晩年に至るまで帝都財界の重鎮として景仰せられし所以は、其の銀行家として非凡の経綸を発揮したるにもよることは勿論なるも、個人無慾なる人格と深遠なる学識に負ふところ尠からず。氏が常に財界名士たるにとどまらず、わが国に於ける代表的人物として景仰されたるは又故なきにあらざるなり。昭和十三年三月薨す。

氏が終生一貫して公共奉仕に志しこれを実践したる篤行は本年の人格に一段の光輝あらしむるものにして、明治四十四年十月横生会へ金壱萬圓寄附の際に於り大正八年九月十九日勅定の紺綬褒章を、更に大正十三年三月開東大震災救護費として金壱萬圓寄附の際に於り、昭和四年二月十九日勅定の紺綬褒章を賜はり光栄に浴す。



元小樽米穀取引所理事長、元小樽商工會議所副會頭、元衆議院議員、元樽銀行

勳一等瑞寶章受賞者

故 男爵 高橋直治氏

安政三年一月二十八日生
北海道小樽市水天宮山

略歷

氏は新潟縣刈羽郡石地町の出身、夙に北海道開拓を志し、單身渡道を企圖して北海道に渡り、小樽區有幌町に一戸を構へて雜貨業を創始す。主として小豆の海外輸出に依り產を成し漸次業務を擴張し米穀賣買に關與する處多くに至れり。即ち明治二十一年小樽共同商會取締役たりしを最初として委託販賣分取締役として信望をあつめ、米穀取引場の設立發起となるや、設立請願委員として上京、關係當局を感說してこれが促進に奔走し、同二十七年小樽米穀株式外五品取引所創立に際し擧されて初代理事長の重職に就く。さらに同二十九年小樽委託仲買業組合組長に當選、同年商業會議所議員に當選、參事部長たり。翌三十年小樽穀物商組合創立とともに初代會長たり。同三十一年議員會議所議員辛酉改選の結果再選されて商業部長となる同年二年小樽區會議員に當選、同年北米合衆國桑府萬國商業大會議議員に舉げらる。同三十三年商業會議所副會頭に當選、同三十五年衆議院議員に當選、同四十二年株式會社小樽米穀取引所理事長に當選、同年衆議院議員に再選同四十五年衆議院議員に三選、大正四年小樽商業會議所會頭に當選、この間小樽郡有偏外二ヶ町組代人、小樽港灣調查會委員、北海道協會小樽委員、小樽港務局所偶設調查會委員並に同委員長を歷任し地方發展に貢したるのみならず國家事業の進展に寄與するところ頗めて多く北海道發展上における偉大なる功勞者たるを失はず、後年多額納稅者として貴族院議員に列し、立志傳中の傑村として景仰されしが、大正十五年二月歿す。

大正十一年十月新潟縣刈羽郡石地町等當小學校々舍三棟を寄附せし廉により、同十二年六月九日勅定の褒賞を賜ふの光榮に浴す。氏の長男廣吉氏又業を繼ぎてまた盛名ありしも昭和十四年四月歿す。

大正十五年十一月小樽市道時敷地として、土地一段八畝五歩を寄附せし廉に依り、昭和二年六月一日勅定の褒賞を賜ひ家門に榮光を揚ふ。

遺族にくら子未亡人長男直興、次男正秋の二君あり、東京に移り住みて學業に勵みつつあり。

合名會社高宮政商店社長、高政織物株式會社々長、絹綿物、人絹織物、絹織物、毛織物、スフ織物販賣並ニ同加工製造販賣業

褒賞受賞者

高宮政太郎氏

明治二十二年八月九日生
住所 西宮市夙川堤山町四一
營業所 大阪市東區本町一ノ二二

略歷

氏は大阪の人、南區順慶町に生る。家業たる綿布商を繼承し、營業の發展擴張に伴ひ合名會社高宮政商店を創設、店舖

合名會社高宮紋商店社長、高紋被服株式會社々長、綿織物、人絹織物、絹織物、毛織物、スフ織物販賣並ニ同加工製造販賣業

緒綬褒章受賞者

高宮政太郎氏

明治二十二年八月九日生

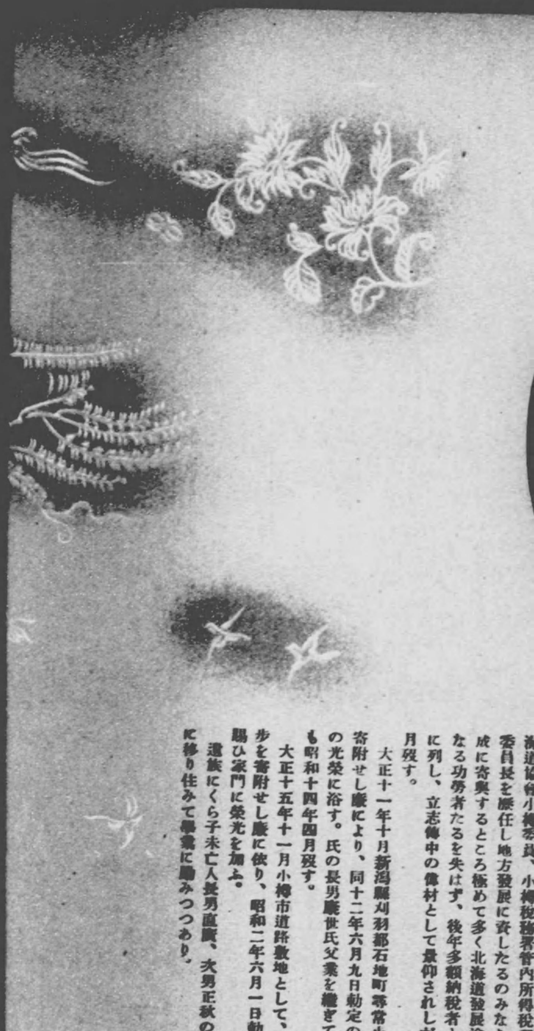
住所　西宮市夙川鐵山町四一

營業所　大阪市東本町一ノ二二

略歴

氏は大阪の人、南區鰹屋町に生る。家業たる綿布商を繼承し、顧客の發展擴張に伴ひ合名會社高宮政商店を創設、店舗を綿布商の牙城たる東區本町に開く。氏は夙に綿布卸の國産自給を志し夙かに期するところあり、合名會社設立當時專ら渡航より輸入せられたる特殊綿織物綿コール、ビツケ、別珍コール天等の輸入防止を目的として、別動の一會社として關西織下中島町に製造工場を設立し、織物製造に着手するとともに、製品の向上改良に不斷の研鑽を拂じたる結果、數年にして其の努力は開ひられ、輸入品に劣らざる優秀品を製造し得るに至り、常々輸入を防遏して初志を繼成したるが如き、方に國産獎勵の快擧といふべく、氏の斯業に盡瘁したる功績また偉大なりといふべし。爾來同工場製造品の一手販賣をなすとともに、一般諸織物工場の製造にかかる雜種綿布の取次販賣を專業とし、業務頗々擴國にして業績逐年累增の好勢を示しつつありしが、更に非常時局に當面するや、擴業昇の革命的變轉に即應してスフ織物、厚生絲織物、人絹織物、綿布等各種織物の內地販賣に精勵するほか、海外輸出を營み、更にまた國民被服の革新氣勢旺盛となるや高政被服株式會社を設立し、自ら社長としてこれを主宰し、價格低廉簡素にして保健的なる服裝雜貨類の製造販賣を創業し、所謂職域奉公の上に眞摯なる國策翼賛の赤誠を示しつつあるは、以て他の範とするに足れり。

氏が產業人として國家的使命に邁進しつつある概略は叙上の如くなるも、一市民として一國民として銃後奉公の實踐に精勵し、不斷の努力を捧じつつある功績また顯しきものあり就後奉公會、在鄉軍人分會長、青年學校、同後援會、町會等の幹部役員として活躍するほか巨額の私財を投じて國家社會に貢獻するところ尠からず。卽ち昭和十四年度のみにあつても、樞原神宮へ壹千圓、大阪招魂社へ三百圓、陸海軍へそれぞれ壹萬圓、忠魂塔建設基金に壹千圓軍人援護會へ五千圓を寄附または獻金せり。これら善行の集積は酬ひられて、同年十一月六日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。



滋道記念小樽港長、小樽稅務署管內所得稅調查會委員並に同委員長を歷任し地方發展に資したるのみならず國家事業の遂成に寄與するところ極めて多く北海道發展途上における偉大なる功勞者たるを失はず、後年多額納稅者として貴族院議員に列し、立志傳中の偉材として景仰されしが、大正十五年二月歿す。

大正十一年十月新潟縣刈羽郡石地町等常小學校々舍三棟を寄附せし廉により、同十二年六月九日勅定の緒綬褒章を賜ふの光榮に浴す。氏の長男廉世氏父業を繼ぎてまた盛名ありしも昭和十四年四月歿す。

大正十五年十一月小樽市道路敷地として、土地一段八畝五歩を寄附せし廉に依り、昭和二年六月一日勅定の緒綬褒章を賜ひ家門に榮光を加ふ。

遺族にくら子未亡人長男廉藏、次男正秋の二男あり、東京に移り住みて學業に勵みつつあり。

株式會社綿伊藤呉服店社長

綬褒章受賞者

高橋サワ氏

明治七年七月二日生
住所 新潟縣柏崎市本町二
番地所 新潟縣柏崎町二三一番地

略歴

○昭和十年五月新潟縣刈羽郡柏崎町公共施設費として金壹萬圓を寄附せし際に依り、同十四年六月三日勅定の綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

○昭和十二年十月新潟縣刈羽郡柏崎町公會堂建設費寄附に依賞として金拾七萬圓寄附の際に依り、同十四年六月二十九日勅定の綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

○昭和十四年六月日本赤十字社新潟支部事業資金として金壹萬五千圓寄附の際に依り、同年十二月十九日勅定の綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

○昭和十四年六月日本赤十字社新潟支部事業資金として金壹萬五千圓寄附の際に依り、同年十二月十九日勅定の綬褒章を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

○昭和十四年六月新潟縣立柏崎工業學校へ金貳萬五千圓寄附せし際に依り、同十五年九月二日勅定の綬褒章飾版賞牌を賜ひ、其の賞行を表彰せらる。

氏の夫君高橋忠平氏は、夙に朝、綿布の海外發展を志し、先づ南清の基地を廈門にもとめ、明治三十六年早くも廈門に呉服太物商を創設、越へて三十七年日露の風雲急なる中を、單獨して香港に進出、更に同四十一年新嘉坡に渡りて專ら呉服太物商の販賣に經營し、大いに日本人の意氣を示し、歿年南人に伍して異數の讃辭を送げたりしも、昭和七年病を得て歿死す。

サワ氏は夫君の遺業以來經營の要として内助の功を盡したるのみならず、よき都會として優秀なる支配人として、夫君を扶け業務の興隆に資するところ尠からず、夫君逝するや一切の業務を主宰し、個人經營を改めて株式組織となし、株式會社綿伊藤呉服店を創立、自ら社長となりて男子も及ばざる卓抜せるオ腕を發揮して、日本女性の眞の偉力を發揮しつつあり。

今や新興都の地側日益情勢に順化し、男人の服飾を受くる者日につき中にありて、氏は斷然として夫君の意を體りて進すところなし。氏の如きは實に内における代表的な婦人とも謂ふべく以て婦女の模範となすに足れり。

賞牌の賞行に依りて受賞の光榮に浴すること再三再四に及び、更に紀元二千六百年に際し、海外貿易功勞者として拓務大臣より表彰せられ家門に榮光を添へたり。

呉大野村村長、丹後織物株式會社監査役、丹後織物工業組合理事、中郡工業倶樂會評議員、呉大野村方面委員、大同盛藏木店主、仙洞同盟會

綬褒章受賞者

大同盛藏氏

明治廿八年三月十三日生
京都府中郡呉大野村四八七

奥大野村長、丹後鉄軌株式會社重役、丹後鉄鋼工業組合組長、中部工業同志會幹事員、奥大野村方面委員、大同產業本店主、織綿同業會

精神振興篤志者

大同盛藏氏

明治廿八年三月十三日生
京都府中郡奥大野村四八七

略歴

丹後地方一帶は、古來絣機織の産出を以て、其名聲全國に著聞せる養蚕有數の優良地たり、大同家は即ち當國中部第一の富家として知られ、徳代以前より農業の傍ら絹織商を營み近代に至りては絲月の取引を見つゝある巨商たり。明治先年を以て生れ、昭和十三年七十二歳の高齢を以て逝したる先代翁氏は、商才に富むと共に、政治家の資を備へ、家業に精進して、當家今日の基礎を築き、衆望を負よて丹後絹織同業組合副組長、同組合中部支部長、丹後織物株式會社々長、丹後絶縁織物株式會社重役等に擧されて業界に盡したるのみならず、數々の公職に就きて活躍、村自治の功勞者として稱へられ、其村長在任中日露戰役の事あり、内治の功に依りて勳七等に敘せらるゝ等、地方自治發展に貢献する所頗る大なりき。盛藏氏は即ち先長男として、明治二十八年三月十三日を以て生れ、昭和五年家督を相續す、眞に嘉賞を享へるや、直に店務に從事して父翁の業を援く。先代が專ら組合關係の重職に在りし爲、氏は既に二十餘年前より店務業務の一切を掌握し其明敏なる頭腦と經濟の手腕は、事の輕重緩急を誤らず、立ろく父祖の業を瞻るのみならず、或は京都、東京に支店を設け或は組織に改革を加ふる等、大に家業の發展に努め、現時奥大野村長たる外、冒記の各公職に就き、又地方に方面委員制度設立以來其委員に擧され、各方面に重きを爲しつゝあり。

資性温厚篤實にして、公共公同の念に厚く、昭和十四年七月京都府中郡會組等常高等小學校實業補及校地夏秋費として、金一萬圓を寄附したる廉により、同年十一月十四日勅定の紺綬褒章下賜の光榮を擔へり。又海軍協會終身維持會員、日本赤十字社有功社員に推薦せられたる外、各種公共事業に私財を致したること枚擧に遑あらず。

釣魚、小鳥に趣味を有し、家庭には親子夫人との間に二男一女あり。清福定に樂むべし。

して有機に進出、更に同四十一年新高坡に渡りて草梨服太物類の販賣に精勵し、大いに日本人の意氣を示し、盛業商人に伍して異數の發展を遂げたりしも、昭和七年病を得て客死す。

サヲ氏は夫君の嘉尚進出以來精勵の妻として内助の功を盡したるのみならず、よき秘書として優秀なる支配人として、夫者を扶け家業の興隆に資するところ尠からず、夫君歿するや一切の業務を主宰し、個人經營を改めて株式組織となし、株式會社後屋呉服店を創立、自ら社長となりて男子も及ばざる卓抜せる才腕を縱横に驅使して、日本女性の眞の偉力を發揮しつつあり。

今や新高坡の地對日感情嶮惡に屈化し、邦人の壓迫を受くる者日につゝ中にありて、氏は毅然として夫君の業を護りて働くところなし。氏の如きはわが國における代表的女傑とも謂ふべく以て婦女の龜鑑となすに足れり。

翁實の勵行に依りて受賞の光榮に浴すること再三再四に及び、夏に紀元二千六百年に際し、海外貿易功勞者として招聘大臣より表彰せられ榮光を擔へたり。

高津特火合社、高津航空工業株式會社、玉川航空工業株式會社、株式會社高津内燃機工業所

續續表彰受賞者

高津伊兵衛氏

明治三十八年八月十六日生
住所　東京市赤坂區新坂町二三
會場所　東京市日本橋區室町二ノ八

略歴

氏は東京府の人先代高津伊兵衛氏の長男、東京市日本橋區通戸物町に生る。高津家は元祿年間より代々日本橋に住し伊勢屋と稱して醫師問屋を營み「にんべん」の商號を以て世に知らる、江戸時代よりの老舗たり。氏は先代伊兵衛氏の末子にて父君を失ひて家督を相續せしは僅か三歳の時、幼名繁和と改めて伊兵衛を襲名す。通算第十一代の當主たり。

先代伊兵衛氏克く家運の興隆に精勵し、また社會公共に盡じたる善行の行爲少からず、就中私財を投納して防海の事業に盡瘁せし歴に依り、明治二十七年七月二十一日勅定の賞授爵等を賜ふの光榮に浴せり。

三歳にして大老舗の當主となりたる氏は、慈母の慈愛と叔父高梁六郎氏の後見によりて成育し、慈母また女丈夫の譽れ高く大商店の經營よろしきを得て、善く家運に貢獻の績なきを得たり。

長じて慶應義塾大學政治經濟科に學び、優秀なる成績をもつて卒業するや專ら家業に從ひて勵むところを知らず、叔父六郎氏の薨去に遭遇し、時代の新機なる知識を以てし、業態の變化に適應し株式會社高津商店を設立して自ら社長たり。今や餘力を擧つて高津航空工業株式會社、玉川航空工業株式會社を創設社長の重職に就き、非常時下における產業人としてまた實に大使命の達成に邁進しつつあり。

氏は家財を投ずるに航空工業を選びたるは、茫に報國の至誠を披瀝せんことを期したるものにして、兩社のわが國航空界に寄するところ極めて多かるべきを期待さる。

氏が斯くの如く家業を守りて誠實、國家に率ずる貢獻なるは、幼少より母堂の徳にありて淳厚を勵み、叔父の訓へに從つて從順なりし點と雖も本氏の天賦英邁にして時局の認識を誤らざる叡智が然らしめたるものと謂ふべし。

明治四十四年十月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓を寄附せし善行により、昭和三年六月六日勅定の褒賞を賜ふの光榮に浴し、家門に榮光を添ふ。

續續表彰受賞者

故　田中新七氏

弘化元年十一月一日生
横濱市中區本町二ノ一一

略歴

氏は受知顧の人田中久兵衛氏の二男にして、安政元年父君の亡跡を繼ぎて家督を相續す。先考久兵衛氏遺訓を家業としかば、氏も亦父業を扶けて怠らざりしが、家督を相續して家業の一切を主宰するに至るや、施設の改良を斷行して增產

田端製線所主、製線業

緒綬褒章受賞者

田端源三郎氏

明治廿七年六月十日生
大阪府泉南郡佐野町六七二

略歴

夙に製線の好望なるに着眼し祖先以來定住の地たる和泉國の名邑佐野町に、其本據を構へて鋼線の製造を創始し、爾來拮据經營に任じ、業績隆々として擧り、今や業界一方の雄として、重きを爲しつゝあるもの、之を田端源三郎氏と爲す。

當家は代々大阪府泉南郡佐野町に居住せる舊家にして、氏は先代政吉の長男として、明治二十七年六月十日を以て、現地に呱々の聲を揚ぐ。資性英邁にして、少時既に群童の間に頭角を擢んじ、風雛として鄕黨の間に、其將來を觀望せらる。明治四十一年三月、佐野尋常高等小學校を卒業し、同四十四年四月、神戸市神港商業補習學校に入學、大正二年三月同校二年を修業後歸鄕す。恁くて商工業を以て身を立てんとするの宿志を遂すべき秋到り、玆に大正六年四月、現在の地に田端製線所を創立して、各種硬鋼線の製造及加工に從事し爾來異常の勤勉努力を以て大に業績を擧げ、其事業の進展すると共に、更に昭和十年以來、洋傘骨の製造に着手し、內地は素より海外に其販路を拓き、盛大なる業勢を布くに至り、今や、東京市日本橋區碩殼町四丁目十一番地に東京出張所を又大阪市南區難波新地六番町に大阪出張所を設置し、設販なる商況を呈しつゝあり。昭和十三年九月日本硬鋼線材加工工業組合設立せらるゝや、衆望を負ふて其理事長に選任せられ大に業界に盡す一方、同年十二月、私立田端製線青年學校を設立し、後進子弟の指導誘掖に努めつゝあり。

公共、公同の念頗る厚く、佐野町鄕社春日神社に金二百圓を寄進したるを始め、在鄕軍人會佐野分會、佐野町新町青年分團、佐野町方面委員、泉南郡貝塚町水間區工業團體へそれぞれ金貳百圓づゝを、又佐野銃後奉公會、佐野國防婦人會へ各金百圓宛を寄附して、其事業を扶くる等大に盡瘁する所あり。昭和十四年六月、母校たる佐野尋常高等小學校敷地擴張費として、金一萬三千圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年九月廿一日、勅定の緒綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を輝かせり。

波多野鐵工所、昭和物產株式會社各取締役、十七銀行監査役、財團法人弘文舍專門學校理事長、土地家屋賃貸業多額納稅者

緒綬褒章受賞者

芳賀茂元氏

明治二十年十二月二日生
八幡市枝光町

略歴

氏は福岡縣人芳賀善一郎氏の次男。幼名茂。實父の從弟芳賀善次郎氏の養子となり、茂元と改名、養父歿後家督を相續す。養父善次郎氏は達識の人材にして、家鄕の地に一大製鐵

つて卒業するや專念家業に從ひて倦むところを知らず、叔父六郎氏の薫陶に加ふるに專攻の新鋭なる知識を以てし、業礎の強化に邁進し株式會社高津商店を設立して自ら社長たり。今や餘力を驅つて高津航空工業株式會社、玉川航空工業株式會社を創設社長の重職に就き、非常時下における産業人としてまた重大使命の達成に邁進しつつあり。

氏は家財を投ずるに航空工業を選びたるは寔に報國の至誠を披瀝せんことを期したるものにして、兩社のわが國航空界に資するところ極めて多かるべきを期待さる。

氏が斯くの如く家業を守りて誠實、國家に奉ずる眞摯なるは、幼少より母堂の懷にありて淬礪を勵み、叔父の訓へに從つて從順なりし賜と雖も亦氏の天資英邁にして時局の認識を誤らざる叡智が然らしめたるものと謂ふべし。

明治四十四年十月恩賜財團濟生會へ金壹萬圓を寄附せし善行により、昭和三年六月六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴し、家門に榮光を添ふ。

田中新七

紺綬褒章受賞者

故田中新七氏

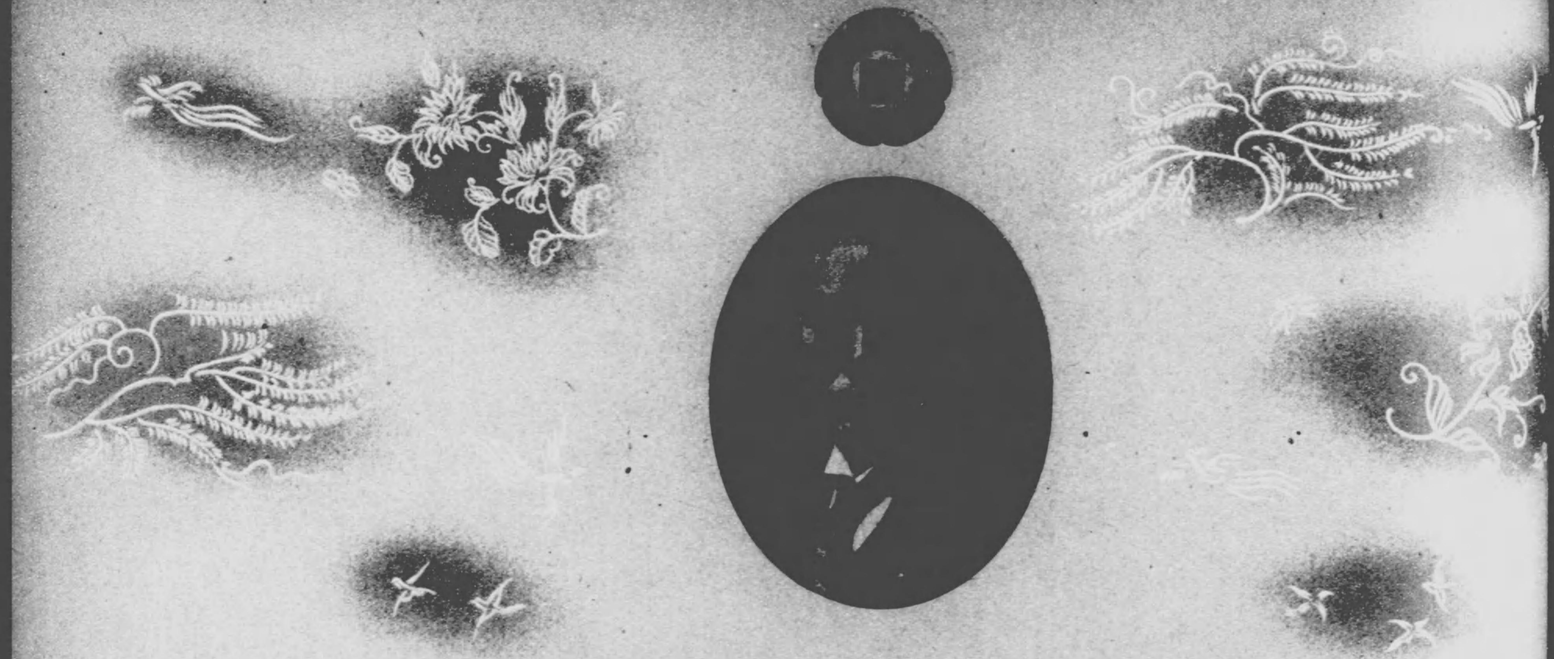
弘化元年十一月一日生

横濱市中區本町二ノ一一

略歴

氏は愛知縣の人田中久兵衛氏の二男にして、安政元年父君の亡跡を繼ぎて家督を相續す。先考久兵衛氏襲絲を家業とせしかば、氏も亦父業を扶けて怠らざりしが、家督を相續して家業の一切を主宰するに至るや、施設の改良を斷行して增産を期し品質の改善向上に不斷の努力を投ぜしかば、家運大いに興り、資産また增大せり。玆において氏は餘力を驅つて實業界進出を試み、先づ明治二十一年北海道炭礦鐵道株式會社取締役たり。これ實に氏が後年實業界において雄飛するに至れる端緒なり。爾來氏は本業に精勵する傍ら、實業界各部門にわたる重鎭と交遊し投資し、新分野開拓に專念せり。明治二十四年關西鐵道株式會社設立せらるゝや取締役として迎へられ、樞機に參畫して同社發展の基礎を確立し、同三十二年兩毛鐵道株式會社取締役に擧げられるなど、專ら地方交通利便の開發に努力せしが、更に同三十八年横濱市に合資會社田中商店を設立し、生絲貿易業界に進出、斯業の發展に資したるところ尠からず。ついで同四十一年南海鐵道株式會社、京都電氣鐵道株式會社各取締役に擧げられ、同四十四年愛知電氣鐵道株式會社取締役たり。氏の實業界進出の端緒をなせしものは北海炭礦鐵道たりしが、私鐵業界における氏の經驗は漸次その關係會社を加ふるに從つて端睨すべからざる非凡の識見を生み、いよいよ業界に重きを成すに至れり。私鐵業界において縱横の手腕を揮ひたる氏は更に進出の分野を製鋼業界瓦斯電氣業界にもとめ大正六年日東製鋼株式會社、日本瓦斯株式會社、名古屋電燈株式會社各取締役たり。大正七年更に日本ペイント、日本硫肥各株式會社監査役に推さるゝなど氏の關係業域はいよいよ廣範圍にわたるに至りしが、これより先き大正元年鑛山業界にも進出、豫想外の成績を擧ぐ。氏の如きは實に稀れに見る天才的實業家と謂ふべく、その殖産興業に資したる功績偉大なるものあり。

大正十年五月濟生會事業資金として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同年十二年二十六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。大正十一年長逝す。



褒賞

緑綬褒章受賞者

芳賀茂元氏

明治二十年十二月二日生
八幡市枝光町

渡多野鉱工所、昭和物産株式會社各取締役、十七銀行監査役、財團法人弘文會專門學校理事長、土地家屋貸會議員

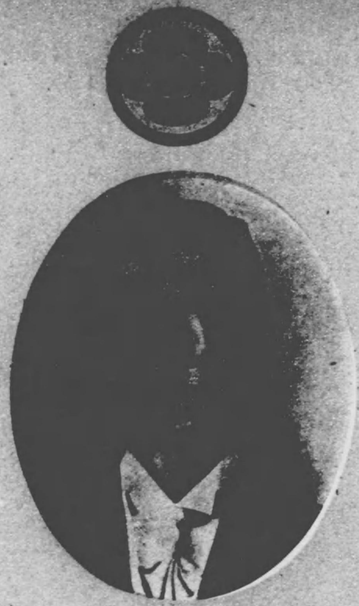
略歴

氏は福岡縣人芳賀善一郎氏の次男。幼名茂一。實父の從弟芳賀幸次郎氏の養子となり、茂元と改名。養父現後家督を相續す。養父幸次郎氏は達識の人材にして、家郷の地に一大製鐵所の建設計畫あるを知るや、地方開發の上に多大の裨益を置らすものと確信し、率先して、これが實現の道促に勉めたるが明治三十六年財界稀有の變慌を來たし、製鐵界また不況を極め、八幡製鐵所竝に擔業を中止するのやむなきに至り、土地價格暴落するや、機を見るに敏なる氏は、土地の買收に奔走して廣大なる土地を獲得せしが、財界恢復して製鐵業界の復興に伴ひ地價漸次昂騰するに及んで、巨萬の富を成すに至る。實に氏の先見と積極的資性が然らしめたるものにして、到底他の追隨を許さざる蓋勝の點といふべし。

茂元氏は明治三十九年東筑中學校を卒業するや直ちに養家に入りしが、富裕の養嗣子として安逸を貪るを潔しとせず、人生修練の道場として八幡市役所を選び一少吏員となる。俸給月額僅か六圓の地位に甘んじ精勵恪勤すること拾年、大正八年退職せしが、この間氏の獲得したる無形の資産は、莫し氏を擁する巨財よりも遙かに貴きものなりしなるべし。氏は市役所に奉職中、屢々勞働爭議に遭遇し、痛く資相惡化し、勞資の對立激化するの傾向あるに省みて、先づ有產階級の自覺による社會公益の實踐こそ激化せんとす社會の風潮を緩和且正する第一步なりと信じ、自らを持するに嚴、常に救貧の事業に私財を投じ、率先して社會施設の擴充改善を唱導し、鋭意なる市民厚生安設備の完成を強調、着々理想の實現に邁進するを唯一の悦樂となす。即ち門司、小倉、若松、戸畑、八幡の各工業都市に於て、市民厚生の爲めにも、市民慰樂の爲めにも公園設備を完備の必要とするに拘らず、その事なきを慨して、八幡市五條橋附近登萬餘坪の土地を購まてアドラ遊園地を設け、更に同市高見官舍、小倉グラウンド間の山間に約五萬坪の大遊園地を造成するなど、其の社會奉仕的事業に關する氏の功績顯著なるものあり。昭和三年六月八日八幡市窮民救助費として金壹萬圓寄附の廉に依り、同年十月二十四日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

今や、東京市日本橋區濱町四丁目十一番地に東京出張所を又大阪市南區難波新地六番町に大阪出張所を設置し、啟販なる商況を基しつゝあり。昭和十三年九月日本硬鋼線材加工業組合設立せらるゝや、業務を負ふて其理事長に選任せられ大に業界に盡す一方、同年十二月、弘立田端製線青年學校を設立し、後進子弟の指導誘掖に努めつゝあり。

公共、公同の企願る厚く、佐野町鄕社春日神社に金二百圓を寄進したるを始め、在鄕軍人會佐野分會、佐野町新町青年分團、佐野町方面委員、泉南郡貝塚町水間區工業團體へそれぞれ金貳百圓づゝを、又佐野統後來公會、佐野國防婦人會へ各金百圓宛を寄附して、其事業を扶くる等大に盡瘁する所あり。昭和十四年六月、母校たる佐野尋常高等小學校敷地擴張費として、金一萬三千圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年九月廿一日、勅定の緑綬褒章を下賜せられ、家門の榮譽を歸かせり。



鑛山業
貢、績、褒賞受賞者

故 田中長兵衛氏

安政五年十月二十日生
東京市京橋區北鞘町一二

略歴

氏は京洛の人先代田中長兵衛氏の長男。田中家は先代長兵衛氏より鑛山業を經營し、業界に盛名ありしが、氏少壯より父君を扶けて家業に從ひ、傍ら向學の志厚く京濱間を往來して、英語數學を修めて他日を期するところありたり。

明治十八年釜石鑛山の復興を志し、海軍技術官大河平才三氏等に就いて、深く岩西の鐵鑛業の狀況を研究し、また雲伯鑛山の踏圖を巡視して新業の研鑽に勉め、遂に同二十年初志を貫徹して釜石鑛山の復興を成就し、業界注目の的となれり。爾來幾多の辛酸困苦を克服しつつ漸次業容を擴大し、製鋼業を創業するに共に、同二十八年臺灣に進出し、瓜石鑛山を開發、金銅鉛の產出を計り、關係する鑛山全國に及ぶの盛況を示し、わが國鑛山業者として第一流の域に達するに至れり。

明治三十四年十一月先代長兵衛氏の亡跡を繼ぎて家督を相續するや、鑛山製鍊業を以て甘んぜず、更に業域を擴大して米穀、食料品、セメント、電氣器具機械、雜貨等凡ゆる重要物資の販賣を目的となす獨立の商店を創設して屋號を"鐵屋"と稱す。

鐵屋の當時に於ける名聲は東京市中を壓するの概あり、支店出張所を數箇所に設けて、異數なる發展を遂げ家運隆々に興隆せり。

氏が鑛山業界の巨頭として活躍したるほか、鐵屋の經營にあたり、克く實具的伸展を遂げ得たるは、時運の進展に即應したる商略のよろしきを得たるに因るものにして、鐵屋の如きも其の屋號の示す如く堅實を第一とし、しかも金儲にも比すべき平子たる決意のもと、一步も退かざる進取的果斷の賜といふべくまことに商道の軌範として推賞し指ぐ能はざるものあり。

氏はまた夙に明治前期に於て國家に海防の必要あるを痛感するや巨額の獻金をなしたるほか帝國軍人後援會へ金壹萬圓恩賜財團博生會へ金拾萬圓、明治神宮奉賛會へ金壹萬圓を寄附したる等實行に依り、明治二十年九月二十九日勅定の賞設賞章を、大正六年七月二十日緑綬褒章を、同十年十月十二日同紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。大正十二年三月歿す。

合名會社佐藤興西代表社員、機業家

緑綬褒章受賞者

第八号 **佐藤松太郎氏**

明治十六年生
兵庫縣多可郡東吉村字和田

略歴

東播西部町を中心とする機業は、長康麓下に於ける主要重業として異様の發達を遂げ、農より機業へ、商家より機業へと轉業して、著實的成功をよく成し得たるもの夥しとせず。佐藤松太郎氏の如きも、まさに其の成功者の一人たるを失はず。

佐藤家は其の祖多可郡に接續せる加東郡に於て農を營みしが、多可郡に移住して更に農を業となす。氏は先代倉藏氏の

合名會社依藤商店代表社員、機業家

緑綬褒章受賞者

第八章　依藤松太郎氏

明治十六年生
兵庫縣多可郡富田村字和田

略歴

東播西脇町を中心とする機業は、長庚翁下に於ける主要産業として異彩の發達を遂げ、農より機業へ、商家より機業へと轉業して、顯著的成功をよく成し得たるもの數しとせず。依藤松太郎氏の如きも、まさに其の成功者の一人たるを失はず。

依藤家は其の祖多可郡に接續せる加東郡に於て農を營みしが、多可郡に移住して更に農を業とす。氏は先代倉藏氏の二男にして、父倉藏後家兄幸藏氏家督を相續するや、分家して一家を構立す。氏二十二歳の時なり。

氏は分家して一家を成すや、父祖の業農を捨てて、當時勃然として起りつつありし機業界に身を投じて家を興さんことを期したりしも、其の好機を摑み得るに先きだつて、日露の役に補充兵として召され出征の榮誉を擔ふ。第一線につくや勇敢機略を縱横多の勳功を樹て勳八等を賜ふ。

日露の役全く終末を告げ、國威大いに揚るとと共に、國内産業また勃興し、氏が勃興せし機業界また潮みに活況を呈し、多可郡にありても諸村に機業家續出して、其の繁日々に加はるの趨勢なりき。

氏も茲に意を決して機業を創業、孜々營營其の仲間發展に精勵し、漸く業礎成るや、個人經營を資本金參拾萬圓の合名會社に變更、工場設備を基礎擴充し製品の改善向上に邁進せしかば、業況具敷の進展を遂ぐるに至れり。時に大正七年のことにして、創業以來年を重ぬること未だ滿きに拘らず、この成果を收め得たるは、時運の然らしむるところ尠からずと雖も、氏が卓拔せる經營方針により不斷の努力を投じたる賜にして、其の當圓の經史たるや衆庶の模範たり。

業礎の確立を見るや、氏は餘力を擧つて同業界の興隆に參仕的努力を惜しまず、同業組合評議員、工業組合理事並に理事長を歴任して善異せしところ多く、又村會議員、區長に推され、多年にわたりて村政自治に盡瘁せしもののあり。

日本赤十字社、濟生會有功社員たる氏は、社會公共の念厚く其の善行多きに中に、昭和十二年五月多可郡富春小學校講堂建築費として金壹萬圓を寄附したる廉に依り、同年九月十日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

店出張所を數個所に設けて、異數なる發展を遂げ家運傾みに興隆せり。

氏が鋼山業界の巨頭として活躍したるほか、機屋の經營にあたり、克く類異的伸展を遂げ得たるは、時運の進展に即應したる商略のよろしきを得たるに因るものにして、機屋の如きも其の屋號の示す如く緊實を第一とし、しかも金儲にも比すべき牢乎たる決意のもと、一歩も退かざる進取的果斷の賜といふべくまことに商道の軌範として推賞し措く能はざるものあり。

氏はまた夙に明治前期に於て國家に海防の必要あるを痛感するや巨額の献金をなしたるほか帝國軍人後援會へ金壹萬圓恩賜財團濟生會へ金拾萬圓、明治神宮奉贊會へ金壹萬圓を寄附したる善行に依り、明治二十年九月二十九日勅定の賞勳章を、大正六年七月二十日同綬褒章を、同十年十月十二日同紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。大正十二年三月歿す。

福岡縣實業界功勞者

故 末永四郎平氏

文久二年三月廿八日生
福岡縣京都郡長濱町中町

多年地方の有力者として、實業に幾多の功績を貽したるのみならず、或は自治の上に、或は公共の爲に甚大なる貢獻を捧げつゝ、其光輝ある生涯を終りたる、故末永四郎平氏の如き洵に當代空に關る篤行家として、玆に特筆に値する人材と稱すべし。

當家は代々愛媛縣喜多郡長濱町に於て、米穀肥料商並回漕業を營める舊家にして、中興の祖以來六代を數ふ。氏は文久二年三月二十八日、本縣人兵衛治郎の長男として生れ、先代ヨッの入夫となり、四郎平を襲名す。資性溫厚篤實にして、甚だ勤勉なり。其家業を繼ぐや、拮据經營に當り、曾に家業と雖も關係するのみならず、時地方が金融機關の便に缺くる所あるを觀て同志と共に長濱銀行を創立して、自ら其頭取の重任に就き地方金融界の爲めに貢獻する所甚だ大なるものあり、後同行が大洲銀行と合併し、伯州銀行となるや、之が取締役に擧げられ、又伊濱木材株式會社取締役として實業に重きを爲せり。一方多年長濱町會、喜多郡會議員に擧げられて、地方自治の爲に盡し、昭和十年十月眞堂を負ふて長濱町長に就任し町政に數身的努力を捧げ、同町の施設、發展に寄與する所尠からず。

又顧る公共の念に厚く、昭和十一年九月、長濱町役場の廳舍建築費として、金一萬圓を寄附したる處に依り、其功を錄せられ、同年十二月二十三日、勅定の紺綬褒章を下賜せらるの光榮に浴せり。其他日本赤十字社、恩賜財團濟生會、帝國軍人援護會の事業に寄與して之に多額の私財を投し、各有功章を授與せられ、又長濱町基本財産、小學校奬勵金等を寄附し、奢侈を嚴められる外、或は神社佛閣に淨財を寄進し或は各種社會事業に私財を投ずる等、其篤行枚擧に遑あらず。

氏の慈かる數多の行爲は、洵に衆民の聽たるに足るべく、德業の聞に絶大なる信望を得つゝありしが、昭和十五年七月七十九歳の高齡を以て、隣人哀悼の裡に長逝せり。

夫人は既に十三年前に歿し、男榮一氏亦亡く、其子にして令孫に當る芳朗氏其後を繼承す。芳朗氏は大正三年五月五日出生、早大商科出身の秀才にして、新進氣鋭の實業家として將來を嘱望せらる。

福岡實業界功勞者

故 瀧川喜太郎氏

安政四年十二月十一日生
福岡縣山門郡四ツ谷村大字瀬高町

略歴

氏は和歌山藩人瀧川新七氏の長男。幼にして父を喪ひ慈母の手に成長せしが、夙に英才の聲高く、漸く八歳にして非凡師の門に入り初學を修め、十一歳の時湯川退藏師に就きて漢學を學ぶ。頭腦明晰にして博覽強記、進學の速やかなるに精師同學は驚嘆せりといふ。以て氏の凡物にあらざるを識ひ知るを得べし。

十六歳商業を志し、同年秋某呉服商の一小店員となりて、

寄與する所鮮からず。

又頗る公共の念に厚く、昭和十一年九月、長濱町役場の廳舍建築費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年十二月二十三日、勅定の紺綬褒章を下賜せらるの光榮に浴せり。其他日本赤十字社、恩賜財團濟生會、帝國軍人援護會の事業に獨資して之に多額の私財を致し、各有功章を授與せられ、又長濱町基本財産、小學校奬勵金等を寄附し、褒狀を贈られたる外、或は神社佛閣に淨財を寄進し或は各種社會事業に私財を投ずる等、其篤行枚擧に遑あらず。

氏の悠かる幾多の行蹟は、洵に衆民の範たるに足るべく、遐邇の間に絶大なる信望を得つゝありしが、昭和十五年七月七十九歳の高齢を以て、隣人哀悼の裡に長逝せり。

夫人は既に十三年前に歿し、男要一氏亦亡く、其子にして令孫に當る芳朗氏其後を繼承す。芳朗氏は大正三年五月五日出生、早大商科出身の秀才にして、新進氣鋭の實業家として將來を嘱望せらる。

紺綬褒章受賞者

故 瀧川喜太郎氏

安政四年十二月十二日生
有田郡四本荘國目村出町

略歴

氏は和歌山縣人瀧川新七氏の長男。幼にして父を喪ひ悲運の裡に成長せしが、夙に英才の誉高く弱冠にして非凡の門に入り初學を修め、十一歳の時湯川退蔵師に就きて漢籍を學ぶ。頭腦明晰にして博覧強記、進學の速やかなるに儕輩同學は驚嘆せりといふ。以て氏の凡物にあらざるを覗ひ知るを得べし。

十六歳商業を志し、同年秋某呉服商の一小店員となりて、新宮を中心に縣下各地を行商す。衆宜を抜く英俊も家運損きに依り進學の途を閉ざされ、可憐貧乏ひの行商に日夜の艱難辛苦を嘗むるのやむなきに至りたるも、所謂蘇秦故を玉にするの古諺に洩れず、氏も亦悲涙の裡に心身を鍛錬し、遂に立志傳中の人物たるの成功を贏ち得たるなり。

呉服の行商に明け暮れ十餘年、幾何かの貯へを得たる氏は断乎獨立を志し、秘かに其の機を覗ふうち、明治十六年將く時期到来、主家を辭して新宮町に一戸を構へて、呉服商を創業す。これ實に氏が後日大を成すに至るの意義ある第一歩たり。

納豆恰勘家業に勵んで倦むところを知らず、屢説の擴張信用の獲得に餘念なかりしかば、家業日に增し隆昌にむかひ、將く同業の嫉むところとなりしが、氏は常に小成に安んずるを戒め、勤倹節約を忘れず、他日を期すること極めて厳なりき。

斯くて氏相當の産を成すや、再郷して金融業を創業す。蓋し新宮町にありて呉服商の如きは發展の限度あり、商機と時代の推移を見るに敏なる氏は、地方發展の模様をなすものは金融にありと痛感したるに因るものなるべし。時に明治三十五年氏四十六歳の時なりき。

越へて明治四十三年田邊町に移住、瀧川家の基礎彌々強固となるや、金融業をも廃して悠々自適の生活に入り、慈善へ孝養を盡すを以て唯一の悦びとせしが、昭和十一年逝く。

昭和八年七月和歌山縣田邊町公會堂建物並に附屬備品（評價參萬五百圓）を寄附せし廉に依り、同九年八月六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

氏に實子なく、御坊町野村芳蔵氏四男を迎へて養子となす。當主喜太郎氏これなり。

高石憲治氏

明治廿三年十月廿七日生
有馬山脈海草郡下津町字藤川六九六

略歴

高邁なる識見と、熱烈なる愛郷心と、加ふるに政治的手腕とを以て、常に居村の發展と村民の福祉増進に努力し、郷黨の間に善人として推稱せらるゝもの、之を高石憲治氏其人と爲す。

氏は先代顯識の次男として、明二十三年十月二十七日和歌山縣海草郡に生れ、明四十年八月家督を相續す。夙に郷黨を率へて後、家業たる稻作農産業に從事し、拮据經營大に其業の興隆に努め、所謂記州物としての稻作の聲價を高むるに與つて力あり。其經營の才幹は、農村の信望を得て、元濱中村農業會長に推され、現に其職に在り。爰に大正七年七月擧げられて海草郡會議員に當選、同十一年再選せられ、又同十四年五月村會議員に選出せらる氏の地方會議に臨むや、公平無私を信條として事に當り、各種の施設宜しく大局を誤らず、賛助する所、頗る大なるものあり。就中同村には從來濟寧、濟同兩尋常高等小學校あり。村費多端にして、都乏せる村經濟を以てしては、兩校の併立經營困難となり、爲に兩校合併の擧起りたるも、或は地の利に於て、或は新校舍の建築費に於て、或は土地買收費に多額を要する等の關係より、異論百出して容易に合併の纏まらず。依て多年懸案の徒爲しく歲月を經過し、村費の都乏愈々甚しきに至るや、當物より村の將來を經慮し、兩校の合併を得策とするの意見を堅持したる氏は、遂に斷然意を決し、昭和二年五月二十七日、資産價に三萬圓と稱せられたる氏が、其の三分の一に當る一萬圓を醵出し、學校用地購入費として之を寄附したる爲、社に多年の懸案は勿ち圓滿なる解決を告げ爰郷直下、新校舍の工事成り、鄙下有數の小學校を實現するに至れり。即ち其功を賞せられ、同年九月二十八日勅定の褒獎狀を賜ひ、其德行を表彰せらる、洵に當門の面目と言ふべし。其後昭和三年十一月十六日大禮記念章を下賜せられたる外、公共公益の事に私財を投じたること、擧げて數ふべからず。

氏素と信率し、誠實を趣味とす。家庭には內助の功多き周夫人の外、今娶にして後嗣たる義孝氏、同てる子夫人、二令孫あり。頗る清福圓滿を以て稱せらる。

長濱禮藏氏

明治四十一年五月十日生
神戸市葺合區熊內町二ノ四〇

略歷

地方屈指の名門に生を享けて、多幸なる環境に成育したるも、高邁敢爲の資質は、其境遇に徒らに墮和たる能はず、自ら其運命を開拓すべく、新進俊銳の意氣を以て、新體制の線

神戸商業、臨海商業、臨海魚市場各株式會社取締役、長濱合名會社代表

緑綬褒章受賞者

長濱禮藏氏

明治四十一年五月十日生
神戸市葺合區脇濱町二ノ四〇

略歴

地方圖治の名門に生を享けて、多幸なる環境に成育したるも、高遠敢爲の資質は、其境遇に徒らに晏如たる能はず、自ら其運命を開拓すべく、新進俊敏の意氣を以て、新體制の線に副ひ、各種の事業に邁進活躍しつゝあるもの、之を長濱禮藏氏其人となりとす。

當家は攝津脇濱地方に於ける舊家として知られ、當主を以て五代を算す。以前は酒造の問屋として名ありしが、後魚問屋に轉向、屋號を播磨屋と稱し、業況盛大を極む。祖父清五郎は頗る政治的手腕に富み、屢〻神戸市會議員に擧げられ、市政方面の有力者として、神戸市の爲に多大なる貢獻を致し又先代禮藏氏は同志と共に神戸實業銀行を創立して、其專務取締役となり、又大同信託の前身大和信託の專務として敏腕を揮ひ、業界に寄與する所頗る大なるものあり。二代に亘りて、共に神戸市政界業界に力を盡せし歸々たる人材なりき。

氏は明治四十一年五月十日を以て、先代禮藏の二男として生る。父祖俊英の氣を享けて、少時既に頭角を群童の間に拔き、鳳雛を以て目せらる。學序を經て神戸第一中學校に學び先代の歿後を承けて家督を相續し、前名一德を改め襲名す。嘗來先代の遺業を勵りて拮据經營に任じ、現時綿陽商業、臨濱魚市場各株式會社取締役として活躍しつゝある外、其所有の土地建物の業務を營む長濱合名會社を組織して、其代表者たり。氏は曾に其事業の經營に精勵なるのみならず、社會公共公岡の念頗る厚く、神戸市葺合區脇濱町一、二丁目町會長を始め、葺合南部警防團長、借家土地貸貸委員等に推され又時局關係の各種設には、吟ど副與せざるものなく、夫等の役員として、寢食を忘れて奔走盡瘁しつゝあり。

昭和十四年十一月、日本赤十字社兵庫支部事業費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を賞せられ、同十五年四月四日勅定の緒綬褒章を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

氏は讀書に多大の興味を有し、日夕萬卷の書を繙いて修養を怠らず、而も年齒尚壯にして、今後の進展測るべからざるあり、識人が氏の將來を期待する洵に所以ありと云ふべし。

於て、或は新校舍の建築費に於て、或は土地買收費に多額を要する等の關係より、眞誠百出して容易に合併の纏まらず。爲めに多年懸案の能く難しく幾月を經過し、村費の窮乏愈々甚しきに至るや、當初より村の將來を繼續し、兩校の合併を得策とするの意見を堅持したる氏は、遂に斷然意を決し、昭和二年五月二十七日、資産價に三萬圓と稱せられた氏が、其の三分の一に當る一萬圓を醵出し、學校用地購入費として之を寄附したる爲、玆に多年の紛糾は勿ち圓滿なる解決を告げ念轉直下、新校舍の工事成り、郡下有數の小學校を實現するに至れり。即ち其功を賞せられ、同年九月二十八日勅定の緒綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せらる。洵に當門の面目と言ふべし。其他昭和三年十一月十六日大禮記念章を下賜せられたる外、公共公岡の事に私財を投じたること、擧げて數ふべからず。

實業を信奉し、誠實を態度とす。家庭には內助の功ある夫人の外、令嗣にして後嗣たる義泰氏、同てる子夫人、二令孃あり。擧る皆圓滿なりと云ふべし。

一宮商工會議所議員、丸吉絹糸株式會社取締役社長、合資會社丸吉紡績所代表者、愛岐再製絹糸卸商業組合長、尾西布帛製品工業組合長、一宮實業組合聯合會副會長

緒綬褒章受賞者

田中鐵三郎氏

明治二十三年七月十一日生
愛知縣一宮市伸馬通三ノ一六

略歷

愛知縣一宮市に於て、代々絹絲繭商を營み、多年隆々たる業勢を續けて現代に至り、今や同地方第一流の業者として斯界に君臨しつゝあるもの、之を田中鐵三郎氏と爲す。

先代鐵三郎は、溫厚にして襟度あり、一宮町會議員、市會議員として、同市自治の爲に盡し、又商工會議所議員に選ばれ、商工界に多大の功績を貽し、昭和四年、六十八歲を以て歿せり。氏は其長男として、明治二十三年七月十一日現所に生れ、先代の歿後を承けて家業を嗣ぎ、前名吉藏を改め襲名す。爾來專心家業に精勵し、現時丸吉絹絲株式會社々長、合資會社丸吉紡績所代表者たる外、愛岐再生絹絲卸商組合長、尾西布帛製品工業組合長、一宮實業組合聯合會副會長、全國再製絹絲聯合會理事等に推され、業界に縱橫の活躍をなせる一方、曩に市會議員たりしことあり。又一宮商工會議所議員に選ばれ、現に同商業部長の要職に在り。更に一宮稅務署相續稅審査、有限責任一宮市民信用組合教育部、一宮市產業振興審議會各委員、大谷派本願寺會計評議員等の公職に就き、寢食を忘れて日夜之に奔走盡瘁しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和十三年三月、國道十二號線道路改築工事費として、金一萬三千九百六十三圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年十二月十四日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せられたる外、縣立一宮商業學校建築費として、金壹萬圓、第三小學校講堂、第五小學校奉安殿及第二保育園建築費として金五千圓、日本赤十字社、海員救濟會、海軍協會及警察後援會に、金七千圓を寄附せり。其他各種公益事業に翼贊して、之に私財を投じ、或は神社佛閣に浮財を寄進したること、枚擧に遑あらず。

家庭には母堂みさ刀自、とう夫人、長男耕司君、二男守夫君あり。長女知壽子嬢は、名古屋石黑家に嫁せり。

常に公益優先の實を示しつゝある氏が、鄕黨の間に信望高き、洵に所以ありと言ふべし。

私立桑名病院々長

緒綬褒章受賞者

竹村榮太氏

明治八年九月一日生
桑名市桑名四〇九

略歷

氏は長野縣諏訪郡永明村に生る。明治二十五年縣立長野尋常中學校に入學。同二十七年優秀の成績を以て卒業するや、法學を以て身を立てんことを志し、明治二十九年九月金澤なる第四高等學校大學豫科文科に入學、孜々として勉學に怠りなかりしが、感ずるところあり文科に在ること一ケ年にして至三十年九月第三部醫科に轉ず。蓋し氏の性格として仁術な

私立桑名病院々長

紺綬褒章受賞者

竹村榮太氏

明治八年九月一日生
桑名市桑名四〇九

略歴

氏は長野縣諏訪郡永明村に生る。明治二十五年縣立長野尋常中學校に入學。同二十七年優秀の成績を以て卒業するや、法學を以て身を立てんことを志し、明治二十九年九月金澤なる第四高等學校大學豫科文科に入學、孜々として勉學に怠りなかりしが、感ずるところあり文科に在ること一ヶ年にして翌三十年九月第三部醫科に轉ず。蓋し氏の性格として仁術なる醫を以て身を立つるを、寧ろ潔しとなしたるに據るべし。

明治三十三年七月第四高等學校を卒業、同年九月東京帝大醫科大學に入學す。四ヶ年にわたる螢雪の功空しからず、同三十七年十二月、最高の學を習得して卒業、翌年一月醫科大學副手として附屬病院に勤務、更に斯學の蘊奥を究むると共に、臨床醫學を研鑽しつつ他日を期せり。

明治三十八年四月十四日醫術開業免狀下附せられしも、恰も日露戰役の終末期に當り、銃後の經營諸般にわたりて尚繁忙を極め、醫術方面の人的資源を充たすの必要に迫られしかば、氏も同年六月より二ヶ月間を陸軍病院戸山分院に勤務して、白衣勇士の傷痍治療に、奉仕的赤誠を捧げたり。氏の二ヶ月に餘るこの貴き經驗は、後氏が醫術を開業するに及んで常に滅私的仁慈を以て患家に對する、典型的態度の素地を成すものと謂ふべく、時局下にありて當時を追懐する氏の感慨また深きものあるを想ふべし。

明治三十九年大學副手を辭し、開業の地を桑名市と定め、私立桑名病院を設立、自ら院長となりてこれを主宰するに至れり。

理想的なる刀圭家は、其の學識の深遠なると共に臨床醫學に長じ、しかも仁愛の情に富むものなり。學識深遠なるも臨床醫學に乏しく、仁愛の情に富むも學識を缺くを常とする中にありて、氏の如きは洵に得難き刀圭家にして、學識其の蘊奥を究め、臨床また經驗豐かに、仁慈の情に至りては氏に匹敵するもの稀なり。

昭和十一年三月、長野縣諏訪郡永明村奬學資金として、東邦電力株式會社株式額面壹萬圓、並に同永明小學校へ兒童百科辭典參拾卷を寄附せし廉に依り、同年十一月十六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

續稅審査、有限責任一宮市民信用組合教育部、一宮市産業振興審議會各委員、大谷派本願寺會計評議員等の公職に就き、寢食を忘れて日夜之に奔走盡瘁しつゝあり。

公共、公同の念に厚く、昭和十三年三月、國道十二號線道路改築工事費として、金一萬三千九百六十三圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年十二月十四日、勅定の紺綬褒章を賜ひ、其篤行を表彰せられたる外、縣立一宮商業學校建築費として、金壹萬圓、第三小學校講堂、第五小學校奉安殿及第二保育園建築費として金五千圓、日本赤十字社、海員救濟會、海軍協會及警察後援會に、金七千圓を寄附せり。其他各種公益事業に賞賛して、之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進したること、枚擧に遑あらず。

家處には母堂みさ刀自、とう夫人、長男耕司君、二男守夫君あり。長女知壽子嬢は、名古屋石黒家に嫁せり。

常に公益優先の實を示しつゝある氏が、鄕黨の間に信望高き、洵に所以ありと言ふべし。

株式會社安藤商店取締役、京都株式取引所取引員

精緻寫眞壹葉受贈者

高橋宗太郎氏

明治十九年十月生
名古屋市東區白壁町二ノ八

略歷

青雲にして身を株式界に投じ、乾坤一擲の勝負を爭ひ、戰ふ毎に克く捷を制して、中京の實界に進軍將軍の名を擅にし更に京洛の地に進出して業界の一角に雄飛するもの、之を高橋宗太郎氏其人と爲す。

當家は現代を以て四代を數へ、先代は大垣に於て燈草製造を業としたるも、燈草專賣制度の施行により廢業す。氏は明治十九年十月を以て、先代宗助氏の長男として大垣市に生れ大正七年家督を相續す。夙に商業に志し、明治四十四年名古屋市に出でて、身を投機界に投ず、時に年齡僅に二十六歲なりき。機略縱橫にして商才に富める氏は、戰へば必ず勝ち、攻むれば必ず取るの概を以て、市場を風靡し、名古屋株式界に於ける一大勁敵として、敵手を悄伏せしむ。爲くて夏に大正七年京都取引所取引員の免許を受け、遂く馬を此地に進めて、玆に又飛將軍の名を轟かせり。爾に名古屋信託株式會社の創立せらるゝや、其監查役に擧げられ、更に名古屋市中區榮町に株式會社安藤商店の新組織に改しては、取締役に推され、後社長に進みたるも、其後組織の變更に當りて社長を辭し、顧問兼同商店の最高幹部として靈妙なる手腕を揮ひ、同商店をして益々隆昌に向はしめつゝあり。

往年名古屋市が工業の發展に伴ひ、人口の增加著しく、住宅難の聲起るや、七十戶の貸家を新築し、建築費を度外したる安價を以て貸與へ、爾後一回も値上を行はず、卷間其借家を三圓五十錢長屋と稱するに至れり。爾も昭和三年の大典記念として、更に三割方の家賃値下を斷行して市民を驚然たらしめたりき。又貧困なる家庭の子弟に、學費を給して其の志望を遂げしめたる者尠からず。最に中京の地に洋畫趣味の普及せざるを憾み、土地及建築費を寄附し、同市鶴ケ丘の高地に一大洋畫研究所を建設し、洋畫研究に志あるものには、自由に之を利用せしめ、毎年其經費を支出しつゝあり。

昭和三年八月大垣市立圖書館建築費として金五萬圓を寄附し、同年九月廿四日勅定の紺綬褒章を、又同四年十一月同館資金として金一萬圓を寄附し、同五年二月十八日同館版一箇を夫々下賜せらるゝの光榮を擔へり。

日本燈草株式會社參與職等、名古屋商工會議所議員、
同商船部長

精緻寫眞壹葉受贈者

高橋正彦氏

明治二十一年五月七日生
名古屋市西區南鳥町一ノ二二

略歷

青雲僅に二十八歲にして、名古屋米穀取引所理事の要職に就きて以來、高朗なる人格と縱橫の商才を以て、漸次各方面に地歩を占め、今や中京業界の偉大なる存在として、重きを爲せるもの、之を高橋正彦氏と爲す。

日本米穀株式會社參與理事、名古屋商工會議所議員、
岡商業部長

紺綬褒章受賞者

高橋正彦氏

明治二十一年五月七日生
名古屋市西區和泉町一ノ二二

略歴

青雲僅に二十八歳にして、名古屋米穀取引所理事の要職に就きて以來、高朗なる人格と縱横の商才を以て、漸次各方面に地歩を占め、今や中京業界の偉大なる存在として、重きを爲せるもの、之を高橋正彦氏と爲す。

先代彦太郎氏は多年名古屋米穀取引所理事長として又多數の會社重役として、明治、大正、昭和の三時代に亘り、中京財界の一重鎭と謳はれ、嘖々の盛名を馳せたる人材なりき。氏は其次男として、明治二十一年五月七日を以て生る。學序を經て慶應大學に學び、同四十四年優秀なる成績を以て理財科を卒業す大正四年一月名古屋米穀取引所理事に就任し、次で理事長の要職に推され、其間大正八年取引所の大增資を斷行し、更に昭和二年市場事務所の移轉を實現して、業界に不朽の事績を貽し、現時八勝倶樂部、名古屋ゴルフ倶樂部各株式會社取締役、愛知電鐵、三重瓦斯各株式會社監査役、日本放送協會評議員として縱横の活躍を爲しつゝあり。氏が今日まで關係せる會社及事業は數十の多きに上れり。大正十三年十月以來名古屋商工會議所議員に推され、爾來引續き重任、現時商業部長として、同地經濟產業に多大の貢獻を爲し、又名古屋三田會其他各社交倶樂部に出入し、此方面にも花形として推重せらる。

公共公同の念顧る厚く、多年社會事業其他に盡瘁する所尠からず。昭和二年十月官幣大社熱田神宮神馬合經費として、金一萬圓を寄附したる廉により、其功を賞せられて、同年十一月十一日勅定の紺綬褒章を下賜せられ、寵門の榮譽を輝かせり。

資性溫厚篤實にして、特に敬神の念に厚く、熱田神宮に日參すること數十年の長きに及び、競馬烈日の日と雖も、一日として之を怠りたること無し、以て其忠誠なる風格の一端を窺見すべし。又頗る趣味廣くして、長唄ゴルフ、野球等各方面に亘り、特に書畫骨董の鑑識に至りては、既に專門家の域に達せるものありと稱せられ、隨つて蒐集する所の珍什名器の類亦尠からず。

率公、敬神の念厚き氏の如き、寔に衆氏模範たるに足るものありと言ふべし。

し、爾來岡商店の最高幹部として靈妙なる手腕を揮ひ、同商店をして益々隆昌に向はしめつゝあり。

往年名古屋市が工業の發展に伴ひ、人口の增加著しく、住宅難の擧起るや、七十戸の貸家を新築し、建築費を度外したる安價を以て貸與へ、爾後一回も値上を行はず。巷間其借家を三圓五十錢長屋と稱するに至れり。而も昭和三年の大典記念として、更に三割方の家賃値下を斷行して市民を驚然たらしめたりき。又貧困なる家庭の子弟に、學資を給して其の志望を遂げしめたる者尠からず。曩に中京の地に洋畫趣味の普及せざるを憾み、土地及建築費を寄附し、同市綠ケ丘の高地に一大洋畫研究所を建設し、洋畫研究に志あるものには、自由に之を利用せしめ、毎年其經費を支出しつゝあり。

昭和三年八月大垣市立圖書館建築費として金五萬圓を寄附し、同年九月廿四日勅定の紺綬褒章を、又同四年十一月同館資金として金一萬圓を寄附し、同五年二月十八日同館版一箇を夫々下賜せらるゝの光榮を擔へり。

元埼玉縣大里郡々會議員、同吉見村々長、農谷製絲株式會社々長、忍貯蓄銀行取締役、農業

紺綬褒章受賞者

故 長島甚助氏

元治元年八月生
埼玉縣大里郡吉見村大字小八林

略歴

農業を營む傍ら常に地方自治の發展、地方産業の伸展に盡瘁して多大の治績をのこしたるわが長島甚助氏は元治元年八月埼玉縣大里郡吉見村大字小八林に生る。長島家は世々農を業となし、夙に名家として盛名あり。氏また名家の子息たるに恥ぢず、幼にして英才の誉高く、學業群萬を拔き、鄕黨其の將來を囑望するところ多大なりき。

氏學業を卒へ家業に就くや、精勵克く先考を扶けて家運を興隆せしめ、家名をしてますます盛んならしめたり。氏はまた家業に專念する傍ら深く意を自治の發展と産業の振興に用ひ、兼に卒先して幾多の事業を起し、地方發達の基礎確立に多大の功績あり、人望自らあつまりて推されて埼玉縣大里郡吉見村々長の要職に就くや、滅私の至誠を披瀝して村政運營の任にあたり、村治の面目を一新せしめて、民數の向上を遂げしめ。村民の福利を增進せしむるに與つて力あり、更に選ばれて大里郡々會議員となるや卓拔せる識見抱負を開陳して郡治刷新に偉大の功績あり。常に衆庶を指導啓發して倦むところを知らず、埼玉縣下にありて大里郡が優位にあるを得るは、氏の不斷の努力に負ふところ多し。氏は實に地方自治の發展擴作に寄與せしのみならず、熊谷製絲株式會社の設立に參加し、同社成立とともに社長たり、其の重責に仟ずること久しきにわたり、縣下製絲業界に君臨して斯業の發展に裨益したるところまた鮮少ならず。更に地方産業の發達に重大關係ある金融の圓滑を期するため、金融業界の機構に參與し、忍貯蓄銀行取締役りしこと多年に及び、あるひは支店長として直接大衆に接して金融業界の使命の達成に奔命の努力を投ずると共に、勤儉貯蓄の精神を昂揚して蓄財の美風を普及徹底せしむる等、同地方における先覺者として、其の治績輝しきものあり。昭和九年八月歿す。

大正十五年十二月大里郡熊谷町道路敷地として土地二畝十八歩を寄附せし廉により、昭和六年十一月二十六日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主恭勳氏は氏の二男、多額納稅者たり。

株式會社長野鐵工團理事兼取締役、株式會社石鼎可會社取締役、社本可會社會長所主、可會、相當會

紺綬褒章受賞者

辻本新三郎氏

明治十八年十二月十九日生
大阪府南河內郡長野町長野三六四

氏は大阪府南河內郡長野町辻本松太郎氏の長男に生る。生地の近鄰は、產業の盛地に富み、一木一草と雖も、これを怠せにせざるの風習は、素朴にして質卒なる民風となり、敎育普及の美風に導く。文明開化の風波の餘只中にありても、克く古來傳統の醇風を繼承して、府下における獨特の地域をさせり。

株式會社長野精機工業所專務取締役、株式會社石橋可鍛鑄鐵所取締役、辻本可鍛鑄鐵工業所主、可鍛鑄鐵業

緑綬褒章受賞者

辻本新三郎氏

明治十八年十二月十九日生
大阪府南河内郡長野町長野三六四

氏は大阪府南河内郡長野町辻本松太郎氏の長男に生る。生地の近隣は、皇陵の聖地に富み、一木一草と雖も、これを忽せにせざるの風習は、素朴にして眞率なる民風となり、敬神崇祖の美風夙に薄く、文明開化の風波の眞只中にありても、克く古來傳統の醇風を繼承して、府下における獨特の地域をなせり。

土地また豊饒にして、農産物豊かなる中にも、特に各種果實の良質なるものを産し、長野の名は府民に親しまるゝこと既に久し。

環境が人間の成育に甚大なる關係あることは論を俟たず。土地風土の環境に影響するところ極めて甚大なるは當然なり。長野に長れ長野に育ちたる氏に、一見長者の風あるは蓋し環境がしからしめたるものと謂ふべきか。

氏は幼にして工をもつて身を起さんと志し、朋輩依友の多くが或ひは商に、或ひは農に志して工を顧みざるを慨嘆し、都かに期するところありたるが、郷土愛の熱烈なる氏は、近きに大工業都市として日進月歩の關連を途げつつある大阪を眺めつつも郷關を出づるを好まず、專ら祖先發祥の地たる長野に踏みとゞまりて、將來大いに成すあらんことを期せり。

この篤志にして清純なる氏の郷土愛こそ、氏の全人格たりまた事業愛の源泉をなすものと謂ふべく、氏の事業が年々歳々驚異的進展を遂げ、今日の大を成し得たるは氏の郷土を愛する熱情の賜と謂ふも過言にあらざるべし。

終始一貫初志を貫徹するは凡庸の意志を以てしては、到底成し得ざるところ。氏もまた郷土を愛するの熱情と鐵石にも比すべき意志とをもつて今日を築き上げたるものにして、立志傳中の人たるは勿論、意志の人としても亦大いに推賞すべきなり。

大正八年十月より現地において可鍛鑄鐵業を營む。海外輸出景氣するに及んで更に期するところあり、昭和十四年株式會社長野工業所を創設して專務の要職にあつてこれを主宰する傍ら株式會社石橋可鍛鑄造所取締役たる氏の、時局即應的活躍は期して待つべきものあり。

昭和十四年三月長野町公益事業奬勵基金として金壹萬圓寄附の擧により、同年八月二十二日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

は、氏の不斷の努力に負ふところ多し。氏は常に地方自治の發展振作に寄與せしのみならず、熊谷製絲株式會社の設立に參加し、同社成立とともに社長たり、其の重責に任ずること久しきにわたり、縣下製絲業界に君臨して斯業の發展に裨益したるところまた鮮少ならず。更に地方産業の發達に重大關係ある金融の圓滑を期するため、金融業界の樞機に參與し、忍貯蓄銀行取締役りしこと多年に及び、あるひは支店長として直接大衆に接して金融業界の使命の達成に奔命の努力を投ずると共に、勤儉貯蓄の精神を昂揚して蓄財の美風を普及徹底せしむる等、同地方における先覺者として、其の治績輝しきものあり。昭和九年八月歿す。

大正十五年十二月大里郡熊谷町道路敷地として土地二畝十八歩を寄附せし廉により、昭和六年十一月二十六日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主恭助氏は氏の二男、多額納稅者たり。

地主

緑綬褒章受賞者

故 中戸川平太郎氏

安政二年三月十八日生

緑綬褒章受賞者

故 中戸川秀一氏

明治二十年九月二十日生
東京市渋谷区猿楽町七ノ一八七九

故中戸川平太郎氏は神奈川県高座郡栗原村に生る。夙に北海道開拓を志し、明治十二年渡道して釧路の地に居を定め、初志の貫徹に刻苦精勵、幾多の艱難を克服し、遂に北門開拓者として不滅の功績を遺せし逸材なり。

氏の渡道當時における釧路は、なほ地方の一寒村たるに過ぎざりしが、氏は先づ荒蕪地の開墾に従事し、開墾なるや農作物を試作して土地を豊饒ならしめ、進んで地をもとめて小牧場をも營むの堅實方針を採りしかば、業漸漸次發展され、遂に多額納税者の域に達するに至れり。

天資温厚にして篤實なりし氏は、曾に家業に精勵するにとどまらず、常に意を北海道開拓に用ひ、其の功績顯著なるものあり。就中函館釧路間の交通機關施設の緊要なるを痛感したる氏が巨費を投じて汽船釧路丸を建造し、定期航路を開設して利便に供したるが如きは北海道開拓史を飾る佳話にして滅私的至誠を披瀝して公共の利益を圖らしたる氏の功績は、永久に沒すべからざるものありと謂ふべし。

大正九年二月釧路高等女學校建設費として金壹萬圓を寄附せし廉に依り、同十一年十一月三日勅定の緑綬褒章を賜はの光榮に浴す。

大正十二年十一月逝く。享年六十九。

故中戸川秀一氏は氏の長男。大正四年北海道帝國大學水産科を卒業。東京工業試驗所に勤務。大正十一年外國留學中に父君の喪に遭ひ、同十二年歸朝して家督を相續、家業を營むる傍ら居を東京に移して醸成化學の研究に沒頭せしも、昭和八年前途多望な壯年を以て逝く。享年四十七歳。

昭和三年十二月釧路市道路敷地として土地二町六段七畝弐拾五歩價格拾七萬圓を寄附せし廉に依り、同四年五月十七日勅定の緑綬褒章を賜はの光榮に浴す。

當主中戸川吉二氏は氏の令弟。令兄歿後家督を相續、かつて創作『イボタの虫』を發表し、其の鬼才を嘱はれしは人の知るところなり。

緑綬褒章受賞者

洋田勝五郎氏

明治二十年九月四日生
大阪市西区立賣堀北通六ノ九

職歴

業被服業界に於ける功績の多大なるを以てして、今や疑ふべからざる地歩を占め、斯界に偉大なる足跡を印しつゝあるもの、之

の光榮に浴す。

大正十二年十一月逝く。享年六十九。

故中戸川秀一氏は氏の長男。大正四年北海道帝國大學水産科を卒業、東京工業試驗所に勤務。大正十一年外國留學中に父君の喪に遭ひ、同十二年歸朝して家督を相續、家業を督する傍ら居を東京に移して寫眞化學の研究に沒頭せしも、昭和八年前途なほ春秋に富むの身を以て逝く。享年四十七歳。

昭和三年十二月釧路市道路敷地として土地二町六段七畝貳拾五歩價格拾七萬圓を寄附せし廉に依り、同四年五月十七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主中戸川吉二氏は氏の令弟、令兄歿後家督を相續、かつて創作『イボタの虫』を發表し、其の鬼才を謳はれしは人の知るところなり。

津田勝五郎氏

株式會社津田勝五郎商店社長、大阪鋼材株式會社取締役副社長、日本鐵屑統制、栗本鐵工所、富水鋼業、明正紡績各株式會社取締役、鞍山鋼材株式會社監査役、大阪鐵商同業組合長

紺綬褒章受賞者

津田勝五郎氏

明治二十年九月四日生

大阪市西區立賣堀北通六ノ八

略歴

泰城鐵業界に於ける屈指の老舗として、牢乎拔くべからざる地歩を占め、斯界に偉大なる足跡を印しつゝあるもの、之を津田勝五郎氏と爲す。

當家先考は伊豫松山の人、夙に東京に出で船具商川崎正藏氏の店舗に入り、後年神戸に川崎造船所の創立せらるゝや、引續き同所に職を奉ずること年あり。明治二十年職を退き、英人リーネル氏と共同船具商を開始し、同二十二年獨力海軍用達商を經營、二十八年本店を大阪に移し、專ら鋼鐵類の輸入販賣業を營み、大正四年有志と共に大阪製鐵株式會社を創立し、選ばれて社長に就任す。其間郷里松山市に財團法人津田育英救濟會を創立、更に大阪市に財團法人佛教奉仕會を設立し之が會長として晩年を社會奉仕に捧げ、昭和九年八十歳を以て死去す。洵に當世稀に觀るの人格者なりき、當主勝太郎氏は先代の長男、明治廿年九月四日を以て生れ、大正十年家督を相續し、前名與一を改め襲名す。夙に大阪高等商業學校に學び、先代隱退の後其業を繼ぎ、津田勝五郎商店社長たる外、頭記各會社の重役として、關西業界に重きを爲し、昭和九年六月以來大阪鐵商同業組合長の任に在り。津田勝五郎商店は大正七年從來の個人經營を株式會社に變更したるものにして、昭和十一年大阪鐵商界の主たる三商店と共に、大阪鋼材株式會社を創立し、從來の主要商品たる一般鋼材は同社に於て取扱ふことゝなり、又昭和十年三月株式會社津田銑鐵鋼管商會を設立したるも、同十四年八月津田勝五郎商店に併合し、現在同社は鋼類、特優鋼板、銑鐵、鋼管類を專業とするに至り、優良なる業績を擧げつゝあり。

公共の念頗る厚く、昭和十一年九月日本赤十字社大阪支部事業費として金一萬圓を寄附せし廉により、同十二年十月十六日勅定の紺綬褒章を下賜せらる。其他社會公益の爲に私財を投じたること尠からず。

氏は運動競技に趣味を有し、明朗豁達なる人格者として、各方面より景仰せらる。

貴族院議員、多額納稅者、熊本實業團體聯合會會長、熊本銀行協會會長、日本鐵糸中央會議員、熊本市會議員、各種會社重役等。熊本縣郡市協會理事、株式會社長野製繩所長

紺綬褒章受賞者

長野忠次氏

明治六年十二月三十日生
熊本市大江町九品寺六〇五

略歴

長野家は清和源氏の末裔、第三代六孫王經基始めて源姓を賜ふ。第五代頼親は多田滿仲の第二子にして鎮守府將軍源頼光の弟たり。第六代頼房以降大和國に住したるにより、予孫大和源氏と稱す。第八代頼治は長野家中興の祖なり。

氏は滯平氏の四男、熊本に生る。明治三十年分家して一家を構つ。

先考滯平氏は夙に横井小楠に師事して實學を講じ、明治の初年實業本邦主義川侯に進白して、藩領内十個所に養蠶試驗所を設置せしめ、熊本藩下養蠶業の礎を築けり。爾來自らも養蠶製絲を家業とし斯業に精勵し、業界の興隆を助長促進せしめ、其の功勞著なるものあり、勅定の紺綬褒章を賜ひ顯彰せらる。滯平の嗣子即ち忠次氏の長兄關吉氏また父業を扶け明治二十七年四月早くも熊本製絲株式會社を創設し、斯業の發展に盡瘁するところ鮮からず、先考についで更にまた紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

忠次氏は令兄關吉氏が專ら製絲方面に活躍するや、蠶種の改良繁殖の普及に努め、研鑽怠らず遂に優良品種を續出して養蠶經濟に革命的影響を齎らしたるのみならず、桑園の改良桑樹保護の改善蠶室の貯藏法につきても多大の成果を收め、蠶種早生の餘を防ぎ、其の病毒の根絶を遂成せしがごときは特筆すべき功績なり。

氏は天性愛育にして剛毅、父業を繼ぎて活躍を開始するや衆望囂ちあつまり、壯年にして早くも斯界の先覺者を以て遇せらるゝに至り、長兄關吉氏と相携へて斯業に雄飛するざまは實に勇壯の的なりき。

明治三十一年合名會社長野製絲組を創設して社長と改め、社業の運營宜しきを得て業容益々擴大するや、大正十一年二月株式會社に組織を變更、精々業績を擧げて益に多額納稅者の列に加はり、貴族院議員に推さる。

氏はまた公人として社會公共事業に盡瘁し公利公益を率先躬行して衆に範たるを期しつゝあり。善行夥からず。

昭和三年十月二十七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す

紺綬褒章受賞者

中川德右衛門氏

明治八年六月十二日生
京都市下京區新開町

略歴

京洛有數の國寶として知らるゝ中川家は、實に小路時代より連綿と續き、代々角鹿右衛門を稱ふ。六條三哲町の建物も明治初年以來所有地たり。現在

京都府多額納稅者、角屋

紺綬褒章受賞者

中川德右衛門氏

明治八年六月十二日生
京都市下京區新屋敷揚屋町

略歷

京洛有數の舊家として知らるゝ中川家は、萬里小路時代より現業を營み、代々角屋德右衛門を襲ふ。六條三筋町の遺跡今猶新町通五條下るに在りて、現に當家の所有地たり。現在の地に移りしは、今を距る二百八十有餘年の昔にして創業以來島原の變遷と共に推移しつゝ、連綿十一世を經て當代に至る。角屋は亭樹今尙往時の夢を語り、樓屋依然として舊態を存し、古色蒼然として、洵に拘すべきものあり。德川時代建築物の一樣式を代表し、其研究に重要なる資料を供するものありと稱せらる。

氏は先代德右衛門の長男として、明治八年六月十二日を以て生れ、同三十六年家督を相續し、前名松次郎を改め襲名す。明治四十三年選ばれて京都市會議員となり、又大正四年より三期に亘りて京都府會議員に擧げられ、其間府參事會員及び都市計畫京都地方委員、森林會議員、土地收容審査員に就任す。明治三十九年以來學區會議員、學務委員、同議長として居住學區の爲に盡瘁する所尠からず。又小作爭議、借地借家各調停委員として公事に寄與する所頗る大なり。

公共公同の念に厚く、小は町內府市の問題より、大は國家社會の事に及ぶまで凡そ公益に關するものには、常に挺身奔走し、曩に明治三十二年京都鐵道の開通に際し、市內西南部の發展を期して、隣接所有地七百餘坪を寄附して停車場を建設せしむ。是現在の山陰線丹澤口驛なり。其他學校病院等の新築增築、神社佛閣の創建再建等に際しては、卒先力を致し、或は私財を寄附して、其計畫を贊助したること枚擧に遑あらず。大正八年恩賜財團濟生會に、金一萬圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられて、勅定の紺綬褒章を下賜せられ、更に昭和三年京都市大典奉祝事業費として金一萬圓を寄附し、紺綬褒章飾版を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

資性溫厚篤實にして、頗る社交に長じ、其人に接するや懇切を極め、恰も春風面を吹くの感あらしむ。而も頭腦明敏にして、事理に通ぜり。家業は悉く擧げて夫人に委ね、一意專心公事に盡瘁し、其國家社會に貢獻する所の甚大なる、洵に當代稀に觀る忠誠有德の君士人と稱すべし。

蠶業經濟に革命的黎明を齎らしたるのみならず、桑園の改良桑樹保護の改善蠶種の貯藏法につきても多大の成果を收め、蠶種早生の弊を防ぎ、其の病毒の根絕を達成せしがごときは特筆すべき功績なり。

氏は天性堅實にして剛毅、父業を繼ぎて活躍を開始するや衆望忍ちあつまり、壯年にして早くも斯界の先覺者を以て遇せらるゝに至り、長兄關吉氏と相携へて斯業に雄飛するさまは業界羨望の的なりき。

明治三十一年合名會社長野製種組を創設して社長となり、社業の運營宜しきを得て業容益々擴大するや、大正十一年二月株式會社に組織を變更、着々業績を擧げて遂に多額納稅者の列に加はり、貴族院議員に推さる。

氏はまた公人として社會公共事業に沒頭し公利公益を卒先躬行して衆に範たるを期しつゝあり。善行尠からず。

昭和三年十月二十七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す

日本赤十字社特別會員、篤志看護婦人會久留米分會評議員會幹事、愛國婦人會國防文部評議員、愛國婦人會久留米市分會副會長

篤志看護婦表彰受賞者

氷室クラ刀自

明治十四年六月十五日生
國防婦人會久留米市鳥屋町十九番地

略歴

夙々たる一婦人の身を以て、國家事公に烈々たる赤心を捧げ、各種の公共事業に盡瘁して、或は東奔西走到らざるなく、或は私財を投じて之を賞くる等、公益優先の實を示しつゝあるもの、之を氷室クラ刀自と爲す。

茲に氷室家の由緒を溫ぬるに、抑々當家は筑後國星野城主星野家の勤請に依り、今を距ること遙々七百年の昔、嘉祿年間に於て、當祖氷室得三郎紀州熊野より、熊野權現の分靈を奉じて、筑後國星野村に來り、同地に室山神社を創建し、代々其神官として今日に至れるものにして、現主を以て實に三十二代を算す。當家は實に學問分家して久留米に定住、一家を成せるもの、初代伊八より、現戸主勘次に至るまで、七世の關連綿として此地に在りて商業を營む。祖父を伊左衞門、父を虎吉と呼ぶ。刀自は即ち先考虎吉の二女として、明治十四年六月十五日、現地に氣々の聲を擧ぐ。資性溫良眞摯にして、克く婦道に徹し、耐も國家事公の念に富み、日本赤十字社特別會員たる外、篤志看護婦人會久留米分會評議員幹事愛國婦人會國防部支部評議員、愛國婦人會久留米市分會副會長に推され、熱誠を傾けて會務に勢勵し、多大の貢獻を爲しつゝあり。

昭和六年九月、愛國婦人會國防支部資金として、金一萬三百圓を寄附したる處に依り、其功を賞せられ、同七年一月十五日、勅定の錦綬賞章を下賜、其德行を表彰せらる。其他各種の公益事業に私財を投じ、又神社佛閣に禮財を寄進したること枚擧するに遑あらず。

刀自の令弟氷室太助氏は、先代虎吉の長男として、明治十六年十二月を以て生れ、大正十一年家督を相續す。魚類乾物商を營み、同地第一流の商賈として重きを爲せり。現時久留米魚市場株式會社取締役に推され、又久留米商工會議所常議員として、地方商工業の爲に盡瘁しつゝあり。

家庭には令姉クラ刀自の外、令弟勘次氏あり。刀自の如き、洵に當代婦人に親る有德の婦人と稱すべし。

佐賀市、長崎市、熊本市、鹿兒島

仲買業者指定販賣者

辻利右衞門氏

弘化元年五月二十四日生
京都府宇治町小倉

略歴

宇治と言へば茶を思ひ、茶と言へば宇治を偲ぶ。斯の如く宇治が茶の名所として、或名を江湖に馳するに至りたるは、其地味氣候が栽培に適するものあるに由るべしと雖も、製茶

從六位、產業功勞者、製茶業

緑綬褒章受賞者

故 辻 利右衛門氏

弘化元年五月二十四日生
京都府久世郡宇治村紗

略 歴

宇治と言へば茶を思ひ、茶と言へば宇治を偲ぶ。斯の如く宇治が茶の名所として、盛名を江湖に馳するに至りたるは、其地味氣候が栽培に適するものあるに由るべしと雖も、製茶の技術に於て、長年月に亘りて苦心研究を積み、其改良進歩を遂げしめたる人々の功績與つて大なるを忘るべからず。而して故辻利右衛門氏の如き、實に其尤なるものと言はざるべからず。

氏は弘化元年五月廿四日、山城國久世郡宇治鄕に生る。幼時家計豊ならず、僅に九歳にして、京都伊藤太に丁稚奉公す。十一歳時鄕里に歸り、養蚕の傍、餅屋を業とせし兩親を援く。萬延元年偶々茶畑三反歩を購ひ、玆に初めて茶業家として立つに至る。時に年僅に十七歳なりき。後又、宇大門の茶畑を買收す。最後に大門の銘を以て發賣したる記念の玉露畑たり。

抑、宇治茶業は徳川幕府より厚き保護を受け、製茶家は御物御茶師、御袋茶師、御通茶師等の格式を設け、又御茶壺の儀式等ありて頗る隆盛なりき。然るに維新の變革は、之等從來の格式儀禮等を根底より破壊し盡せしのみならず、碾茶の如きは顧るもの無きに至り、爲に由緒深き宇治茶業も、將に絶滅せんとするの危機に際會するや、氏は之を痛感するに忍びず、年少の身を以て卒先之が挽回を企圖し、茶園の土壌調査を始め、餅作施肥、摘採の選擇、蒸熏の加減、焙爐上の加工等に精密なる研究を遂げ、遂に新時代に適合する製品玉露茶の完成を見るに至る。本品は光澤純美、香味豊潤なる優秀品にして、素より製茶界の王者たり。茲に於て氏は、其製法を公開すると共に、技術者を養成し、以て玉露茶の生産増加を圖り、新販路の開拓に盡せり。爾來其の製品は好評嘖々、各地の博覧會等に於て、優良品として推賞されざるは無かりき。又宇治町、農會等より屢々表彰せられ、昭和二年八月十九日産業に盡したる功勞顯著なりとして、勲定の緑綬褒章下賜の光榮に浴せり。

昭和三年一月八日、八十五歳の高齢を以て逝く。洵に悼むべしと雖も、氏が宇治茶の改革を遂げ、其命脈を確保したる功績の偉大なる、斯業の恩人として、其歴史と共に、永く消えざるべし。

愛國婦人會福岡縣支部評議員、愛國婦人會久留米市分會副長に推され、熱誠を傾けて會務に鞅掌し、多大の貢献を爲しつゝあり。

昭和六年九月、愛國婦人會福岡支部資金として、金二萬三百四圓を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同七年一月十五日、勅定の紺綬褒章を下賜、其徳行を表彰せらる。其他各種の公益事業に私財を投し、又神社佛閣に淨財を寄進したること枚擧するに遑あらず。

刀自の令弟氷室太助氏は、先代虎吉の長男として、明治十六年十二月を以て生れ、大正十一年家督を相續す。魚類乾物商を營み、同地第一流の商賈として重きを爲せり。現時久留米魚市場株式會社取締役に推され、又久留米商工會議所常議員として、地方商工界の爲に盡瘁しつゝあり。

家庭には令姉タヶ刀自の外、令弟勘次氏あり。刀自の如き、洵に當代稀に覩る有徳の婦人と稱すべし。

元代々水幡ヶ谷村戸長、同村會議員、町會議員

紺綬褒章受賞者

中村平三郎氏

嘉永六年一月三日生

東京市淀谷區幡ヶ谷笹塚町一、一〇三

略歴

大東京市が今日の偉大さを成すに至る迄には數次にわたりて、大々的なる町村合併が斷行されたるは人の知るところなるも、町村合併の裏面にありて犧牲を拾て公益につきたる人物の多々あるを知らず。

わが中村平三郎氏の如きも、大東京建設の礎石となりたる一人にして、其の功績洵すべからざるものあるのみならず、多年にわたりて自治行政に參與したる功勞また多大なり。

都市の町村合併問題は、各々其立場を異にするに從つて、利益も亦大いに異なり、しかも情實多く伴ひて必要に迫られながらも容易に其の實現を見ることの容易にあらざることは多くの事例に依りて明らかなり。

殊に東京市の豊島、荏原、豊多摩兩郡の東京市編入町村合併問題は、全國稀れに見るの難問題なりき。

大都市への合併に依りて、負擔加重を危惧するは被合併町村民の通例にして、町村將來の發展を圖慮せざるは一般の傾向なり。此間に處して克く町村民を併發指導し、小乘的見解を揚棄せしめ、以て大乘につかしめ子孫百年の大計を樹てしむるに、充分なる理解と納得を得せしむることは、容易の業にあらず、衆望を擔ふの徳望と、自治政治に多年の經驗を有する者にあらざれば、到底これを達成し得るものにあらず。

中村氏は幡ヶ谷笹塚に生れ、明治八年早くも南豊島郡幡ヶ谷村地租改正係を命ぜられ、明治初期に於ける土地整理、稅制整備に貢獻したるところ尠からず、明治十九年代々木幡ヶ谷戸長を拜命す。

これより先き明治十一年村會議員に推されたるを第一歩として、大正十四年に至る迄、實に四十有餘年間村會議員、學務委員、町會議員、小學校後援會長たり、所謂地方の長老として其の地百般の部門に參與して、開發發展に盡し、信望を一身に纏む。

東京府知事より六回、東京市町村會長より三回自治功勞者として表彰されたること枚擧に遑あらず。

昭和三年四月町村道路敷地として土地八百七十餘坪價格金參萬貳千貳百餘圓を寄附したる厚に依り、同五年一月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

土曾德太ゝメント組

紺綬褒章受賞者

東谷種槻氏

明治二年九月二日生

住所 宇都市大字小串

營業所 宇都市區區百町

略歴

山口縣宇部市は、近代各種工業の勃興と共に、急速なる發展を遂げたる代表的都市にして、今日の隆盛活躍なる市勢を

谷村地租改正係を命ぜられ、明治初期に於ける土地整理、税制整備に貢献したるところ尠からず、明治十九年代々木幡ケ谷戸長を拜命す。

これより先き明治十一年村會議員に推されたるを第一歩として、大正十四年に至る迄、實に四十有餘年間村會議員、學務委員、町會議員、小學校後援會長たり、所謂地方の長老として其の地百般の部門に參與して、開發發展に資し、信望を一身に鍾む。

東京府知事より六回、東京市町村會長より三回自治功勞者として表彰されたる外功勞を顯彰されたること枚擧に遑あらず。

昭和三年四月町村道路敷地として土地八百七十餘坪價格金參萬貳千貳百餘圓を寄附したる廉に依り、同五年一月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

土管煉瓦セメント業

紺綬褒章受賞者

東谷種槌氏

明治二年九月二日生

住所　宇部市大字小串

營業所　宇部市西區朝日町

略歴

山口縣宇部市は、近代各種工業の勃興と共に、急速なる發展を遂げたる代表的都市にして、今日の隆盛活潑なる市勢を觀て、此地が僅々數十年以前まで、蕞爾たる一寒村に過ぎざりしに想ひ至れば、寔に隔世の感轉た禁ぜざるものあり。此急速なる土地の發展は、素より同地が、各種の工業資源に富み、海陸交通の要衝に當れる地理的關係等、幾多の好條件を具備せることに由る所多きを否むべからざるも、亦地方民が協心戮力、一致して之が發展に努力したるに因るものたるは、論を俟たざる所也。玆に小傳を叙せんとする東谷種槌氏の如き、多年同地商工業の爲に盡して、市勢發展の上に寄與する所尠からざりし一人にして、苟くも宇部市の現狀に就て語らむとするものゝ、斷じて逸すべからざる人材なりとす。

氏は先代勝之進の長男として、明治二年九月二日を以て呱々の聲を揚ぐ。資性慧敏穎悟にして、少時既に群童に伍して頭角を擢んじ、鳳雛として、鄕黨の間に其未來を矚望せらる。長じて家業を援け、後土管、煉瓦、セメント等の製造販賣に從事し、拮据經營に任じ、近代工業の興隆に伴ひ、土木建築等の事業各地に興るに及んで、其取扱に係る之等商品の需要大に起り、此好況の波に乘じたる其事業は漸次發展增大を加へ、同地一帶に拔くべからざる基礎を築き、今や業界の重鎭たるに至れり。現時宇部セメント、沖ノ山炭鑛各株式會社の有力なる株主たり。

公共、公同の念に厚く、昭和八年二月、宇部市道路敷地として、土地一反二畝を寄附したる廉に依り、其功を錄せられ、同年十二月二十八日勅定の紺綬褒章を賜り、家門の榮譽を輝かせり。其他日本赤十字社を始め、社會、教育等各種の公益事業に賞賛して、之に私財を投じ、或は神社佛閣に淨財を寄進せること枚擧に遑あらず。

家庭には夫人イネ、嗣子武人、同夫人ハツ、令孫愛子あり、武人氏は東北帝國大學工科を卒業したる秀才にして、現時沖ノ山炭鑛株式會社取締役として、鑾妙縱橫なる才腕を揮ひ、業界に重きを爲し、大なる存在を示しつゝあり。

篤農表彰受賞者

故 玉置良直氏

明治九年七月二日生
奈良縣吉野郡十津川村大字折立

略歴

南朝と由緒深き、大和國十津川の旧封家にして、代々林業を營み、多年同地方の産業、教育の發展に盡し、夙に政治方面にも多大の功績を貽したる故玉置良直氏は、先代高良の長男として、明治九年七月二日を以て、現在の地に生る。天資英邁にして、才識並に高く、能く温厚篤實の性を享け、夙に折立小學校を卒業後、同地の村役文武館並に泊園書院に學ぶ。明治二十七年四月、十九歳の時、笈を東都に負ひ、早稲田專門學校に入りて學を修め、同二十九年五月歸郷す。爾來家業に與はる一方、同三十五年七月十津川村會議員に選ばれたるを始め、同三十六年以來、大和山林會評議員、奈良縣會議員、吉野郡會議員、五條町外六箇町村組合會議員等に擧げられ、大正元年十一月十津川村長に就任し、地方自治の爲に多大の功績を擧ぐ。大正九年五月衆望を負ふて、衆議院議員に選出せられ、國政に參與するに至る。其間日本赤十字社奈良支部十津川村分區委員、愛國婦人會奈良支部十津川村委員を始め、吉野税務所々得税調査委員、帝國軍人後援會十津川村分會長、日本海員被濟會十津川村委員、大日本蚕絲會奈良地方委員、奈良地方森林會議員等の公職に就き、貢獻する所頗る大なりき。

公共、公利の念に厚く、大正十四年六月、奈良縣吉野郡折立小學校建築費として、金一萬圓を寄附したる厚に依り、昭和五年一月二十四日勅定の褒賞を下賜の光榮に浴し、明和三年六月奈良縣十津川中學校文武館建築費中へ、金一萬圓を寄附したる外、或は神社佛閣に浮財を寄進し、或は教育、産業發展の爲に私財を投じ、又罹災、赤十字社、救濟會、大戰記念事業其他關東大震火災、北海道の水害等に金品を寄贈したること枚擧に遑あらず。爲に昭和八年十一月帝國教育會より多年の功勞顯著なりとして、褒彰狀に添へて功勞章を授けられたる外、賞勳局總裁、知事等より木杯、記念章、褒狀、表彰狀、感謝狀等を贈られたること、亦擧げて數ふべからず。

神敬を率ひ、閑莽を趣味とし、餘生を送りつゝありしが、昭和九年九月二十一日、病を以て遽逝として逝く。而も鄉土に盡したる氏の鉾芳、眞々として尚生きて殘れり。

故 玉置子朔氏

明治廿七年七月廿四日生
奈良縣吉野郡十津川村大字折立

略歴

大和國十津川村一色の地は、奈良縣の南端吉野郡の西南に位し、嘗て紀州に屬し、山岳重疊を繞らして紀伊國に對で、他郡に往々十津川に非ざる者を以て遮斷として遠く、而も鄉土に盡せる人、我國の歴史上最も名譽ある南朝との緣由深く、近世

立小學校建築費として、金一萬圓を寄附したる廉に依り、昭和五年一月二十四日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴し、昭和三年六月奈良縣十津川中學校文武館建築費中へ、金一萬圓を寄附したる外、或は神社佛閣に淨財を寄進し、或は教育、産業發展の爲に私財を致し、又軍隊、赤十字社、被濟會、大禮記念事業其他關東大震火災、北海道の水害等に金品を寄贈したること枚擧に遑あらず。爲に昭和八年十一月帝國教育會長より多年の功勞顯著なりとして、表彰狀に添へて功勞章を授けられたる外、賞勳局總裁、知事等より木杯、記念章、褒狀、表彰狀、感謝狀等を贈られたること、亦擧げて數ふべからず。

神教を奉じ、圍碁を趣味とし、餘生を送りつゝありしが、昭和九年九月二十一日、病を以て溘焉として逝く。而も鄕土に盡したる氏の餘芳。脈々として尙生きて殘れり。

林業

玉置子朗氏

明治廿六年七月廿四日生
奈良縣吉野郡十津川村大字折立

略歷

大和國十津川村一帶の地は、奈良縣の南部吉野郡の西南に位し、近く紀州に接し、山岳壇帶を縫ふて紀伊國に出で、熊野灘に注ぐ十津川に沿ふ蓁爾たる山間の一村落に過ぎざるも、我國の歷史上最も色彩に富める南朝との緣由深く、近世に至りては天誅組の義擧に因りて、其名彌々江湖に籍甚するに至れり。土地避遠にして稍交通の便を缺くと雖も、人情頗る淳朴にして、特に全村を擧げて皇室に對し奉り、尊崇勤王の念に厚きこと、古來よりの傳統とも稱すべく、又産業としては林業最も顯はれ、就中杉檜の如きは、我國內に於て最も優良なる材を産するを以て、其名聲夙に天下に顯然たり。玆に小傳を叙せんとする玉置子朗氏一家は、多年此地に在りて林業を營み、第一流の業者として、村民の間に人望洽き舊家、素封家として聞ゆ。先代良直氏は曾て十津川村々長として、幾多の治績を擧げ、多年村會、郡會、縣會の各議員を歷任し、又興望を擔ふて衆議院議員に推され、國政に參畫したる人材にして、嘗に地方政治に寄與したるのみならず、林業を始め同地方産業の開發に盡し、又教育事業の外、森林會、日本赤十字社、海員被濟會、愛國婦人會、帝國軍人後援會等の事業に翼贊して、多大の貢獻を致したる先覺者たりき。

當代子朗氏は。明治二十六年七月二十四日を以て、奈良縣玉置保三郎氏の長男として生れ、後良直氏の養子となり、先代の歿後を承けて家督を相續し、父祖の遺業たる林業に從事す。資性溫厚篤實にして、克く家業を護り、其經營を誤らざるのみならず、爾來家運愈々隆盛を加へ、以て今日に至れり。

公共、公同の念に厚く、昭和十四年四月、日本赤十字社奈良支部資金として、金一千圓を寄附したる廉に依り、同年十月二日、褒狀を授與せらるゝの光榮に浴したる外、各種の社會事業に盡し、之に私財を投じたること枚擧に遑あらず。

當家の宗教は父祖以來の神教にして、氏は謠曲を趣味とし、其技倆亦凡ならずと稱せらる。家庭にはくに夫人との間に、和歌山縣新宮中學を卒へ、東都に遊學中の長男春雄君、新宮高女在學中の八重孃あり。

中山恒三郎

元日本鋼工株式會社、株式會社木内同潤店各社長

褒賞受賞者

故 中山恒三郎氏

明治十年十二月六日生
横濱市港北區川和町八九〇

略歴

氏は神奈川縣の人先代中山恒三郎氏の長男にして、神奈川縣都筑郡田村川和に生る。

中山家は藩奉時代より醤油醸造を業となし傍ら味噌をも製造せしが、のち清酒醸造を發ね、更に呉服雜貨類をも販賣するに至り、生活必需品の多くは、概ね中山家に至れば整よの利便を備へしかば、村内近隣に好評を博し、家業日につぎ興隆して、家財また漸次増大し、盛名大いに揚れり。

氏は幼少の頃より早くも非凡の商才を發揮して家人店員を監督たらしめるを常とせしが、學業を卒るや先考を扶けて家業に精勵し、明治三十一年先代恒三郎氏の亡後を繼ぎて家督を相續、前名儀平を改めて恒三郎を襲名するに及んで、名實ともに中山家の主柱たり。自ら店頭に立ちて店員を督勵し、客に接して懇切、事ら顧客本位の營業方針を堅持せしかば、家運更に大に昇り、堅實なりし氏は、半面積極進取の氣に富み、家業に精勵する傍ら、餘財を投じて各種の業界に進出し、神奈川農工銀行、太陽銀絲株式會社の重役たりしほか、日本鋼工株式會社、株式會社木内同潤店、横濱製絲株式會社を創立また社運發展し、晩年これが社長または重役たり。その金融業界、海運界、工業界、製糸業界に進出せしところ夥からず、また推されて都築郡會議員となるや、至誠を披瀝して郡政の伸展に盡し、其の治績大いに見るべきものあり、神奈川縣下實業界における重鎮たりしのみならず、また政界においても重きをなせしが、昭和五年逝く。

生前大正十年十二月神奈川縣都築郡役所敷地として土地一段一畝十六餘歩を寄附せし廉に依り、昭和二年六月一日勅定の緑綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主恒三郎氏は氏の長男、大正三年十二月の出生、昭和五年六月家督を相續、前名万太郎を改めて恒三郎を襲名。父祖の業を継ぎ指揮經營に精勵しつつあり。

株式會社大阪屋呉服店取締役會長、株式會社野村銀行、株式會社大阪屋證券、株式會社大阪屋商事各取締役、同社會長、大阪大同瓦工場、中部合同電氣株式會社監査役

褒賞受賞者

西田政之助氏

明治十一年一月十八日生
大阪府大阪市東区今油町柳川
大阪市港区西九条一丁目百七番地

略歴

大阪實業界に於ける豆腐の家に生れ、明治の末東京に進出

福田政之助

株式會社大阪三品取引所監査役、綿屋商事株式、福田合名各會社々長、大阪大理石工業、中華企業各株式會社取締役

紺綬褒章受賞者

福田政之助氏

明治十一年一月十八日生
京都府久世郡宇治町塔川
營業所　大阪市東區石町一丁目廿七番地

略歴

大阪堂島に於ける巨商の家に生れ、明治の末葉東京に進出し、同地投機界に入りて隆々たる業績を擧げ、同業者を瞠目せしめたるが、業を營むこと僅に十年にして、感ずる所ありと稱し、未練氣も無く廢業して大阪に歸り、爾來父祖の產を護りて多く表面に出でず、今や都會の風塵を避けて山紫水明の地に、悠々自適の生活を送りつゝある、最も異色に富める人物を福田政之助氏と爲す。

當家は代々綿屋と號して米穀商を營み、巨萬の資產を有する舊家として知らる。先代治兵衛氏は投機的商才に加ふるに、頗る覇氣に富み、縱橫の手腕を揮ひて、明治初年以來勃發せる幾多の企業に投資して巨萬を積みたる風雲兒なりき。

政之助氏は其長男として、明治十一年一月十八日を以て生る。資性溫雅英明、夙に大阪高等商業學校に學び、卒業後實地研究の爲大阪松井商店に勤務す。明治四十四年東京に出で株式取引店を經營、大正八年廢業歸阪し、爾來先代以來の關係上、大阪三品取引所の一監査役として、單に其名を列ぬるのみにて一切の投機界より隱退し、綿屋商事其他各會社に關與せるも、多くは自ら表面に立たず。殊に大正十三年、夫人を失ひて以來、再び娶らず。書畫骨董を愛玩して閑寂なる生活を營み、高風甚だ掬すべきものあり。而も自己の富豪たるの地位本分を能く理解して、社會に盡すべき道を誤らず。濟生會、同仁會を始め、大阪府或は市の社會事業に盡瘁し、卒先私財を寄附したる金額は今日までに數十萬圓に上ると稱せらる。特に昭和二年三月には恩賜京都南物館へ千佛多寶石幢一基を寄附したる廉により、同三年九月廿四日勅定の紺綬褒章を、又大正十二年九月關東大震災救援費として、金一萬圓を寄附し、昭和五年四月十日飾版一箇を下賜せらるゝの光榮に浴せり。

現時氏は深く藏れて事業の表面に現はれざるも、華城實業界に隱然重きを爲し、各方面より敬愛の念を寄せられつゝあり。氏の如き寔に當代稀に覩る特異の存在と稱すべし。

家業に精勵する傍ら、餘財を投じて各種の業界に進出し、神奈川農工銀行、太陽製絲株式會社の重役たりしほか、日本輪工株式會社、株式會社木内回漕店、横濱製藥株式會社を創立または經營し、晩年これが社長または重役たり。その金融業界、海運界、工業界、製藥界に盡瘁せしところ尠からず、また推されて都築郡會議員となるや、至誠を披瀝して郡政の伸展に資し、其の治績大いに見るべきものあり、神奈川縣下實業界における重鎭たりしのみならず、また政界においても重きをなせしが、昭和五年逝く。

生前大正十年十二月神奈川縣都築郡役所敷地として土地一段一畝十六餘歩を寄附せし廉に依り、昭和二年六月一日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

當主恒三郎氏は氏の長男、大正三年十二月の出生、昭和五年六月家督を相續、前名芳太郎を改めて恒三郎を襲名。父祖の業を繼ぎ拮据經營に精勵しつつあり。

大國製紙株式會社々長、美濃紙工組合長、美濃町會議員

褒賞受賞者

松久永助氏

明治廿二年十一月十五日生
岐阜縣武儀郡美濃町

略歴

古來有名なる美濃紙の製造販賣を業とし、其興隆に努力したる松久永助氏は、夙に斯業の功勞者たるのみならず、公共公同の事に盡して、廣く其名聲を近鄰に知らるゝ篤行家たり。

氏は明治二十二年十一月十五日、岐阜縣人加藤永治郎氏の二男に生る。資性剛情にして少年の頃既に群童の間に異彩を放ち、其將來を囑望せらる。稍長ずるに及び、舊下屈指の資産家先代永助氏に其才幹を認められ、請はれて松久家の人となり、明治三十九年三月岐阜中學卒業後、實家の業務たる紙商の經營に當り、大正十四年十月先代が正博と改名讓退したる後を承けて、家督を相續し、前名秀三を改め襲名す。同十五年一月株式會社美濃銀行取締役に擧げられ、地方金融界に多大の力を盡せり。氏は居常殖産興業に心を用ゆること深く、殊に本邦特有の名産にして、且同地方唯一の産業たる美濃紙が近來著しく粗製濫造に陷り、市場に於ける聲價頓に下落し、前途甚だ憂うべきものあるを看取するや、卒先同業者を勸誘して、同業組合の組織に奔走したる結果、遂に之を成立せしめ、推されて組合長に就き、懇意なる規約を設けて粗製濫造を減むると共に、取引先と連絡して能く其要價を維持するに努め、遂に克く所期の目的を達成することを得たり。

爾來同業者を誘導して、常に優良なる商品の産出に力を注ぎ、或は營業の指導に任じ、或は金融の圓滑を圖り、又各地に出張して販路の開拓に力むる等盡瘁する所極めて大なり。

實家は父子二代に亘りて公共の事に盡し、昭和十一年八十二歳の高齢を以て逝ける先代正博氏は、生前岐阜縣武儀中學校敷地買入及整地費として金一萬圓を寄附し、大正十四年四月十六日勅定の紺綬褒章を拜受したる篤行家たりしが、當代永助氏も亦昭和三年三月同郡美濃小學校用講堂一棟を寄附したる縁に依り、同年九月二十四日勅定の紺綬褒章を賜はり、重ね〴〵家門の榮譽を輝かせり。其他愛國婦人會特別會員に推薦せられたる外、日本赤十字社、濟生會より特別有功章を贈られ、又神社佛閣に浮財を寄進したること枚擧に遑あらず。洵に吾篤の一門と言ふべし。

美濃町會議員、株式會社松久才治郎商會社長、大國製紙株式會社取締役、內閣許可美濃紙同業組合組長、岐阜縣紙業組合聯合會長

紺綬褒章受賞者

松久才治郎氏

明治三十二年九月三日生
岐阜縣武儀郡美濃町本郷町

略歴

紙質の改良發展にして、用途擴張も實を美濃紙の本場として名聲天下に冠絶せる岐阜縣美濃町に在りて、製紙原料商を營み、業界に縦横せるもの、之を松久才治郎氏其人と爲す。

立せしめ、推されて組合長に就き、嚴重なる規約を設けて粗製濫造を戒むると共に、取引先と連絡して鋭意其聲價を輓回するに努め、遂に克く所期の目的を達成することを得たり。爾來同業者を誘導して、常に優良なる商品の產出に力を注き、或は營業の指導に任じ、或は金融の圓滑を圖り、又各地に出張して販路の開拓に力むる等盡瘁する所極めて大なり。

當家は父子二代に亘りて公共の事に盡し、昭和十一年八十二歲の高齡を以て逝ける先代正博氏は、生前岐阜縣武儀中學校敷地買入及整地費として金一萬圓を寄附し、大正十四年四月十六日勅定の紺綬褒章を拜受したる篤行家たりしが、當代永助氏も亦昭和三年三月同郡美濃小學校用講堂一棟を寄附したる廉に依り、同年九月二十四日勅定の紺綬褒章を賜はり、重ね〳〵家門の榮譽を輝かせり。其他愛國婦人會特別會員に推薦せられたる外、日本赤十字社、濟生會より特別有功章を贈られ、又神社佛閣に淨財を寄進したること枚擧に遑あらず。洵に奇篤の一門と言ふべし。

美濃町商工會々長、株式會社松久才治郎商店社長、大福製紙株式會社取締役、內閣印刷局指定製紙原料商

紺綬褒章受賞者

松久才治郎氏

明治三十二年九月三日生
岐阜縣武儀郡美濃町本住町

略歷

紙質の堅牢優美にして、用途最も廣き美濃紙の本場として名聲天下に冠絕せる岐阜縣美濃町に在りて、製紙原料商を營み、業界に雄飛せるもの、之を松久才治郎氏其人と爲す。

氏は同町松久正博氏の二男として、明治三十二年九月三日を以て生れ、後分家して一家を樹つ。夙に名古屋市立商業學校に學び、本科四年終了後、製紙原料商として立ち、拮据經營、紙質の改良と販路の擴張に努め、以て美濃紙の聲價を高むると共に、其業況亦自ら大を加ふるに至り、初め個人經營たりしを昭和十三年十一月組織を改めて株式會社松久才治郎商店とし、其社長たる外大福製紙株式會社取締役として業界に活躍し、又美濃町商工會々長に推されて同町の發展と產業の振興に多大の貢獻を致し、今や同地產業界の重鎭たるに至れり。昭和五年以來引續き、內閣印刷局指定商人として、我國兌換券を始め、各種有價證券用紙の原料たる三椏皮の製造納入を爲し、其原料の紙質優良なるの故を以て、同十四年內閣印刷局長より、感謝狀を贈らる。以て氏の取扱に係る原料の、如何に優秀なるかを想見すべし。

先考正博氏は、美濃町產業界の元老として知られ、公共事業に盡して勅定の紺綬褒章を賜はりたる篤志家たりしのみならず、本家を相續せる義兄永助氏も、公同の爲に私財を致して、同樣の榮に浴したるに加へて、氏も亦公共公同の念に厚く、昭和十四年二月岐阜縣武儀郡美濃尋常高等小學校災害復舊建築費として、金一萬圓を寄附したる廉により、其功を錄せられて、同年五月八日、勅定の紺綬褒章下賜の光榮を擔へり。又同年十月七日、同校特別敎室式道館一棟を寄附し、美濃町長鈴木有三氏より感謝狀を贈られたる外、各種公共事業に盡し、之に私財を致し、又神社佛閣に淨財を寄進したること、擧げて數ふべからず。

一家一門悉く是れ忠誠の士にして、國家奉公の念に富むこと斯の如くなるは、世上蓋に罕に觀る所にして、氏が啻に商才に豐かにして經營の能に富める一般商賈と、大に其撰を異にするものあるを見るべく、其篤行は以て衆人の龜鑑と爲すに足るべし。

寺井四郎兵衛

金物、陶器、硝子商

維新変革功労者

寺井四郎兵衛氏

函館市末廣町八八

略歴

明治維新直後において、北門の地北海道の開拓を目指して雄飛修往の事に出づるものは相當の数にのぼりしが、特には本海沿岸諸藩人にして、新天地に名を成し功を樹つるもの多かりき。

寺井四郎兵衛氏の先考先代四郎兵衛氏もまたその一人。夙に雄圖雄略を出で、明治維新の風雲参を告げて、國内物情騒然たる中にありて、克く國家の前途を洞察し、敢然起つて北海道開拓の偉業に従ふ。近衛その師事を喰ひしも、豈はからんや氏の先見の明は、明治維新の新政となり、諸政一新北海の地また文化の薫陶を受けて、金運なる進歩を遂げ、先代の意圖着々功を奏し、函館における有數の大商店たるを得たり。

先代四郎兵衛氏斯くの如くにして、多年の苦闘の結果、漸くにして基礎を確立せしが、いまだその志を全く伸ぶることなくして、方に大發展期に入らんとする際、病を得て薨る。四郎兵衛氏は當時年齢漸く弱冠に達せしばかりにして、父業を継ぎてこれを主宰するには、餘りにも若きに失し、多くその前途を危みしに拘らず、先考の血を継ぎ剛毅果斷の氣に富みし氏は、毅然なる決意のもとに父業を継承し、近親同族ならびに店員一同に告ぐるに、一致協力のもと一心同體の至誠を以て、家業の興隆に邁進せんことを以てし、また指導よろしきを得んことを願望せり。列する者その熱情と決意に動かされ、大局の勢をとらんことを誓へり。

斯くて氏は一意專心家業に精勵して怠らず、信用厚に信じて加はり、家業また益々發展し、先考の名を挙しめざりしのみならず、家門をして頗々榮光あらしめたり。

函館市における有數同業の大商家として、金物、漆器、雑貨の廣範圍にわたる營業に、多大の成功をかち得たる、氏の同市における信望また嘱みに加はり、時に應々なる公職に推されしも、氏は断じてこれに就くことなく、專ら實業關係の公職にのみ至誠を盡し、業界發展に寄與するを、唯一の天職となせり。果床しくも崇厚なる人の人格を窺ふに足るべし。

氏また社會公共に奉ずるの念厚く、大正十二年九月函館市近郊數村を以て土地六段一畝を寄附せし歴に依り、昭和三年十月二十四日勅定の維新変革功労者を賜ふの光榮に浴す。

貴族院議員、商工會議所副會頭、石川縣金澤市、中島商店合名會社々長、加賀合同銀行、鹽三銀行、九谷燒會社、金澤銀行、電力會社、金澤電気瓦斯株式會社取締役、明治印刷、北國新聞合名會社重役、兵庫

維新変革功労者

中島德太郎氏

明治十四年一月二日生
金澤市十間町八番地

略歴

ならびに店員一同に告ぐるに、一致協力のもと一心同體の至誠を以て、家業の興隆に邁進せんことを以てし、また指導よろしきを得んことを懇望せり。列する者その熱情と決意に動かされ、犬馬の勞をとらんことを誓へり。

斯くて氏は一意專心家業に精勵して怠らず、信用舊に倍して加はり、家業また益々發展し、先考の名を辱しめざりしのみななず、家門をして彌々榮光あらしめたり。

函館市における有數屈指の大商家として、金物、漆器、雜貨の廣範圍にわたる營業に、多大の成功をかち得たる、氏の同市における信認また頓みに加はり、時に種々なる公職に推されしも、氏は斷じてこれに就くことなく、專ら實業關係の公職にのみ至誠を盡し、業界發展に寄與するを、唯一の天職となせり。奥床しくも清廉なる人の人格を窺ふに足るべし。

氏また社會公共に奉ずるの念厚く、大正十二年九月函館市道路敷地として土地六段一畝を寄附せし廉に依り、昭和三年十月二十四日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

貴族院議員、商工會議所顧問、加賀製紙、石川縣農業、中島商店各株式會社々長、加能合同銀行、第三信託、丸敬機業、倉庫精錬、昭和貿易、金澤電氣軌道各株式會社取締役、明治印刷、北國新聞各株式會社監査役、紙商

紺綬褒章受賞者

中島德太郎氏

明治十四年一月二日生
金澤市十間町八番地

略歷

加賀國金澤百萬石の城下に於て、代々紙問屋を營める舊家にして、現時北陸隨一の商賈として知らるゝもの、之を中島家と爲す。

當主德太郎氏は明治十四年一月二日、同縣人長生嘉三郎の弟として生れ、先代德太郎の養子となり、大正十一年先代の歿後を承け、家督を相續し德太郎を襲名す。資性明敏にして、商才に秀で、進取の氣に富み、家業を繼ぐや、愼重なる注意と熱誠なる努力を以て經營に當り、其業績日に月に發展して、新聞用紙の如き、福井以北新潟に至る北陸各都市の需要は、金澤に於ける氏の店舖を中心として供給せらるゝに至り、大正十一年加賀製紙株式會社取締役となり、同十三年四月推されて社長に就任、爾來引續き其任に在る外、現時頭記各會社重役として業界に重きを爲しつゝあり。一方大正十四年金澤市信用組合理事に就任、昭和二年鐵道局運輸委員會委員を囑託せられ、同三年社團法人日本鐵道協會東海支部理事に、同五年眞宗教育財團理事に擧げらる。曩に大正十四年三月、金澤商工會議所議員に當選、同年四月常議員に選ばれ、昭和四年十一月同會頭に就任し、爾來十年間の長きに亘り、同市商工業の爲に盡瘁する所大なり。同十四年十一月退職、同十五年一月以來其顧問たり。昭和十四年九月、貴族院議員に勅任せられ、國政に參與しつゝ今日に至れる外、國民精神總動員石川地方實業委員會、石川縣保健衛生調査各委員、恩賜財團軍人援護會石川支部評議員、京都光華女學院監事として盡しつゝあり。

國家奉公の念頗る厚く、特に教育に貢獻する所多く、昭和八年十一月帝國教育會五十周年記念式に際し、教育功勞者として表彰、功勞章を受け、昭和三年九月、大禮記念金澤市立圖書館建設の擧あるや、之が建設費として、金八萬圓を寄附したる廉に依り、同年十月十八日勅定の紺綬褒章下賜の光榮に浴せり。

家庭には夫人美津子、養子雄吉氏あり。夫人は明治廿五年出生金澤第一高女出身にして、賢夫人の聞え高く、雄吉氏は高岡高商卒業の秀才たり。

寺田省歸

北海林産株式會社、小樽運送株式會社各社長、旭川市街軌道株式會社代表取締役、旭川電氣軌道株式會社、北海水力電氣株式會社、北海道拓殖株式會社、小樽鹽業株式會社各取締役、樺太電氣株式會社、雨龍電力株式會社各監査役

紺綬褒章受賞者

寺田省歸氏

安政四年四月生

北海道小樽市富岡町二ノ二〇

略歴

氏は茨城縣の人寺田伊兵衛氏の二男、安政四年四月茨城縣相馬郡井野村に生る。明治二十六年家督を相續。寺田家は農を業となせしも、二男たる氏は夙に教育家たらんことを志して夙に千葉師範學校に學び、明治十年優秀なる成績をもつて同校を卒業するや千葉、山形縣下の諸學校訓導または校長を歷任し、その非凡の才腕を發揮せしかば、同十七年拔擢せられて京都府屬兼京都府高等女學校教諭に任ぜられ、その任にあること六ヶ年にして教育界を去つて實業界に身を投ぜんことを期し、同二十三年これを辭して初かに再飛躍の時機を覘ふ。

同二十五年榎本武揚、北垣國道ら北海道開發を目的として北辰社を結成し、小樽における十萬餘坪の所有地を宅地となすの工を起すや、選ばれて北辰社主幹となりて、事業の一切を主宰するに至れり。同市中央に位する稻穗町界隈の地は、實に氏の支配によりて開發せられしものなり。

北辰社の主幹として活躍の基礎を得たる氏は、漸次小樽において重きを成し、小樽市市區改正の大事業起るや、これが達成に盡瘁せしところ尠からず、衆望遂に氏をして小樽商業會議所議員、同區會議員、同議長代理または學務委員、常設委員、其の他諸公職に就かしめ、ついで大正六年に至りては、推されて衆議院議員たり。政友會に屬し多年にわたりて同會北海道支部長、同顧問の重任に就く。

關係事業にいたりては、その範圍極めて廣く、その主なるもののみを擧ぐるも頭書の如く多數によれり。その實業界、政界の發展伸張に寄與せし功績は洵に偉大なるものありと謂ふべく、北海道における斯界の大長老たり。

大正十年二月宗蘭區道路敷地として土地一町六段二畝七歩を寄附せし廉に依り、昭和四年五月十七日勅定の紺綬褒章を賜ふの光榮に浴す。

北海道運送株式會社社長、北紀銀行頭取

紺綬褒章受賞者

土井忠兵衛氏

明治十六年七月七日生

三重縣北牟婁郡尾鷲町三五九

略歴

○大正十一年十月より同十三年九月に至る間三重縣立尾鷲高等女學校建築費として金貳萬六千圓を寄附せし廉に依り、同十五年十一月十六日勅定の紺綬褒章を賜ひ、其の善行を表彰さる

○昭和二年六月三重縣立尾鷲中學校建築費として金壹萬圓